資料2

指定研究（2年次）

成果の概要報告書・資料

国語・数学・道徳・美術・技術･家庭・特別活動・総合的な学習の時間

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）
（美術・技術･家庭・特別活動・総合的な学習の時間は指定の 2 地区のみ）

指定研究（１年次）

経過の概要報告書・資料

社会・理科・英語・音楽・保健体育・学校保健

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）
（音楽・保健体育・学校保健は指定の 2 地区のみ）

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　大島　彩弥香
（学校名：　柏崎市立鏡が沖中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　国語

２　郡市名　柏崎市刈羽郡　　３　会場校　柏崎市立第二中学校

４　研究主題

根拠を示しながら作品に対する新たな見方・考え方をもつ生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

令和４年度の県の重点目標である「深い学びにいたる授業～学び合う授業を通して～」を受けて、上越地区の研究主題は「根拠を示しながら、作品に対する新たな見方・考え方をもつ生徒の育成」と設定した。「深い学びの姿」を「自分の考えをもつこと」「作品に対して新たな価値付けをすること」と捉えている。また、国語科指導の核となる論理的な思考の育成ために「根拠を示す」ということを重視した。

令和３年度の県の重点目標は、「深い学びにいたる学び合う授業」であったが、プロセスである学び合いがゴールになってしまっている現状、授業を通して生徒がどの容易に変容したか、深い学びの姿が見えないという課題が残ったために、令和４年度は「学び合い」という言葉を副題に変更したという経緯がある。令和３年度の上越地区の研究主題は「根拠と意見のつながりを適切に判断し、自分の考えを表現する活動を通して新たな価値に気付く生徒の育成」であったが、深い学びの姿、ゴールイメージをより具体的にする必要性を感じ、言葉を平易なものとした。

６　研究の方法と内容

文学教材の学習において、根拠となる表現を具体的に示しながら、自分なりの作品解釈を作り上げることを学習課題とした。自他の考えを表現する活動を通して自分の判断を客観的に確認したり問い直したりして、生徒が作品に対して新たな価値付けをする、深い学びの姿を目指す。

深い学びの姿を達成するための手立ては次の三つである。①批評的な視点作品中の言葉に着目し、意味を問い直したり、比較したりする読みの姿勢をもつことで、文脈の中での言葉の意味を捉えたり、作者の意図を読み取ったりすることができる。②問い立て生徒の疑問を生かし、生徒自ら解決したい「問い」を設定することで主体的な学習を促し、課題意識をもたせる。また、学習課題(大きな問い)に取り組む前段階として生徒が自ら設定した小さな問いに取り組むことが、作品中の言葉の吟味、根拠を精選する学習になると考える。③学びの視覚化気付きや疑問点を言語化することで１時間の授業を通して学んだことを認知し、それを積み重ねていくことで、考えの更新や深化につなげる。

７　研究の成果と課題

生徒の疑問をもとに「問い立て」をしたこと、また探究方法を生徒自身が選択できるようにしたことで生徒主体の学習活動となり、学習意欲の向上につながることがわかった。「知りたい」「話したい」「聞きたい」という気持ちをもって生徒が授業に臨み、それを行動に表している様子を見て取ることができた。また、「問い」の探究学習は、作品中の言葉の意味を文脈の中で理解したり、作品の構成に注目して読むことで人物観や作品観を批評的に捉えたりする力を鍛えるために有効な授業であったと考える。さらに、目指す生徒の姿を常に意識して研究することで、積極的で具体的なアプローチができたと感じる。

教科書本文を根拠としてメロスが走る理由を語ることができたので、研究主題である「根拠を示しながら、作品に対する新たな見方・考え方をもつ生徒の育成」は達成できた。一方で、根拠を複数箇所あげ、それらを結び付けて論じることで、意見をより確かなものにする、もう一段階上のレベルを目指したいという思いが生まれた。

８　運営の成果と課題

昨年度の反省を踏まえて、委員内での役割分担を行ったことで委員会の運営をスムーズに行うことができた。また、研究テーマと目指す生徒の姿を委員内で具体的に共有して研究を進めたことで研究が深まった。公開授業を２回行ったことで、研究授業で行う単元の事前研究を十分に行うこともでき、授業者の実質的な負担も軽減した。

資　料

1　部会名　国語

2　郡市名　柏崎市刈羽郡　　3　会場校　柏崎市立鏡が沖中学校

4　研究会開催期日　令和　4　年　１１　月　３０　日（　水　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	佐藤　多佳子
(2) 研究推進責任者	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	大島　彩弥香
(3) 会場校責任者	柏崎市立第二中学校・教諭	小山　未来
(4) 県･郡市指導主事	柏崎市教育委員会・指導主事	関根　一美
(4) 研究推進委員（授業者）	柏崎市立第二中学校・教諭	赤沼　祐子　（授業者）
	柏崎市立南中学校・校長	池嶋　正隆
	柏崎市立第三中学校・教諭	前澤　明里
	柏崎市立瑞穂中学校・教諭	相澤　弘恵
	柏崎市立北条中学校・教諭	上山　晃平
	柏崎市立第一中学校・教諭	堀井　優希
	柏崎市立第二中学校・教諭	根津　礼子

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６月３０日/二中	10	顔合わせ・研究テーマ、日程確認等
2	９月１４日/二中	7	公開授業指導案検討会
3	９月２７日/北条中	7	公開授業①　上山　晃平教諭「走れメロス」
4	１０月１３日/二中	9	公開授業指導案検討会
5	１０月２５日/三中	8	公開授業②　前澤　明里教諭「走れメロス」
6	１１月１日/二中	9	研究授業指導案検討会
7	１１月３０日/二中	9	研究発表会
8	１２月２０日/二中	10	研究のまとめ・旅費精算

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　２９　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　5　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　１７　）名	(4) 教育委員会・センター	（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　5　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年３組	走れメロス・「問い」の探究を通して作品を解釈する	赤沼　祐子

9　全体協議会

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	「問い立て」が深い学びの姿を達成するために有効だったか	上越教育大学　教授 佐藤　多佳子　様	瑞穂中学校 相澤　弘恵	鏡が沖中学校 大島　彩弥香

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小嶋　祐子
（学校名：　長岡市立西中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　国語

2　郡市名　長岡・三島　　3　会場校　長岡市立川口中学校

4　研究主題

言葉に着目し、対話を深めながら読みを創り上げる生徒

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

県中教研の重点目標「『見方・考え方』に着目し、『深い学びにいたる学び合う授業』によって生徒に確かな資質・能力を育む研究活動を進める」、長岡市国語教育研究会の研究主題「言葉の力を追究し、自分の読みを創る授業」を受け、「『言葉による見方・考え方』を働かせる姿」、「深い学びにいたる学び合う授業」の具現を目指し、研究主題を「言葉に着目し、対話を深めながら読みを創り上げる生徒」と設定した。

ともすると、イメージや一つの言葉から「読めたつもり」になってしまう生徒たちが、文脈の中での言葉がもつ多様な意味、言葉と言葉との結びつきから生まれる広がりや深まりを感じ取り、言葉を根拠にした読みの問い直しや深まりが生まれる対話を通して、自分の読みを創り上げていく姿を目指した。

6　研究の方法と内容

研究 1 年次の成果と課題をもとに、2 年次は「深い学びにいたるポイント」を、

(1) ずれ（対立や多様性）が生まれる学習課題の設定
(2) 全体にも細部にも目が向く「全文シート」の活用
(3) 生徒の対話や読みを深める教師のコーディネート

の 3 点に絞り、1 年次と同様に、指導者や推進委員による模擬授業を取り入れて教材研究を深めた。「『言葉による見方・考え方』を働かせる」ということや「深い学び」ということを委員自身が実感しながら、目指す姿を具現する手立ての在り方を検討し、委員の実践やプレ授業でその有効性を探りながら授業づくりを進めた。

7　研究の成果と課題

(1) 追究するに足る、ずれが生まれる学習課題を設定し、そのずれを顕在化することが、生徒の追究の意欲を高め、対話や読みを深めていくことにつながった。自分の考えを支える根拠を明確にしようとしたり、他の意見の根拠にも目を向けながら最後の最後まで考え続けたりと、学習課題の解決のために言葉(叙述)に着目しながら真剣に文章と向き合う姿、他の考えを聞こうとするとともに自分の考えを伝えようとする姿が見られた。
(2) 文章全体を俯瞰しながら細部にも目を向けることができる「全文シート」を使って、ラインを引いたり書き込みをしたりしながら学習課題について追究することで、生徒は、物語の構成や展開をとらえながら細かな表現に意味を見いだしたり、複数の根拠を結び付けながら自分の考えを説明し

たりしていた。一部の表現やイメージからの浅い読みに留まることなく、言葉に向き合い、「言葉による見方・考え方」を働かせて読みを深めていく生徒の姿から、全文シートの活用の有効性が感じられた。「考えやすかった」「他の単元でも使いたい」という生徒の声も聞かれた。また、書き込みによって自他の考えを文章と併せて可視化することは、単なる言いっぱなしではない、対話の深まりにもつながった。

このシートは、生徒の学びの記録である。生徒は自分の読みの深まりを自覚することができ、授業者は一人一人の生徒の読み（読みの変容）のみとりに活用することができた。

(3) 「深い学びにいたる学び合う授業」を具現するには、教師の臨機応変なコーディネートが肝要であることを提案することができた。生徒の主体性という言葉の下に、小グループでの話合いや、全体での考えの発表で終わってしまう授業も少なくない。しかし、全体での対話の中で意図をもって方向性を示唆したり論点を焦点化したりするなどの教師のコーディネートがあってこそ、生徒の主体的な学び、深い対話、深い読みを引き出すことができるということを参会者とともに確認した。

12 の例を挙げてはいたが、実践の積み重ねの中から、こんな場面でこんなコーディネートが有効に働いたという具体的な例を複数示しての提案ができれば、なおよかった。協議会では、12 の例や授業でのコーディネートの在り方から、教師のコーディネートで大切なこととして「みとり」「方向性の共有」「焦点化」「一緒に考える」「切り返し」などのキーワードが出された。

これらの手立ては、授業者の深い教材研究、目の前の生徒の学びに対する大局的かつ細やかなみとり、生徒とともに読みを創り上げていくという姿勢に支えられるものである。

8　運営の成果と課題

推進委員会では、指導者の先生に毎回御指導いただきながら、模擬授業などを通して互いに学び合うことを大事にしてきた。研究会に向けては、推進委員間では学校間回覧を活用して必要な連絡を取り合うとともに、役割分担を明確にし、それぞれの持ち分について責任をもって提案する体制をつくった。

研究会では、無駄の少ないコンパクトな運営を心がけた。

＜移動の少ない会場設定＞　授業会場、協議会会場、全体会会場、控室をすべて武道場にした。

＜内容に合わせた時間設定＞　協議、御指導の時間は長めに、あいさつや研究説明は短くし、全体の終了時間が遅くならないようにした。特に研究説明の資料は Class のページをそのまま用い、新たに作成することはしなかった。

＜協議の時間を長くとり、内容を充実させるための工夫＞　長岡市の国語科の先生方への事前アンケートで、最も多く課題として挙げられた「読みを深めるための教師のコーディネートの在り方」を協議題とし、協議の焦点化を図った。当日の授業を話題にしたり、資料に挙げたコーディネートの例を取り上げたりしながら、小グループで協議を深めていた。まとめとして教師のコーディネートで大切なことを各グループからキーワードで発表してもらった。協議の記録（模造紙）とキーワードの書かれたボードは各グループのテーブルに置いておくことで、最後に自由に見て回ったり写真を撮ったりできるようにした。ファシリテーターの先生方に協議の進め方を事前にお話ししておくことで、ねらいから外れることなく協議を進めることができた。これらの点については、参会者の事後アンケートで大変好評であった。また、御指導では、多くの具体例をもとに、教材研究、教師のコーディネートの在り方、読みが深まる授業について、明日からの授業に生かせるお話があった。

授業会場が広く、生徒の人数に比して参会者が多かったため、一部生徒の声が聞き取りにくい場面があった。教師から発言の声の大きさについて言葉がけすることや、声を拾える手立てを講じておくことができればよかった。また、準備全般について、会場校との連絡・調整をより丁寧にする必要があった。

資　料

1　部会名　国語

2　郡市名　長岡市・三島郡　　3　会場校　長岡市立川口中学校

4　研究会開催期日　令和　4　年　11　月　15　日（　火　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	長岡市立与板中学校・校長	小池　進輔
(2) 研究推進責任者	長岡市立西中学校・教諭	小嶋　祐子
(3) 会場校責任者	長岡市立川口中学校・教諭	小山　絹子
(4) 県･郡市指導主事	中越教育事務所・指導主事	丸山　　俊
(4) 研究推進委員（授業者）	長岡市立川口中学校・教諭	長谷川　総子
	長岡市立東北中学校・教諭	中村　麻美
	長岡市立宮内中学校・教諭	荒井　　仁
	長岡市立越路中学校・教諭	水嶋　信太郎
	長岡市立与板中学校・教諭	飯田　春香

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7 月 20 日/川口中学校	9	・1 年次の成果と課題の確認・Class 原稿の検討・研究会単元構想
2	8 月 22 日/西中学校	7	・Class 原稿の検討・指導案検討（含推進委員による模擬授業） ・研究会のもち方についての検討
3	9 月 16 日/西中学校	8	・Class 原稿の確認・研究会指導案検討・研究会のもち方についての検討
4	10 月 20 日/宮内中学校	8	・プレ授業（授業者　宮内中学校　荒井　仁教諭）及び協議会 ・研究会指導案検討　・研究会のもち方と役割分担
5	11 月 4 日/川口中学校	6	・研究会運営の打ち合わせ（会場確認、役割分担、要項・配付資料の確認等） ・研究会指導案の検討
6	11 月 15 日/川口中学校	9	・研究会当日
7	12 月 21 日/西中学校	8	・指定研究の成果と課題のまとめ

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　５６）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　１２）名
(1) 郡市内中学校会員　（　３０）名	(4) 教育委員会・センター　（　1）名
(2) 他郡市中学校会員　（　１３）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3 年Ａ組	「故郷」からのメッセージ ～私が受け取る「故郷」のこころ～	長岡市立川口中学校　教諭 長谷川　総子

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者	提案者
読みを深めるための教師のコーディネートはどうあればよいか	長岡市立与板中学校 校長 小池　進輔　様	長岡市立東北中学校 中村　麻美　教諭 長岡市立宮内中学校 荒井　　仁　教諭	長岡市立西中学校 小嶋　祐子　教諭

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小澤　ひろみ
（学校名：　新潟市立小針中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　国　語

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立五十嵐中学校

4　研究主題

学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を使って考えを深め、 自らの成長を実感する国語科指導

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

これまで新潟市中教研国語部は、研究主題を「生き生きとした活動を通して、言語能力を伸ばす指導」として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目指して研修を進めてきた。互いに対話を行い学び合う活動は、自己の考えを広げ深める上で重要ではあるが、実際には自分の考えを述べただけで、深まりのない授業となってしまうことがあった。そこで、県中教研が提唱する「深い学びにいたる授業～学び合う授業を通して～」の視点から授業改善に努めようと、研究主題を「学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を使って考えを深め、自らの成長を実感する国語科指導」とした。

言葉による見方・考え方を使って考えたり表現したりしたことを、生徒が班やグループで交流・検討・吟味することで思考を深め、改めて自身の表現と向き合い、よりよい表現をしようとする姿が見られることを目指す。

6　研究の方法と内容

研究主題の「言葉による見方・考え方」とは、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味づけることである。また、考えを形成し深めるためには、①情報を編集・操作する力、②新しい情報を、既にもっている知識や経験、感情に統合し構造化する力、③新しい問いや仮説を立てるなど、既にもっている考えの構造を転換する力、が必要となる。今回の「絵画の魅力を効果的に伝えよう」の授業では、班での交流・検討を通して①を使い、絵画の魅力が十分に伝わる鑑賞文に書き改める活動をする。「走れメロス」の授業では、班員との意見交流を通して③を使い、登場人物になりきって書いた日記をもとに読み取った主題を再考する。

7　研究の成果（○）と課題（▲）

○　活発な意見交流・話し合いの深まり

・「絵画の魅力を効果的に伝えよう」の授業では、相手意識と目的意識を大切にしようと、授業者の木村教諭が「葛飾北斎の絵を初めて見る隣の学校の中学２年生にも魅力が伝わるような鑑賞文を書こう」と明確な意識づけをした。生徒たちは常にそれを意識しながら活動することができた。

・生徒は「相手に伝わりやすい鑑賞文にするための観点チェックシート」を用いて鑑賞文を書いたり班員の鑑賞文を読む際の参考にしたりして有効活用していた。観点チェックシートを手がかりに、意見交流が活発に行われ、相手に的確なアドバイスをすることができた。

・「走れメロス」で役割を決め、その役になりきってじっくりと教材文を読み日記を書くことを通して、行間から登場人物の心情を探ったり、話し合いを重ねたりすることで根拠を明らかにして主題に迫ることができた。

○　タブレットの有効活用

・「絵画の魅力を効果的に伝えよう」の授業では、タブレットの画面上に色分けをして線を引いたり付箋をつけたりしていたため、画面を共有した際の話し合いがスムーズにできた。

・「走れメロス」の授業では、主題を示した同一画面を班内で共有して見ることで、自分と班員の比較がしやすく、クラスの傾向もわかりやすかった。

▲　「絵画の魅力を効果的に伝えよう」の授業では、絵画の解釈が話し合いの中心になっていた班があった。

▲　「走れメロス」の登場人物になりきって日記を書く活動で、情景描写などから心情を探ることができない生徒もいた。全体に丁寧に例を示す必要があった。

8　運営の成果（○）と課題（▲）

○　研究推進委員や協力校の協力で、指導案検討やプレ授業の内容を本時の授業で生かすことができた。

○　感染症対策で、公開授業を広い会場で行うことができた。

▲　２年間を見通したしっかりとした計画がなく、研究主題の設定、研修の進め方等で多くの方に迷惑をかけてしまった。研究推進委員、会場校、協力校で話し合い、情報を共有して計画的に進めていかなければならない。

▲　感染症対策で、研究発表会当日は、各校１名の参加とし、他の部員は勤務校でのオンライン参観としたが、配信もとのタブレットに集音マイクがなかったため、聞き取りづらいという苦情があった。

資　料

1　部会名　国　語

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立五十嵐中学校

4　研究会開催期日　令和　4　年　１１月　１０日（木）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	宮城教育大学・名誉教授	相澤　秀夫
(2) 研究推進責任者	新潟市立小針中学校・教諭	小澤　ひろみ
(3) 会場校責任者	新潟市立五十嵐中学校・教諭	亀島　望
(4) 県･郡市指導主事	新潟市教育委員会・指導主事	佐藤　恵美
(5) 研究推進委員（授業者）	新潟市立五十嵐中学校・教諭	木村　悠子（授業者）
	新潟市立五十嵐中学校・教諭	岸田　知己（授業者）
	新潟市立黒埼中学校・教諭	西方　和美
	新潟市立新潟柳都中学校・教諭	斉数　陽子
	新潟市立南浜中学校・教諭	村山　忍
	新潟市立小合中学校・教諭	山形　享
	新潟市立中之口中学校・教諭	小野　範子
	新潟市立濁川中学校・教諭	及川　陽子
	新潟市立藤見中学校・教諭	上野　孝
	新潟市立宮浦中学校・教諭	佐藤　一也
	新潟市立金津中学校・教諭	増子　章子

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 8 日 五十嵐中学校	6	授業構想カード検討会
2	7 月 5 日 五十嵐中学校	11	「絵画の魅力を効果的に伝えよう」　指導案検討会
3	7 月 14 日 五十嵐中学校	9	「走れメロス」　指導案検討会
4	7 月 29 日 五十嵐中学校	12	模擬授業
5	9 月 22 日 月潟中学校	7	月潟中学校　鎌倉教諭による 「絵画の魅力を効果的に伝えよう」プレ授業
6	9 月 27 日 味方中学校	8	味方中学校　島田教諭による「走れメロス」プレ授業
7	10 月 13 日 五十嵐中学校	12	研究発表会に向けた事前打ち合わせ
8	11 月 17 日 五十嵐中学校	11	成果と課題について　　旅費精算

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　５１　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　５１　）名 ※リモートでの参加を除く	(4) 教育委員会・センター　（　0　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　0　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	「絵画の魅力を効果的に伝えよう」	木村　悠子	２年２組	「走れメロス」	岸田　知己

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題（演題）	指導者	司会者	提案者
講演会	これからの時代に必要な国語科教育	宮城教育大学名誉教授 相澤　秀夫　様	新潟市立黒埼中学校 西方　和美教諭	

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　小林　優一
（学校名：　　胎内市立築地中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　国語

2　郡市名　　阿賀野・胎内・北蒲原　　3　会場校　　阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4　研究主題

自分の考えを深め表現できる生徒の育成 ～言葉による見方・考え方を働かせる学び合いの工夫～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

国語科の学習においては、対象(自分自身・相手・様々な事物)と言葉、言葉と言葉の関係について、比較・関連付け等の思考方法を活用しながら言葉の意味、働き、使い方等を捉えることが、自分の思いや考えを深めることにつながると考える。また、その関係性を自分の経験・仲間の考え・学習材とかかわりながら捉え直して意味付けさせるためには、教師側が「主体的な学びの視点」と「対話的な学びの視点」をもつ必要がある。そこで、本研究では、「自分の考えを深め表現できる生徒の育成」のために必要な「言葉による見方・考え方を働かせる学び合いの工夫」について研究・協議し、その有効性を明らかにする。

また、本研究では、目指す「深い学びの姿」を以下のように定義する。

①比較・関連付け等の思考方法を活用しながら言葉の意味、働き、使い方を捉えている。

②対象(自分自身・相手・様々な事物)と言葉の関係性について、自分の経験・仲間の考え・学習材とかかわりながら捉え直し、意味付けている。

③相手や目的に応じた手段や表現で、自分の考えを発信している。

特に、本単元では、漢詩を他の詩と比較して読むことで、共通点や相違点をもとに、詩の主題や主題を表現する方法の特徴について理解を深める姿を、また、漢詩の主題がどの表現によってあらわされているかを絞り込む話合いと、現代語の詩を創作する学習を通して、よりよい表現を模索する姿を目指す。

6　研究の方法と内容

１年次の研究を踏まえ、「深い学びにいたるポイント」を以下の３点に整理し、研究を進めた。

ポイント１　言葉を通じて自己と向き合える課題を設定する

「言葉を通じて自己と向き合える課題」として、現代の別れの場面の詩を創作する。漢詩に表れたものの見方や考え方、表現の仕方についての学びを生徒自身の表現の模索につなげる。また、授業の導入で学習意欲と見通しをもたせることが主体的な学びの実現につながると考える。そのために「学習内容の意味や価値」「学習のプロセス」を教師と生徒で共有しながら授業を進めていく。

ポイント２　「言葉による見方・考え方」を働かせた意見交流の場を設定する

「言葉による見方・考え方」を働かせた意見交流の場を設定し、比較・分析して得た情報をもとに自分の考えを見直すように働きかけることで、深い学びの姿につなげる。

ポイント３　自己変容に気付かせる

終末には、初発の考えと変わった点や、他者の考えとの共通点や相違点を整理させることで、自己変容への気付きを促し、課題解決の達成感や深い学びの実感につなげる。

7　研究の成果と課題

（1）言葉を通じて自己と向き合える課題の設定について（ポイント１）

○生徒は、寂しいという感情を色のイメージと関連付けて、表現を模索していた。

○漢文訓読調の詩や対句表現が見られた。漢詩の学習が生かされている。

○行動描写から受け取る印象について自分で考えたり、友達から助言をもらったりしながら、よりよい表現になるよう努めていた。例「スマホをなげすてた」→「スマホをにぎりしめた」

○一語一語に注目させた前時の活動が、自身の表現を吟味する姿勢につながった。

▲生徒の疑問や気付きから始まると、もう少し活発な意見が出たかもしれない。

（2）「主題が表れている表現を探し、その表現を選んだ理由を班で話し合うという課題により、一語一語の表す情報やイメージに注目させたこと」は、《詩の主題や詩を表現する方法について理解を深める》という生徒の深い学びの姿につながったか。（ポイント２）

○色々な語に着目していたが、それぞれ理由がしっかりと述べられていた。

○お互いがもっている語句のイメージを共有させたことが、理解を深めることにつながった。

○「句」から「表現」に絞らせることで、より一語一語のイメージや意味について考えることができていた。

▲主題の理解が不足していた。本時の活動の前に「別れの寂しさ」がどのようなものかイメージをふくらませる時間がとれるとよかった。マインドマップなどを活用する。

（3）「思考ツールによる思考の可視化、話し合いの作業化により、誰もが話し合いの内容をイメージしやすいようにし、少数意見が話し合いで拾われやすくしたこと」は、異なる考えに触れ、自分の考えを見直したり考えの幅を広げたりする上で有効であったか。（ポイント２、３）

○読み取りが苦手な生徒にもイメージが広がりやすいように同じ班の生徒が分かりやすく説明していた。

○学習の流れをワークシートや大型モニターで示しており、次に何をすればよいのか生徒の理解につながった。

○お互いの考えを可視化したことで、自分の気づかなかった考えにも触れることができた。その結果、友達の考えに共感したり考えを深めたりする場面が見られた。

○話し合いが活発に行われるよう、目的に応じて紙とタブレットを使い分けるようにと指示していた。生徒は複数の選択肢の中から、自分たちで必要なツールを使用していた。

▲「可視化・作業化」は成功していたが、そのための道具が多く、時間がかかっていた。（ワークシート、付箋、フィッシュボーン、クラゲチャート、タブレット入力、大型モニターなど）

▲フィッシュボーン等の思考ツールでは、生徒の多様な考えを集めるだけにとどめた方がよかった（班で一つにする意味は薄い）。その後に、生徒の言葉で情景描写や行動描写の効果をまとめさせるとよい。

8　運営の成果と課題

○参観、リモート配信、ビデオ録画など、多様な手段で授業公開ができるように準備を進めることができた。集音については、教師にワイヤレスピンマイクを装着することで改善できた。

○参集範囲について、新型コロナウイルス感染防止の観点を考慮して設定できた。

▲リモート配信だと、大型モニターが光を反射して見えない部分がある。画面共有用の端末も必要。

資　料

1　部会名　国語

2　郡市名　阿賀野・胎内・北蒲　　3　会場校　阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１日（　火　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・校長	三膳　章
(2) 研究推進責任者	胎内市立築地中学校・教諭	小林　優一
(3) 会場校責任者	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教諭	齊京　正浩
(4) 県･郡市指導主事	下越教育事務所・支援第二課指導主事	磯部　睦
(4) 研究推進委員（授業者）	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教諭	野口　鮎子
	阿賀野市立水原中学校・教諭	松澤　学
	胎内市立中条中学校・教諭	小沼　和文
	聖籠町立聖籠中学校・教諭	長谷川 真也

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7/29　京ヶ瀬中学校	7	単元構想・指導案検討 Class 原稿検討
2	8/17　京ヶ瀬中学校	19	指導案検討(二市北蒲中教研国語部会)
3	9/28　京ヶ瀬中学校	7	指導案最終検討及び当日の打ち合わせ
4	11/1　京ヶ瀬中学校	30	公開授業当日
5	11/22　京ヶ瀬中学校	6	今年度の成果と課題、経過の概要報告書の作成

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　３０　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　２３　）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　6　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	漢詩の世界	野口　鮎子　教諭

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
授業協議会	・「主題が表れている表現を探し、その表現を選んだ理由を班で話し合うという課題により、一語一語の表す情報やイメージに注目させたこと」は、《詩の主題や詩を表現する方法について理解を深める》という生徒の深い学びの姿につながったか。 ・「思考ツールによる思考の可視化、話し合いの作業化により、誰もが話し合いの内容をイメージしやすいようにし、少数意見が話し合いで拾われやすくしたこと」は、異なる考えに触れ、自分の考えを見直したり考えの幅を広げたりする上で有効であったか。	下越教育事務所 指導主事 磯部　睦 様	阿賀野立京ヶ瀬中学校 齊京　正浩　教諭	当校教諭 野口 鮎子

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　三野　博治
（学校名：　妙高市立新井中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　数　学

2　郡市名　上　越　　3　会場校　妙高市立妙高中学校

4　研究主題

生徒が主体的に学び合う課題設定と授業展開の工夫

～課題から数理としての本質を見いだす数学的な読解力を鍛えるために～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

文部科学省では，新しい学習指導要領が目指す姿のなかで，「学びを通じた子供たちの真の理解，深い理解を促すためには，課題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行い，目の前の問題に対して，これまでに獲得した知識や技能だけでは必ずしも十分ではないという問題意識を生じさせ，必要となる知識や技能を獲得し，さらに試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を行い，その上で自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげるという，深い学習のプロセスが重要である。」と述べている。特に学習課題が重要であると捉えた。

生徒が好奇心をもって，主体的に取り組むことができる課題を設定することが，生徒の主体的な学びを促すのではと考えた。また，授業展開を工夫し，生徒が自分の考えを伝え合う場面を設定することで，課題解決の見方や考え方が補完され，学びが深まると同時に数学的な読解力を高めるのではと考えた。そのような授業を重ねることで，数理に対する探究心を育みたい。そのためには，生徒が取り組んでみたい，考えてみたいと思える課題設定が重要であり，課題から数理としての本質を見いだす生徒の活動を中心に据えた授業展開こそ，生徒に深い学びを促すポイントであると考え，この研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

研究推進委員会を開催し，以下の流れで研究を進めた。

（1）前年度の課題と成果について確認した。同時に深い学びのイメージを県立教育センターの実践ハンドブックを用いて共通理解を深めた。

（2）妙高中学校の目指す生徒像についての確認と，公開授業での１次関数の提案課題を持ち寄って検討した。

（3）深い学びにつながるように課題を練り上げた。

（4）深い学びにつながる授業展開について意見交換を行った。

（5）公開授業における深い学びにいたるための授業展開について意見交換を行った。

（6）公開授業の実施と協議会

（7）公開授業の反省と課題について協議した。

7　研究の成果と課題

7 回の研究推進委員会を通して，基本的な知識の定着や身に付けた技能の有用感を高めるためには，考えられた課題が大切だということがわかった。また，生徒が自ら学ぶことが，本当の知的好奇心育む力になると考えられる。思考の世界が広がる楽しさや，納得できたときの感動，自分たちで解決できたときの自信，そのような成功体験の積み重ねが，深い学びに支えられていることがわかった。

成果

（1）読解力を鍛えるために

・課題文は，生徒から質問がでないようにしっかりと作る必要がある。生徒から質問があってもすぐには答えず，課題文を再読させ言葉や数，図，式の意味を読み取らせることが，読解力を伸ばすためには効果的であることがわかった。

（2）授業展開の工夫

・生徒に何のために発表させるのか，そのねらいを教師側が考えて行うことが大切である。

・生徒の疑問や質問は，学びを深める絶好のチャンスである。その疑問や質問を生徒に投げかけることで，思考が深まり生徒の力を伸ばすことにつながる。

・自立的なグループ活動を促すために，生徒からより良い考えや表現方法を引き出すために，グループで競争させ，生徒自身に評価させることも有効である。

課題

課題に取り組めない生徒への手立てとして，ヒントカードや有効な既習事項の提示も授業計画に取り入れることの必要性や，授業の振り返りの時間をしっかりと確保し，学んだことを自分の言葉でまとめることで，知識の定着を促していくことが課題として上がった。

8　運営の成果と課題

公開授業に向けて，計画的に研究推進委員会の協議内容を進めることができたので，委員相互の勉強にもなった。特に，深い学びに対する共通理解が深まったことが良かった。以下の４つを深い学びと捉えて，課題設定や授業展開を工夫した。

①課題解決に向けて，知識や技能を用いて考え続けること

②自分の考えや意見を友だちと共有できること

③友だちの発表から自分に必要な考え方や見方を補完できること

④学んだことを自分の言葉でまとめて，納得できること

２年間を通して，公開授業だけではなく日々の授業の積み重ねが大切だと捉え，以下の３つのポイントを継続的に授業に組み込んで行うことで，より良い公開授業につなげるように取り組んだ。

ポイント１　つまずきや疑問点があれば，友だちに遠慮なく聞ける時間を設定する。

ポイント２　情報機器を活用し，友だちの意見や考え方の共有で，思考を活性化する。

ポイント３　思考の言語化で，深い学びの整理と定着を促す振り返りの時間を設定する。

今後の課題（より深い学びにつなげるために）

・数学を言語と捉え，用語，式，グラフ，図を，正確に読み取れる力をつけること。

・グループ活動，話し合い活動の目的は，生徒自身がより良く考えるために行わなければならないということ。そのための授業展開を工夫すること。

・問題の意味を生徒が読み取り，自分が把握した意味との整合性を自分で判断できるようになることが，学びの自立につながるので，そのための支援についても考えること。

資　料

1　部会名　数　学

2　郡市名　上　越　　3　会場校　妙高市立妙高中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１７日（　木　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	岩﨑　浩
(2) 研究推進責任者	妙高市立新井中学校・教諭	三野　博治
(3) 会場校責任者	妙高市立妙高中学校・教頭	大塚　高央
(4) 県･郡市指導主事	妙高市教育委員会・指導主事	丸山　文雄
(4) 委員	妙高市立妙高中学校・教諭（授業者）	若山　泰文
	妙高市立妙高高原中学校・教諭	梅川　貢司
	妙高市立新井中学校・教諭	三野　博治

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 23 日（水） 妙高中学校	5	前年度の取り組みの課題と反省を確認し，今後の委員会の活動内容について，意見交換を行った。また，目指す深い学びの姿の共有とその実現について，意見交換を行った。
2	7 月 30 日（金） 妙高中学校	4	公開授業を行う「一次関数の利用」の単元において，深い学びにつながる課題を持ち寄り，授業へのイメージを深めた。
3	8 月 23 日（月） 妙高中学校	4	「一次関数の利用」の単元における深い学びにつながる課題について，意見交換を行い，課題を練り上げた。
4	9 月 22 日（水） 妙高中学校	9	公開授業での課題提示や深い学びにつながる授業展開について意見交換を行い，岩﨑教授からもアドバイスをいただいた。発問内容やグループ活動の持ち方について意見交換を行った。
5	10 月 6 日（水） 妙高中学校	9	指導案の最終検討を行い，生徒の学習形態や考えさせる場面，発表場面を検討し，深い学びにいたる授業展開について，意見交換と指導案の改善を行った。
6	11 月 17 日（木） 妙高中学校	9	妙高中学校で公開授業と協議会を行った。参加者からの問題点や今後の課題について多くの意見や提案をいただくと共に，岩﨑教授からの指導から，より深い学びを促すための課題を明確にすることができた。
7	11 月 22 日（火） 妙高中学校	4	本研究の課題と成果について協議し，本研究の総括を行った。

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　３９　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　8　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　１９　）名	(4) 教育委員会・センター	（　4　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　3　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　5　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2 年 A 組	1 次関数 「一次関数の利用」	若山　泰文			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第 1 分科会	深い学びにつながる課題や授業展開であったか	上越教育大学 教授 岩﨑　浩 様	妙高市立妙高中学校 大塚　高央　教諭	妙高市立 新井中学校 三野　博治 教諭

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和　４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小林　成夢
（学校名：南魚沼市立塩沢中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　数学

2　郡市名　南魚沼郡市　3　会場校　南魚沼市大和中学校

4　研究主題

主体的に学習に取り組む態度の育成

～考える力・話す力・聞く力・書く力の育成と深い学びの充実～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

目指す生徒の姿は、自分の意見を分かりやすく述べ、自他の考えの共通点と相違点を比較して検討しようとするなど主体的に数学の学習に取り組む姿である。しかし、実際の授業では生徒は受け身であることが多く、話し合い活動でも一部の生徒の発言や教師主導で学習が進んでしまう傾向にある。

そのため、自分の考えを発言したり、他者の考えを聞いたりして、生徒自身が主体的に課題を解決していくような授業展開を目指そうとこの研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために、教材に対する生徒の気付きや困り感を板書で可視化して共有させ、生徒自身が本時の課題を見出す。そして、その課題を解決するために対話が始まる。また、課題解決のための見方や考え方を対比的に提示することで、生徒は自ずと共通点と相違点を考え始める。その結果、「新たな気付き」が生まれた瞬間、その生徒にとっての「深い学び」が生まれる。そして、これを共有することにより、「深い学び」が実現するという視点で授業の手立てを考えた。

手立て１【考える力の育成】

導入では生徒が観察を始められるよう、視点を与えた上で教材を提示し、授業の入口から考える力を育てる。教材と生徒を正対させ、教材の**観察から生まれた生徒の気付きや困り感を焦点化**させる。

手立て２【書く力の育成】

図、式等だけでなく、気付きや困り感、考えなどを言葉でノートに詳しく書き、思考を顕在化させる。授業の最後には、一連の学びで**自分の考えがどのように変化したか**を振り返らせ、ノートに言葉で記述させる。

手立て３【話す力の育成】

板書で可視化した自分の考えを**仲間に語りかけるように伝える**ことで、話す力と思考力を高める。**発言時間は常に計測**し、発言時間をどんどん延ばしていくことで、生徒の話す力は更に高まる。また、発言するときは、板書を隠さないための立ち位置、聞き手に胸を向けるための指示棒の持ち方まで指示し、身振り・手振りを入れ、語りかけながら伝えるよう指導する。

手立て４【聞く力の育成】

聞き手は話し手と**目を合わせながら**聞く。仲間の発言に対して、「なるほど」「あ～」「分かった！」などのつぶやきや、うなずくなどの反応をしながら聞くことで、学ぶ意欲と理解力を高める。

７　研究の成果と課題　（協議会での意見より　○：成果　▲：課題）

○考え方の対比や相違点から学びを深めていく手法が素晴らしいと思いました。自分の考えを伝えるだけの発表会ではなく、その考えを対比することで学びが深まっていく様子がよく分かりました。

○生徒自身が問いをもち、解決に向かうような生徒主体の授業でした。数学力だけでなく、生徒の人間性が育てられていることを実感できました。

○生徒主体の理想的な授業だと感じました。導入段階での「もしかして」や「分かることは」など自分の教科でも活用しているので、数学の授業だけでなく、別の教科でも取り入れていくべきだと思いました。

○子どもたちの動きが先生の指示がなくてもスムーズに動いている姿に、これまでの授業の積み重ねを感じました。また、4 つの力を分離して手立てを考えることで、生徒も今何をすべきか頑張るところなのかが理解しやすく集中して取り組みやすいと感じました。

○素晴らしい授業で、"主体的"という言葉の正しい姿を見させていただきました。そこに向かう手立てとして、課題提示への工夫や視点プレート、生徒が説明する際の穴埋めや問いかけ、ICT 機器の活用など沢山のアイディアやアイテムが散りばめられていて、様々な視点から実践できることが多く、是非参考にさせていただきたいと思います。

▲これだけの学びの基礎力を育成するのに、普段の授業の取り組みからの積み重ねがとても大切になると思います。小学校と連携し、継続して指導していくことが必要だと思います。

▲生徒が主体的に授業を進めていくため、予想していた◎が出てこない場合には、ある程度教師の技量が必要になってくるのではないかと感じました。

▲説明する場面で、「ここまでいいですか」「いいです」という問いかけと反応があったが、中には理解できていない生徒もいたのではないかと思います。そういった理解が不十分な生徒に対する支援が必要だと思いました。

８　運営の成果と課題

指導者も含め、研究推進委員全員が目指す生徒の姿を共有し、日々の授業の中で「学びの基礎力」の育成に向け、授業改善を行うことができた。

協議会では、生徒の「学びの力」に注目して協議を行った。事後のアンケートでは、今回の授業実践を自分の授業にも取り入れていきたいなど、数学の授業に限らず、他教科の先生方からご意見をいただくことができた。

また、通常より広い教室を使用して授業を行ったが、参加いただいた人数も多く、どうしても机間が狭くなってしまった。生徒が相談の際に移動しずらかったり、相談している様子が見とりにくかったとご指摘をいただいた。

資　料

1　部会名　数　学

2　郡市名　南魚沼郡市　　3　会場校　南魚沼市大和中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１１日（金）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	三条市立第二中学校・教頭	茶谷　明
(2) 研究推進責任者	南魚沼市立塩沢中学校・教諭	小林　成夢
(3) 会場校責任者	南魚沼市立大和中学校・教諭	長谷川　悦弘
(4) 県･郡市指導主事	南魚沼市学習指導センター	種村　公夫
(4) 研究推進委員（授業者）	南魚沼市立大和中学校・教諭	関　翔弥
	湯沢町立湯沢中学校・教諭	山貝　健輔
	南魚沼市立八海中学校・教諭	佐藤　稜
	南魚沼市立六日町中学校・教諭	髙橋　耕平

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/2 塩沢中学校	6	昨年度の研究内容の確認。今年度の予定の確認
2	9/2 大和中学校	12	大和中学校　関教諭の公開授業 ３年　二次方程式の活用
3	9/27 大和中学校	6	当日の授業案・協議題の検討
4	10/19 大和中学校	6	当日の要項・パワーポイントの確認
5	11/10 大和中学校	6	前日リハーサル
6	12/26 大和中学校（予定）		研究のまとめ

。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　６９　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　５　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　４７　）名	(4) 教育委員会・センター　（　１　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　１６　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　０　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年４組	相似な図形の体積比	関　翔弥　教諭

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
協議題「主題に迫る手立ては有効であったか」 【考える力について】教材を提示し、生徒自身の困り感から本時の課題◎を設定する場面。考え方を対比させ、共通点や相違点から学びを深める場面。 【話す力】板書で可視化した自分の考えを仲間に分かりやすく伝える場面。 【書く力について】課題◎を解決するための自分の考えをノートに書く場面。 学習前と比べ、本時でどのような学びの変容があったかを振り返りで記入する場面。	三条市立第二中学校 教頭 茶谷　明　様	六日町中学校 髙橋　耕平　教諭	塩沢中学校 小林　成夢　教諭

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　土田　健太郎
（学校名：　新潟市立小須戸中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　数　学

2　郡市名　新　潟　　3　会場校　新潟市立東新潟中学校

4　研究主題

数学的に考える資質・能力の育成に向けた授業改善の工夫

5　主題設定の理由

新潟市中教研数学部では,県中教研指定研究を中核に据えた 2 年サイクルの研究を行ってきた。具体的には,検討した指導案を各会員が実践することで,より効果的な学び合いについて研究を深めた。

平成３０・令和元年度の指定研究では,「数学的に考える資質・能力を育成する授業の工夫」を研究主題とし，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて「見通し」「対話」「振り返り」を手立てとして,各学年の図形領域の 1 時間の授業に絞って授業実践を行った。

これを土台として,令和２・３年度は, 1 時間の授業ではなく,単元を通して数学的に考える資質・能力の育成を目指し，「見通し」「対話」「振り返り」の手立てを構築しながら授業改善に取り組んだ。

6　研究の方法と内容

２年生の図形領域「図形の調べ方」で実践を考え,深い学びの姿を「根拠を明確にして説明できる生徒」として授業を構成していく。課題に対して,結果や方法の「見通し」,追究の過程での他者との「対話」,解決した過程や結果の「振り返り」のサイクルを効果的に実践するために単元を構想し,授業を実践する。

(1)　単元構成

「見通し」「対話」「振り返り」のサイクルを効果的に実践するために,単元末の課題「星形五角形の内角の和は,いつも決まった大きさになるのだろうか。また,なぜその大きさになるといえるのだろうか」を先に設定する。ここから遡って,生徒が必要な資質・能力は何か,それを身に付けさせるためにどのような学習内容にするかを,1 時間ずつ授業を設計する。逆向き設計で単元を構成しながら,単元デザインシートにまとめる。

(2)　「見通し」の視点

単元導入時に,生徒に単元の目標を明示し,「何を」「どのように」追究すればよいのかを共有させる。また,毎時間の見通しとして ICT を利用し,生徒が実感を伴う予想を立てさせ,追究させる。

(3)　「対話」の視点

単元の中で意図的に「対話」の場面を設定する。お互いに考えを伝えあう場面で,根拠を明確にする必要性や協働的な解決の有用性を実感させる。また,ICT を活用し,効果的に多様な考え方を共有させたり,よりよい考え方を検討させたりして,説明の精度や意欲の向上を図る。

(4)　「振り返り」の視点

単元の振り返りシートを活用し,学びの過程や結果を言語化させ,知識の再構成と,次の学びでの問題発見や問題解決につなげる。振り返りシートには,「本時の問題解決に有効だった点」を視点とし

て与え,単元を通して問い続ける。また,単元ごとに１枚の振り返りシートに学びを蓄積していくことで,学びのつながりや発展を実感することができるようにする。

7　研究の成果と課題

○単元を通して「見通し」「対話」「振り返り」のサイクルを実践し,生徒自身の言葉で振り返りを蓄積することで,学びの足跡になり,理解の手助けとなった。発表会時での授業では,サイクルが効果的に働き,生徒は様々な補助線のひき方を見つけ,学びを深めることができた。

○タブレットなどの ICT を活用することで,生徒は課題に対して考えを深める姿があった。また,共有化を容易にでき,生徒は意欲的に説明したり,説明を聞いて理解しようとしたりすることができた。

○生徒は「問題解決に有効だった点」を問い続けることで,１つの授業の課題に対し,どの方法を使えばよいかという見通しにつながった。生徒からも「これを見れば一発でヒントが分かる」などの声が上がり、学習した図形の性質や解決に有効だった考え方を自分なりに使おうとする姿が見られた。

△ICT の活用については個人差や学校差がある。単元構成や授業改善でどのように活用していくか,研究が必要である。

△県指定研究での学び合いがゴールでなく,この後にどう会員が授業改善に取り組んだかが重要である。2 年サイクルの研究をどうつなげていくかが課題である。

△協議会やアンケートから「主体的に学習に取り組む態度の評価について,情報交換がしたい」「振り返りについて,どのように評価すればよいだろうか」などのご意見をいただいた。授業と単元での評価など,来年度からの研究にいかしていく。

8　運営の成果と課題

研究推進委員会を開催し,公開授業の指導案検討や指定研究会を通して会員の学びが深まるように工夫した。具体的な成果と課題は次のとおりである。

○授業参観,協議会ともに,対面とオンラインのハイブリッドにしたことで,会員全員が参加することができた。

○協議会での話し合いが深まるように,ファシリテーターは研究推進委員・市中教研幹事が担当するようにした。

○協議会では「見通し」「対話」「振り返り」について,多くの意見交換ができ,自校の取組の情報交換もしながらよりよい授業にするための意見が挙がった。アンケートからも肯定的な回答が多かった。

○協議会での協議の内容が対面・オンラインともに同じになるように,同じ指導案に絞り,2 クラス同時に授業を公開した。それによって,2 クラスの授業者同士でも細かい検討ができた。

△ハイブリットにしたことで,運営にかなりの労力がかかった。また,当日のネットワークトラブルもあり,事前に回避できなかった。会員全員が参加できるような研修の形式を検討していく。

資　料

1　部会名　数　学

2　郡市名　新　潟　　3　会場校　新潟市立東新潟中学校

4　研究会開催期日　令和　4　年　１１　月　１０　日（　木　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　　属　・　職　　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	坪　川　淳　助
(2) 研究推進責任者	新潟市立小須戸中学校　・教諭	土　田　健太郎
(3) 会場校責任者	新潟市立東新潟中学校　・教諭	竹　内　明　子
(4) 市顧問校長	新潟市立両川中学校　・校長	山　口　靖　博
(5) 研究推進委員（授業者）	新潟市立東新潟中学校　・教諭	熊　田　隆　行
	新潟市立東新潟中学校　・教諭	羽　田　真帆子
	新潟市立東新潟中学校　・教諭	伊豆野　真　生
	新潟市立亀田中学校　・教諭	柳　　大　輔
	新潟市立鳥屋野中学校　・教諭	長　部　賢
	新潟市立宮浦中学校　・教諭	渡　部　陽　平
	新潟市立内野中学校　・教諭	瀬　野　大　吾

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/10／東新潟中学校	8	プレ授業　授業者　伊豆野真生「正の数・負の数」
2	7/11／宮浦中学校	5	単元構成と公開授業の指導案検討・原案をもとに様々な意見を集約しまとめた。
3	7/27／宮浦中学校	5	公開授業の指導案修正・前回の問題点を改善した。
4	8/23／東新潟中学校	8	授業者との細かい打合せと手立ての確認・単元の進め方を委員全員で確認した。
5	11/1／東新潟中学校	10	公開授業リハーサル・オンライン配信のカメラ位置などを確認した。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（ ６８・ｵﾝﾗｲﾝ 112 ）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（64・ｵﾝﾗｲﾝ 110）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（ 3・ｵﾝﾗｲﾝ ２ ）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	図形の調べ方 ・くさび形四角形	熊田隆行	２年２組	図形の調べ方 ・くさび形四角形	羽田真帆子

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	「見通し」「対話」「振り返り」の手立ての有効性	新潟市総合教育センター 指導主事 坪川淳助 様	新潟市立内野中学校 教諭　瀬野　大吾	新潟市立亀田中学校 教諭　柳　大輔

令和　４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小林　正人
（学校名：　新発田市立猿橋中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　数学

２　郡市名　新発田　　３　会場校　新発田市立豊浦中学校

４　研究主題

数学的な見方・考え方を働かせた、深い学びのある授業の実現

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

数学科の目標として「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する」とある。また、数学的な考え方は目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、論理的に考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能を関連付けながら、統合的・発展的に考えることとしている。

さらに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善は、新学習指導要領における重要な視点である。中央教育審議会答申(2016)では、深い学びについて①知識を相互に関連付けてより深く理解、②情報を精査して考えを形成、③問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることとされている。また、深い学びの鍵として見方・考え方を働かせることが重要とされている。

これらのことから、数学的な見方・考え方を働かせた深い学びのある授業を実現することは、授業改善の重要な視点であると考えた。そして深い学びについて、『知識・技能が関連付けられ、いつでも汎用的に使いこなせる状態になること』(深い学び,田村学,2018)と捉え、研究主題を設定した。

６　研究の方法と内容

研究推進委員会で１年次の成果と反省を活かし、本単元における深い学びの姿とその姿を実現するための手だての検討を行った。

(１)本単元における深い学びの姿の具体化

１年次では「つながり」のある授業に重点を置いた。その授業を実現するために、①「問い」を持つ、②既習の「知識・技能」をつなげる、③自分のことばで「まとめる」の３ステップで授業を展開しようと考えた。２年次では深い学びの姿を次のように考えた。

①次の問いに向かう姿

②論理的に説明しようとする姿

③自分の考えを再構築する姿

（２）深い学びに至るための手だて

単元の中でどのような手立てを講じると目指す生徒の姿になるかを検討した。

①課題の一部を変更する

生徒が次の「問い」に向かうために必要な視点は、生徒の目線に立った学びの軌跡で単元を構成し、「さっきと似ている」「少し考えればわかりそう」と思わせることであると考えた。そのために課題の一部を変更しながら単元を構成していくことが有効であると考えた。生徒は既習内容をもとに、本時の課題も解決できるだろうと考えて意欲的に取り組むようになる。

	学習内容	n＝1	n＝2	n＝3	n＝4	n＝5	・・・	n
1サイクル目	直線と角	【公理】 平角は 180°	対頂角	同位角 錯角 三角形の 角の性質				
2サイクル目	(凸型)多角形の内角の和			三角形の内角の和	四角形の内角の和	五角形の内角の和	・・・	多角形の内角の和
3サイクル目	多角形の外角の和			三角形の外角の和	四角形の外角の和	五角形の外角の和	・・・	多角形の外角の和
4サイクル目	星形多角形の角の和					星形五角形の角の和	・・・	星形多角形の角の和

②既有の知識を組み合わせる

上記のように条件を変えて課題を設定することで、生徒は以前の解決で使った知識や考え方や定理などを活用しやすくなると考えた。それまでの学習で得た知識を「知識カード」としてロイロノート上に保存し、常に理由を説明する根拠として使える状態にした。本時のまとめではどの知識カードを使って説明したか記述していた。

③解決の過程を振り返り、多様な考えのよさを見いだす

本時の課題に対して多面的・多角的に捉えることにより、自分の考え方を補強し、学びが深まると考えた。自分が解決した過程と仲間が解決した過程を比較、検討し、自分にとってのベストアンサーを考えさせた。振り返りではいろいろな視点から他者と自分の考えを比較して、よりよい解決方法を考察していた。

7　研究の成果と課題

11 月 18 日（金)、新発田市立豊浦中学校で研究授業を実施した。成果と課題は以下のとおりである。

(1)成果

・条件変更をすることで、生徒ができたことの一部を変える→できそう→やってみようという主体的な学びにつながっていた。また、予想しながら授業を受ける生徒の姿が多く見られた。

・ICT の活用やアイテムカードを使用するという蓄積によって、星形の問題を見たときに「既習事項を活かしてみよう」という姿になっていた。

・タブレットの提出箱を活用することで、容易に他の生徒と考えを交流でき共有することができた。

(2)課題

・すべての単元で条件変更を使って構成できるかを考察する。

・他の生徒の考えに触れた後の生徒の学びを確認する方法は振り返りを活用することが適切であるかどうかを検討する。

8　運営の成果と課題

・昨年度までの委員が多く、連携が取れてスムーズな運営ができた。また、会場校と顧問の連絡も綿密にできていた。

・他領域の中教研の資料や進め方を参考に研究会の準備を進めることができて大変助かった。今後も資料や運営方法を引き継いで使えるところは活用できるとよい。

・オンラインと併用で研究会を行う予定だったが取りやめた。運営に余裕ができた一方で、市外の人の参加が少なかった。下越に佐渡や粟島も含まれることを考えると今後検討が必要である。

・研究推進以外の運営面での会のもち方や仕事分担の簡略化を図る。

資　料

1　部会名　数学

2　郡市名　新発田　　3　会場校　新発田市立豊浦中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１８日（　金　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越市立清里中学校	杉本　知之
(2) 研究推進責任者	新発田市立猿橋中学校・教諭	小林　正人
(3) 会場校責任者	新発田市立豊浦中学校・教頭	山本　亘
(4) 市中教研顧問	新発田市立七葉中学校・校長	野澤　一吉
(4) 研究推進委員（授業者）	新発田市立豊浦中学校・教諭	加藤　知広（授業者）
	新発田市立本丸中学校・教諭	山﨑　功一
	新発田市立第一中学校・教諭	金井　克浩
	新発田市立東中学校・教諭	丸山　沙知
	新発田市立川東中学校・教諭	齋藤　玲子
	新発田市立七葉中学校・教諭	市橋　佑太
	新発田市立佐々木中学校・教諭	櫻井　理人
	新発田市立豊浦中学校・教諭	長谷川　典子
	新発田市立紫雲寺中学校・教諭	有藤　茂郎
	新発田市立加治川中学校・教諭	松浦まり代

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月5日（火）/豊浦中	8	研究推進委員会の再組織、深い学びの姿の具体化
2	8月2日（火）/豊浦中	10	深い学びに至る授業の過程
3	9月15日（木）/豊浦中	12	研究会の日程、協議題の決定、役割分担
4	10月6日（木）/豊浦中	10	プレ授業
5	11月4日（金）/豊浦中	4	プレゼン内容の確認、要項の確認
6	11月17日（木）/豊浦中	12	タイムスケジュールの確認、事前準備
7	11月18日（金）/豊浦中	14	研究協議会
8	12月5日（月）/猿橋中	11	研究の成果と課題

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　４０　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　０　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　２５　）名	(4) 教育委員会・センター	（　１　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　１４　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　０　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	図形の性質の調べ方	加藤知広			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第１分科会	研究主題実現のために、本時の手だては有効であったか	上越市立清里中学校 校長　杉本　知之 様	新発田立七葉中学校 市橋　佑太　教諭	新発田市立猿橋中学校 小林　正人　教諭

令和３・４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　高井　瑞樹
（学校名：　上越市立板倉中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　道　徳

２　郡市名　上越市　　**３　会場校**　上越市立板倉中学校

４　研究主題

「自分の考えをもち、進んで考えを伝えあい、深い学びを得る生徒」の育成
～発問構成の工夫と対話の充実で、「深い学び」を促す～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

５．１　主題設定の理由

発問や意見交流の工夫を行いながら、生徒に「自分の考えをもち、他と考えを伝えあうことの楽しさ」を感じさせる授業実践を進めてきた。実践を進める中で，自己開示や自己表現を苦手とする生徒が多く，「話し合い」が「伝えあい」の域を越えず、考えを練り上げていく力が不足していることが課題として挙げられた。また，授業者の視点からは，ねらいの明確化，考える必然性をもった発問（主発問・補助発問）の練り上げ，考えを深めることのできる意見交流や自己内対話を充実させる対話の工夫が課題として挙げられた。

これらの課題を踏まえ、「深い学び」とは何かを考察していくとともに、「深い学び」を促すための「発問構成の工夫」と「対話（教材、他者、自己）の工夫」に焦点を当て、研究を進めることとした。

５．２　目指す深い学びの姿

多様な事象を，道徳的諸価値の理解を基に自己の関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え，自己の人間としての生き方について考えること。将来，道徳的な選択や判断が求められる問題に対峙した時に，自分にも他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力を育てることにつなげる。

６　研究の方法と内容

テーマに迫るための手立てとして，下記の３つの方法により研究を行った。

（１）複数教員による「ねらい」の練り上げ

○ 事前の生徒の価値観を共有

○ 「ねらい」と「深い学びの姿」の明確化

→学習指導要領「内容項目の指導の観点」を小学校第１学年から中学校までの観点を確認・共有し，「ねらい」と「目指す姿」を明確にする。

○ 多角的・多面的に考えられる対話の工夫

次の①，②の複数の側面を意識して，「発問」を考える。

① 生徒の目指す姿から考える：「学習指導要領」で捉える発問

② 島(2020)「氷山モデル」[1]（表１）から考える：「教材」で捉える発問

③ 対話の工夫：Google ストリーム，ジャムボードの活用

表１　島恒生(2020)「氷山モデル」

状況理解レベル	教材の場面や状況を把握すること
心情読解レベル	登場人物の感じたことや考えたこと
道徳的価値レベル	道徳的価値についての考え方や生き方，信念

（２）発問構成（主発問・補助発問）の工夫

「発問（主発問・補助発問）」について，西野(2017)を参考[(2)]に，発問がどの機能を意識して発する／発せられるものであるかを意識化し，明確にする（表２）。

表２　西野真由美(2017)「考え，議論する道徳」を実現する！ pp78-87　図書文化社

考えるための動詞	発問の例
比較する	○○と△△の違いは？　共通点は？
分類する	どんなグループ分けができるだろう？　分ける基準は？
関係づける	○○と△△はどんな関係だろう？　原因は何だろう？
視点（立場）を変える	○○の視点・別の人の立場からみるとどうだろう？
推論する・適用する	身近な問題・別の問題に当てはめるとどうなるかな？
具体化する	図に表してみよう
選択・判断する	どの考えがいちばんよいだろう？　なぜそう思う？
見通す	結果はどうなるだろう？　大切にした価値が実現するか？
批判する	ほんとうにそれでよいか？　ほかの方法はないか？
振り返る	学んだこと，よかったこと，これからの課題は何だろう？

（３）振り返りの工夫

○ どの対話（対教材・他者・自己）を通して価値観の再構築がなされたかを振り返り，その過程を認知する。

→ 振り返りの視点を授業導入時に意識させ，終末の振り返りで再度，意識化させる。これを積み上げることにより，道徳的価値を追求する姿を育むことができると考えた。

７　研究の成果と課題

７．１　研究の成果

（１）複数教員による「ねらい」の練り上げ

授業開始時点での生徒の道徳的価値に対する理解や学習指導要領における「内容項目の指導の観点」を共有することで，「ねらい」や「深い学びの姿」が具体化された。そのことにより，生徒が道徳的価値と自己との関わりを問い直し，より深い理解に至る指導に結びついた。

（２）発問構成の工夫

「話し合い」が「伝えあい」の域を超えるためには，問い返しの発問が有効であった。生徒の意見を深掘りするように問い返すことで，より深い学びに至ると考えられる。一人の生徒の意見について，他の生徒に問い返すことで，多面的・多角的な考えを引き出すことにつながった。

（３）振り返りの工夫

価値観の再構築に影響を与えたのはどの対話（対教材・他者・自己）であるかを考えさせることで，自己内対話を促され，当事者意識をもった道徳的価値を追求することに結びついた。

７．２　今後の課題

○ 複数教員による指導案検討は非常に有効であったが，検討するための十分な時間の確保が難しかった。検討するための時間を予定に組み入れるなどの対応が必要であると感じた。

○ 授業の終末に振り返りとして，その授業で考えたことや学んだことを記入させるが，その記述内容からは，その時間の成果だけを読み取ることが極めて難しい。パッケージ型ユニットとして小単元構想するなどの工夫が求められる。

８　運営の成果と課題

○成果：公開授業の教材を推進委員が各校で実践し，互いに参観し合い，協議会を繰り返したことでよりよい授業実践につなげることができた。生徒の実態は異なるが，同教材で実践を複数校で重ねることが大変有効であったと感じる。

○課題：参集形式で実施したが，新型コロナウイルス感染症の影響により，県，市，校内の状況が刻々と変化する中での実施形態の判断が難しかった。

引用・参考文献

（１）　島恒生(2020)「発達の段階に応じた道徳科の指導：校内研修シリーズ No67」,独立行政法人教職員支援機構, https://www.nits.go.jp/materials/intramural/067.html,(2022 年 10 月 7 日閲覧)

（２）　西野真由美(2017)「「考え，議論する道徳」の学習活動で価値と資質・能力をつなぐ」,「考え議論する道徳」を実現する会,『「考え，議論する道徳」を実現する！』,図書文化社

資　料

1　部会名　道　徳

2　郡市名　上越市　　3　会場校　上越市立板倉中学校

4　研究会開催期日　令和　4　年　11　月　29　日（　火　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育大学大学院　教授	早川　裕隆
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津中学校　教諭	安藤　正人
(3) 会場校責任者	上越市立板倉中学校　教諭	野上　浩樹
教科・領域担当者	上越市立板倉中学校　教諭	高井　瑞樹
(4) 研究推進委員	上越市立城東中学校　教諭	佐藤　皓
	上越市立城西中学校　教諭	岡田　敏哉
	上越市立八千浦中学校　教諭	丸山　摩耶
	上越市立板倉中学校　教諭	古山　圭太
	上越市立板倉中学校　教諭	竹田　雅代
	上越市立板倉中学校　教諭	藤原　明子
(5) 授業者	上越市立板倉中学校　教諭	鶴巻　華恵

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月11日（月） リモート開催	4	【研究推進委員会議題】 (1) 自己紹介 (2) 研究推進委員会と研究推進委員の役割について (3) 板倉中学校の研究について (4) 今後の日程について
2	8月4日（木） 上越市立直江津中学校	2	【研究推進委員会議題】 (1)　8/18 中教研第２回全県部会に向けての打合せ (2) 「進捗状況」「今後の進め方・留意点」「研究会に向けての疑問」 (3) 授業情報誌 Class の原稿案作成 (4) その他
3	9月15日（木） 上越市立板倉中学校	3	板倉中学校研修会（上廣道徳教育アカデミー拠点校事業）への参加 ・授業公開参観・協議会 【研究推進委員会議題】 (1) 授業情報誌 Class 第１次原稿の確認 (2) 研究推進委員会の位置づけ (3) 今後の日程について
4	9月26日（月） 上越市立城東中学校	6	研究主題に基づく授業公開　佐藤皓教諭「２通の手紙」　授業協議会
5	10月5日（水） 上越市立城西中学校	6	授業公開　城西中　岡田　敏哉　教諭「わたしのせいじゃない」 【研究推進委員会議題】 (1) 授業協議 (2) 研究会当日　分科会の担当決め
6	10月11日（火） リモート開催	4	授業公開　直江津中　安藤　正人　教諭　「わたしのせいじゃない」
7	10月27日（木） 上越市立板倉中学校	9	プレ授業公開　板倉中　古山　圭太　教諭「わたしのせいじゃない」 【研究推進委員会議題】 (1) 指導者からの指導 (2) 研究会当日の打ち合わせ
8	11月11日（金） 上越市立城東中学校 及びリモート開催	5	授業公開　城東中　佐藤　皓　教諭「わたしのせいじゃない」
9	11月25日（金） 上越市立直江津中学校	3	【研究推進委員会議題】 (1) 当日要項の確認 (2) 分科会の持ち方・進め方について (3) その他
10	11月29日（火） 上越市立板倉中学校	10	研究発表会
11	12月19日（火） 上越市立直江津中学校	5	研究の総括と今後の研究推進に向けて

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　６８　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　１９　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　４１　）名	(4) 教育委員会・センター	（　0　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　6　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　2　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	主題　偏見や差別のない社会の実現（内容項目Ｃ　公正、公平、社会正義） 教材　「わたしのせいじゃない」	鶴巻　華恵

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者
第１分科会	発問構成	上越教育大学大学院 教授　早川　裕隆　様	上越市立城東中学校 佐藤　皓　教諭
第２分科会	対話の工夫		上越市立八千浦中学校 丸山　摩耶　教諭
第３分科会	評価		上越市立城西中学校 岡田　敏哉　教諭

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和３・４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　渋　谷　祐　樹
（学校名：　魚沼市立湯之谷中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　道　徳

2　郡市名　　魚沼市　　3　会場校　　魚沼市立広神中学校

4　研究主題

道徳授業における「質の高い多様な指導方法」の具現化を目指して ～役割演技、問い返し発問の実践～

5　主題設定の理由

道徳授業の質的転換のためには、質の高い多様な指導方法の確立が求められている。文部科学省による報告の中には質の高い指導方法として以下の３つの方法が示されている。(「①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「②問題解決的な学習」「③道徳的行為に関する体験的な学習」)

本研究では「③道徳的行為に関する体験的な学習」に注目し、役割演技を用いた指導方法と問返し発問を実践することにより、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決する生徒の育成を目指し授業実践を行うこととした。

6　研究の方法と内容

役割演技や問い返し発問を用いることで、他の手法との比較を進めた。生徒の振り返りや、発問内容の吟味、発問することで評価項目に近づけるかなどを比較していった。また、魚沼市内各校での授業実践を重ねた。

7　研究の成果と課題

役割演技、問い返し発問の実践には一定の有効性は認められた。生徒の振り返りや道徳的価値に迫る発言、考えが多く見られるようになった。しかし、役割演技を実践するための授業準備や指導計画の作成の負担が大きい。完璧な計画・準備に時間を費やすよりも、教師自身も道徳の授業において生徒と共に考え議論し学び、成長していくという考え方があっても良いと考える。

8　運営の成果と課題

研究主題決定までに、多くの時間を費やし具体的な実践、研究を開始するのが少し遅かった。
より多くの授業機会を設けてを市内各中学校で実践し、具体的な発問内容を検討していけると良かった。研究発表会で公開した「二通の手紙」は様々な発問を実践し、評価項目（遵法精神）「法や決まり」を正しく理解することで、「法や決まり」を大切に守ろうとする考えが見られた。

当初予定していた参加人数を大きく上回る方々から、参加の申込をいただき大変ありがたかった。一方でコロナ禍での開催のため、感染予防を考えた会場、駐車場の確保が必要であった。また、研究発表会当日までにも、クラス内での感染拡大の心配もあった。小グループによる協議ではなくパネルディスカッション形式で参加者の方々から、多くの意見をいただき大変参考となるものとなった。

「役割演技を中学生でも実践しみたい」や「生徒とともに考え・議論する道徳を目指して日々の授業をしてみようと感じることができた」等の肯定的な感想をいただいた。

資　料

1　部会名　道　徳

2　郡市名　魚沼市　　3　会場校　魚沼市立広神中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１６日（水）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上廣道徳教育アカデミー・特任教授	小宮　健
指導者	魚沼市教育センター・統括指導主事	新澤　美和子
(2) 研究推進責任者	魚沼市立湯之谷中学校・教諭	渋谷　祐樹
(3) 会場校責任者	魚沼市立広神中学校・教頭	丸山　隆之
(4) 研究推進委員（授業者）	魚沼市立広神中学校・教諭	橋本　哲明
	魚沼市立湯之谷中学校・校長	高野　文忠
	魚沼市立魚沼北中学校・教諭	篠原　美沙代
	魚沼市立小出中学校・教諭	小柳　双葉
	魚沼市立堀之内中学校・教諭	池田　智美

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	5/30(月)　広神中学校	8	本年度の事業計画の確認
2	7/1(金)　広神中学校	8	指導案検討、授業実践の確認
3	10/3(月)　広神中学校	8	プレ授業、指導案検討、当日の運営計画準備
4	11/16(水)広神公民館	69	公開授業、パネルディスカッション・協議会
5	12/	8	今年度の活動のふりかえり、研修のまとめ等
6			

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　６９）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　９）名
(1) 郡市内中学校会員　（　２２）名	(4) 教育委員会　（　９）名
(2) 他郡市中学校会員　（　２７）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　２）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年２組	二通の手紙	橋本　哲明

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
パネルディスカッション	質の高い多様な指導方法」の具現化	上廣道徳教育アカデミー 特任教授　小宮　健　様 魚沼市教育センター 統括指導主事 新澤美和子　様	魚沼立広神中学校 丸山　隆之　教頭	当校教諭 橋本　哲明 渋谷　祐樹

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　堀　　徹
（学校名：　新潟市立新潟柳都中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　道徳

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立白新中学校

4　研究主題

「豊かなかかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成」
～対話を通して多面的・多角的に考えながら、最適解・納得解へ向かう展開の工夫～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

道徳部では，県中学校教育研究協議会が授業改善の方策として提唱する「深い学びにいたる授業」を，「教材，他者，自己との『かかわり（対話)』を通して，道徳的諸価値についての理解を深め，道徳性を養うこと」と捉え，授業内に効果的に位置づけることを目指してきた。

教科書の題材を活用しながら、教材，他者，自己との「豊かなかかわり」を意図的に取り入れた授業展開を行い、道徳的諸価値について多面的・多角的に考え，最適解から納得解を導く過程を通して、人間としての生き方についての考えを深め，よりよく生きようとする道徳的判断力，心情，実践意欲と態度を育成していくことを目指して，本研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

（1）研究の手順

深い学びにいたる授業を目指し、３つのキーワードである「対話」、「多面的・多角的な思考」、「最適解・納得解」を授業づくりのポイントとして、青陵大学の中野啓明先生よりご指導をいただきながら、以下のような流れで手立ての有効性を検証していく。

①３つのキーワードの捉えや授業づくりのポイントを授業者と幹事が共有して研究を進める。
②授業者が指導案を作成し、授業者と道徳部員で検討を重ねて指導案を修正していく。
③道徳部員がプレ授業を行い、授業者と道徳部員とで指導内容の見直し、修正を行う。
④授業者がプレ授業を行い、発問の仕方や指導内容に修正を加え、指導案を完成する。
⑤教育研究発表会で実践を行い、指導者からのご指導や参観者からの声をもとに授業を振り返り３つのポイントについて検証を行う。

（2）３つのポイントの捉えと指導内容

①「対話」について

・教材との対話・・・先哲や登場人物の行為や心情を深く読み取る。
・他者との対話・・・先哲や登場人物の行為や心情について、他者と考えや思いを交流する。
・自己との対話・・・教材、他者との対話を基に「自分はどう考えるか」と自己に問いかける。

３つの対話を授業内に効果的に位置づけ、道徳的諸価値について理解することや考えることを対話の目的として授業を構成する。

②多面的・多角的な思考」について

多面的な思考とは、他者との対話を通して、登場人物の行為や心情をより多くの視点で捉え、他者の視点や考えを知ることで思考や選択肢を広げることである。多角的な思考とは、他者の意

見や考えを聞くことで自分の選択肢を広げ、複数の考えを比較・検討した上で自分の考えをもつことである。事象を多角的に捉えることで、道徳的諸価値に対する理解をより深いものにする。

③「最適解、納得解」について

最適解とは、内容項目のねらいに対して妥当性があり、みんながおさえるべきポイントとして捉える。納得解は、最適解を踏まえた上で、自己との対話を行い、自分が納得できる納得解を探して、自分に戻していくことと捉える。最適解を導いた後で、問い返しや追加の発問を行い、課題を自分事として考えさせることで深い学びにいたる生徒の姿を目指す。

授業での捉えとしては、「最適解」を授業の「まとめ」、「納得解」を授業の「振り返り」として授業を構成する。

7　研究の成果と課題

研究発表会参観者からの授業後のアンケート結果

【質問】県中教研の目指す「深い学びにいたる授業」に向けて、「対話」「多面的・多角的」「最適解・納得解」の手立ては有効であったか。

４段階で評価	有効であった　1	2	3	有効ではなかった 4
対話	８４.２％（３２人）	１０.６％（４人）	2.6％（1人）	2.6％（1人）
多面的・多角的	６８.４％（２６人）	２１.１％（８人）	7.9％（3人）	2.6％（1人）
最適解・納得解	５７.９％（２２人）	２６.３％（１０人）	１０.５％（４人）	5.3％（2人）

【参観者の声】

○「他人との対話」だけに意識を向けるのではなく、教材との対話、自己との対話が効果的に行われていると感じた。教材→他者→自己と、ステップを踏んで、学びを深めている様子が見られた。

○授業のかなり早い段階でまとめ（最適解）を出されていたが、それが納得解を出すための仕掛けだと分かり感動した。一般的に正しいと言われていることは生徒の誰もが気づいていますが、そこで終わらせない授業が、真の意味で道徳の価値項目が将来に生きていくと強く感じた。

▼納得解を導き出す手立てがもう少し見たかった。

▼納得解を導くための話し合いで、少人数の立場の主張が弱くなっていった。

【成果】

・対話を中心とした授業展開により、生徒の多面的・多角的な思考を促進することができた。哲学対話、ＦＴでじっくりと語り合うことや思考ツール、ICT を用いて思考を可視化することなど、対話方法に工夫を凝らすことで深い学びへとつなげることができた。

・最適解を求めたあとで、問い返しや追加の発問をすることで課題を自分事として捉えさせた上で納得解を導くことにより深い学びにいたる生徒の姿を見ることができた。

【課題】

・生徒が自分事として納得解を導くための発問や展開の工夫、時間の確保が今後の課題である。

8　運営の成果と課題

・研究推進校の６人の授業者がつくった指導案で道徳部の幹事がプレ授業を行い、授業者と幹事で授業内容を繰り返し検討することで「深い学びにいたる授業づくり」を協力しながら推進することができた。

・分科会の時間の確保が難しく、短時間で効率よく運営することが今後の課題である。

資　料

1　部会名　道　徳

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立白新中学校

4　研究推進委員会（指定研究チーム）

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟青陵大学　教授	中野　啓明
(2) 研究推進責任者	新潟柳都中学校　教諭	堀　徹
(3) 会場校責任者	白新中学校　教諭	田村　友教
(4) 研究推進委員(授業者)	白新中学校　教諭	田澤　育江
	小合中学校　校長	太田　公仁
	高志中等教育学校　校長	灰野　仁
	関屋中学校　教諭	佐藤　貴代美
	鳥屋野中学校　教諭	増田　信枝
	上山中学校　教諭	田代　豪
	寄居中学校　教諭	小林　実
	白新中学校　教諭	丸山　郁美
	白新中学校　教諭	和田　卓之
	白新中学校　教諭	橋本　千裕
	白新中学校　教諭	笹原　佑介
	白新中学校　教諭	渡辺　一宗
	白新中学校　教諭	藍澤まき子

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	５月１９日（木）小合中	3	研究推進委員会　今年度の流れ、日程の確認等
2	５月２６日（木）白新中	１４	研究推進委員会　指導者と研究の方向性を確認
3	８月　８日（月）白新中	１３	研究推進委員会　模擬授業、指導者を交えて指導案検討
4	９月１６日（金）上山中	4	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
5	９月２０日（火）上山中	5	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
6	１０月１２日（水）上山中	5	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
7	１０月１３日（木）鳥屋野中	5	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
8	１０月１４日（金）関屋中	4	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
9	１０月１４日（金）寄居中	6	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
10	１０月１７日（月）新潟柳都中	6	プレ授業　委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
11	１０月１９日（水）白新中	１３	研究推進委員会　指導者の助言をもとに最終指導案検討
12	１１月　９日（水）白新中	3	研究推進委員会　２年次研究発表に向けた準備会
13	１１月１５日（火）白新中	7	研究推進委員会　２年次研究発表に向けた準備会
14	１１月２２日（火）白新中	7	研究推進委員会　２年次研究発表に向けた準備会
15	１１月２４日（木）白新中	１４	２年次研究発表会　公開授業、協議会、指導者による指導

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　５９　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　　0　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　５２　）名	(4) 教育委員会・センター	（　　1　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　　2　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　　4　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
１年１組	撮れなかった一枚の写真	橋本　千裕　教諭
１年２組	銀色のシャープペンシル	笹原　佑介　教諭
２年１組	嫌われるのを恐れる気持ち	田澤　育江　教諭
２年２組	人って、本当は？	和田　卓之　教諭
３年１組	命の選択	渡辺　一宗　教諭
３年２組	手品師	丸山　郁美　教諭 藍澤まき子　教諭

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
１学年分科会	「対話」「多面的・多角的」「最適解・納得解」について	新潟市立小合中学校 校長　太田　公仁　様	新潟市立鳥屋野中学校 増田　信枝　教諭	新潟市立白新中学校 橋本　千裕　教諭 笹原　佑介　教諭
２学年分科会	「対話」「多面的・多角的」「最適解・納得解」について	新潟市立藤見中学校 校長　田中　宏和　様	新潟市立上山中学校 田代　豪　教諭	新潟市立白新中学校 田澤　育江　教諭 和田　卓之　教諭
３学年分科会	「対話」「多面的・多角的」「最適解・納得解」について	新潟市立高志中等教育学校 校長　灰野　仁　様	新潟市立寄居中学校 小林　実　教諭	新潟市立白新中学校 渡辺　一宗　教諭 丸山　郁美　教諭 藍澤まき子　教諭

１０　全体協議会

全体会	指導者	司会者
全体指導	新潟青陵大学　福祉心理学部 教授　中野　啓明　様	新潟市立上山中学校 田代　豪　教諭

令和３・４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　後藤　陽子
（学校名：　五泉市立五泉中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　道　徳

2　郡市名　五泉市・東蒲原郡　　3　会場校　五泉市立川東中学校

4　研究主題

互いを認め合い、他の尊重する心の育成　　～豊かな心を育む道徳教育を通して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領では，「豊かな心」の育成の重要性が以下のように述べられている。

> 道徳教育を通じて育成される道徳性，とりわけ，内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度，豊かな情操などは，「豊かな心」だけでなく，「豊かな学力」や「健やかな体」の基盤ともなり，「生きる力」を育むために極めて重要なものである。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科　道徳編

道徳教育を通して育まれる道徳性は，「豊かな心」を育むとともに，「確かな学力」や「健やかな体」を支える基盤となることから，学校教育全般における道徳教育がより一層重要になってくると捉えた。よって，学校全体の教育活動と道徳教育を関連付けながら，教科横断的に一つ一つの教育活動の質を上げることで，生徒の道徳性を育み，「豊かな心」の育成につながると考え，川東中では学校全体で取り組むこととした。

この川東中の取組を受けて，郡市中教研道徳部も同歩調で研究を進めていくこととした。

6　研究の方法と内容

（1）研究の方法

川東中では，「豊かな心」を「互いに認め合い，他を尊重する心」と捉え，教育活動を道徳教育と関連付けて，１つ１つの教育活動の質を上げることで，生徒の道徳性を育み，この「豊かな心」の育成に取り組んでいる。

①道徳の授業

ア　内容項目の中で，特に「思いやり，感謝」「生命の尊さ」に重点をおいた指導を行う。

イ　考え議論する授業を計画的に行い，道徳的価値について多様な見方，考え方を育てる。

ウ　地域の資料や人材を生かし，切実感があり共感できる授業を計画する。

エ　体験したことをもとに，自己の行動や生き方を考える授業を計画する。

授業においては，初めにテーマに対して「それはどういうこと？」と投げかけて，いくつかの発問を経て，最後に考えがどう変容したかを見ていく。

②地域（保護者）と連携し，行事やボランティアへの積極的な参加を促したり，ゲストティーチャーを招聘したりする。

③各教科で作成した別葉をもとに，道徳との関連を重視して授業を行う。

（2）研究内容

①道徳的価値の理解を望ましい方向に変容させる議論（中心課題）の設定

②多面的・多角的に考える資料選定（提示方法）と発問の工夫
③主体的・能動的な授業参加と積極的な議論（発言）を成立させる場面設定
④道徳的価値の変容を見取る評価の内容とその生かし方
⑤道徳の授業を中心とした教育活動について，地域・保護者への発信と評価の生かし方

7　研究の成果と課題

＜成果＞実践を重ねる中で、中心発問の吟味と ICT 等の効果的活用により、以下に示す生徒の変容がみてとれた。

【中心発問】

授業者が「何を考えさせたいか」「最終的にどんなことを書いてほしいか」を考えて発問の文言を決める。初発の自分の考えを明確にし、班や全体での対話を通して学びを深める。

【ICT の活用等】

①ホワイトボード…議論を生んだりまとめたりするのに有効な手段であり、可視化することで仲間との意見の相違に気付くことができる。生徒同士での問い返しが生まれる。そのためには生徒の役割を決め、毎時積み重ねることで、議論が上達していく。
②ロイロノート…他との考えの比較や色分けで意思表示させることが容易で早い。
③モニター…書く・消す手間と時間が要らない。文字を残したい場合は黒板を使う。

【生徒の変容】

小規模校であり、人間関係は小学校から変わりなく９年間過ごす生徒たちである。研究主題である「互いを認め合い、他を尊重する心の育成」を意識しながら、日々培っているものの積み上げられた姿が、公開された２年間のすべての授業で見られた。どの授業でもたくさん話し、自分たちで問い返し、終末ではじっくり書いていた。

発表会当日に班で話すときも言葉がまとまらずにいた生徒に対して「どう？言える？」「もうちょっと待つ？」などの優しい言葉がけをしている生徒がおり、実生活でも確実に思いやりが育っていると感じることができた。

＜課題＞

【中心発問】

終末場面で自分の生き方について考えを深められる中心課題を精査することが大切である。

【ICT の活用等】

より効果的に使い分けることが大切である。

【補助発問＝深める問い】

生徒の考えを深めるためにテーマ発問と場面発問の間をねらって補助発問を行う。そうすることで考えが深まっていく。「本当にそれでよいのか」「もし～なら～するのか」「人としてどうするべきか」など、補助発問を連続させることで、生徒の思考を深く導くことができる。授業の中で、生徒の反応に対して適切な発問をなげかけるためにはたくさん準備し、生徒から出た問いを生かすことが必要であるとのご指導をいただいた。今後も継続して取り組むべき課題である。

8　運営の成果と課題

・今年度は授業を見たり、各校で指導案を作成したりして、一緒に研究を進めてきた。授業について話をする時間はとても有意義であった。
・プレ授業（川東中２年と五泉中３年）で構想を膨らませ、指導案の改善を図ることができた。
・郡市内中学校は６校だけなのに、研修会の日程調整が難しく、全員で集まることが難しかった。

資　料

1　部会名　道　徳

2　郡市名　五泉市・東蒲原郡　　3　会場校　五泉市立川東中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１０月　２６日（水）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	下越教育事務所　学校支援第２課長	田中　一史
(2) 研究推進責任者	五泉市立五泉中学校　教諭	後藤　陽子
(3) 会場校責任者	五泉市立川東中学校　教諭	西方　貴子
(4) 研究推進委員（授業者）	五泉市立川東中学校　教諭	髙野　由紀子
（プレ授業者）	五泉市立川東中学校　教諭	皆川　将太
	五泉市立五泉北中学校　教諭	佐野　明彦
	五泉市立村松桜中学校　教諭	香坂　しおり
	阿賀町立阿賀津川中学校　教諭	早川　あゆみ
	阿賀町立三川中学校　教諭	髙橋　延之

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	4 月 21 日（木）	23	**郡市中教研総会道徳部会** 川東中西方教諭より研究の概要を説明、共有。
2	7 月 13 日（水）	7	**第２学年授業「泣いた赤鬼」　授業者：皆川将太教諭** ・議論するための学級の雰囲気が良い。 ・生徒の発言に対して、即座に切り返したり深く掘り下げたりする補助発問があるとよい。そのために、予想される反応と補助発問をたくさん用意する。発問を連続させ、生徒が考えを深めていくことが大切である。 ・生徒の感想記述からは、今後も、本時のテーマである「やさしさ」について考え続けていくのだろうと思われるものがあり、良い授業だったと言える。
3	9 月 22 日（木）	6	**指導案検討１** 「命の選択」の指導案を各校で作成、実践した。それぞれの課題と成果を受け、本発表の指導案作成の方向性を確認。指導案の検討を行った。
4	10 月 4 日（火）	7	**指導案検討２** 指導案完成。プレ授業の計画と確認。発表当日の打ち合わせ。
5	10 月 20 日（木）	3	**当日の準備、打ち合わせ等**
6	10 月 26 日（水）	8	**授業公開、協議会** ・学習の雰囲気が良く、授業者の話し方や語り口も穏やかで良かった。 ・授業者の初の試みで、自分の意見をワークシートに書かずに班での議論を行ったが、生徒はよく話していた。 ・導入が工夫されていて、生徒の興味を引き出していた。 ・モニターを使った授業が板書の代わりに機能していた。 ・最後の感想記述も、自分と向き合ってじっくり書いている姿が見られた。
7	12 月 5 日（月）	6	**反省会**

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　４２　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0）名
(1) 郡市内中学校会員　（　２５　）名	(4) 教育委員会・センター　（　0）名
(2) 他郡市中学校会員　（　１７　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3	「命の選択」	髙野由紀子

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
・多面的、多角的に考え、個々の道徳的価値を深めるために、意見交換や議論の手法、場面設定は適切だったか。 ・中心課題を自分事として捉え、多様な意見を引き出す発問（補助発問）となっていたか。	下越教育事務所 学校支援第２課長 田中　一史 様	五泉市立五泉中学校 教諭 後藤　陽子	五泉市立川東中学校 教諭 髙野　有弘

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　竹田　祉薫
（学校名：　　長岡市立大島中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　　美　術

２　郡市名　　長岡市三島郡　　３　会場校　　長岡市立東中学校

４　研究主題

ICT を活用した主体的な表現活動の工夫

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

様々な研修を重ねて授業を構想し実践してきたが、生徒の表現能力を引き出しきれないと悩む教員や、間違いや失敗を恐れるといった自己肯定感の低い生徒が多い。主体的に授業に取り組み、意欲的に自己表現していく姿を目指して ICT を取り入れることは、学習の効果や意欲を引き出せると考えた。また、どの学校もタブレットを活用した授業実践が少ない。以上のことから、本研究主題を設定した。

本研究の題材は自画像である。自己と向き合う題材は、思春期である中学生にとって苦手とする生徒が多いと考えられる。そのため人はなぜ自画像を描くのかを問いながら、鑑賞や協働的な活動の中に、深い学びに至る手立てとしてタブレットの活用を講じることで、造形的な視点を養い、画家の人生や表現の工夫に気付きやすいと考えた。また、活動過程の中で行う写真投稿や教育支援ソフトでの交流は、生徒に短時間で理解し気付きを与えることができる。そして、新たな発想を生み出すきっかけをつくり、創意工夫していく喜びの姿につながると考えた。

６　研究の方法と内容

生徒の主体的な活動を促すための手立てとして、題材の導入時の鑑賞活動でクロムブックを活用する。多様なアプリケーションを目的に合わせて使い分け、普段は発言に消極的な生徒の意見を引き出すのである。そして、個の見方や感じ方を瞬時に一覧にしてまとめ、芸術的価値やよさを共有しやすくすることで、授業への主体性を高め、学習内容の理解を深める。

具体的には、1 時間目にジェームズ・アンソール作「仮面の中の自画像」についてグループ内で交流し全体に発表する。その際に、ジャムボードの付箋機能を使い、生徒全員の見方や感じ方が一目で分かるようにし、自画像を鑑賞する際に着目する造形的な視点を共有する。2 時間目は、16 枚の多様な表現の自画像作品から印象的な作品を、はじめは個人で読み解き、その後ムーブノートを使って批評し合う。

これらの活動を通して、自画像はただ顔を似せて描くのではなく、作者の気持ちや考え、人生そのものなどを表現していることを理解する。そして、生徒自身の自画像制作でも多様で自由な表現をしてよいという解放感や表現欲求の高まりを期待する。その際に、生徒の主体性を高めるためのタブレットを活用した手立ての有効性を検証したい。

７　研究の成果と課題

本時では、より「深い学び」につなげるためにICTの活用を、全体で意見を共有する場面に限定した。個人で思考を深める場面や円滑なコミュニケーションを目指す場面では、記憶に定着しやすい紙媒体を使用した。前時のワークシートの記述では、自画像を描く意味として、「記録に残すため」、「自分を客観視するため」などの内容が多かったが、本時は「言葉では伝えらない心の苦しみや叫びを表現するため」、「自分の気付かなかった内面や本当に大切なものを再確認するため」、「今の気持ちを素直に表すことで初めて本当の意味での自画像になる」などの記述より、自分なりの言葉で深く考察していることが確認できた。さらに公開授業後の教職員アンケートでは「同じ作家の２枚の自画像から心情を考える学習活動では、時代背景や心のもちように言及するなど、深く考え、多様な意見を出せていたことに感心した」、「ワークシートの記述の内容から、最初は自画像に苦手意識をもっていた生徒も、授業後に自分なりの自画像を描く意味を見いだしていることが分かった」、「語彙豊かに伝え合えた今回の鑑賞は、なぜ自画像を描くのか、どう自画像に描くのかといったモチベーションの高まりに、大いに効果的であったと感じた」などの感想があった。これらのことから、タブレットを活用した鑑賞は、生徒の主体性に一定の高まりが見られ、有効であったと判断する。

課題としては、生徒のタブレット入力に時間がかかったため、指示を簡潔にして入力項目を検討する必要があると感じた。また、今回提示した 16 作品を精査し、生徒が作品の考察に時間をかける余裕ができるよう改善していきたい。

８　運営の成果と課題

研究推進委員全員が、２年次もそのまま継続して運営に携わり、研究できたことの成果は大きい。研究推進委員のモチベーションは常に高く、より良い研究を目指して会議を重ねることができた。

２年次の第１回研究推進委員会では、昨年度の略案を改善した内容のプレ授業を立案した。昨年度の研究をベースに、新しい提案を含めてのプレ授業を検討したことで、全員が今後の方向性を再確認し、良いイメージをもってスタートすることができた。

７月には長岡市教育センターのタブレット研修を取り入れた。問題意識を共有し解決していくことで既有知識を広げた。

当日の研究発表会は２部構成で開催した。第１部は公開授業の協議会、第２部は研究推進委員６名、それぞれがテーマを設定して実践した題材の中でタブレットを活用した場面について発表した。

11 月の本研究の公開授業に向けて、より良い手立てを明らかにするため、研究推進委員による改善を重ねた授業を３回計画した。結果として２年次だけで公開授業は４回実践できた。本研究を通して、当日の公開授業者だけでなく、研究推進委員自らが当事者意識をもって研究に取り組んだことにより得た成果は指導者としての自信にもつながった。

運営については、常に感染症対策を考えながら、緊張感をもって早めに情報収集等の準備を行った。当日の公開授業と協議会の会場や駐車場の広さから問題が無いと判断し、発表当日のオンライン開催は計画しないことにした。会場責任者からは運営も含めて様々な場面で助言をいただき、安心して当日を迎えることができた。

反省点として、当日の流れが２部構成のため「開会のあいさつ」と「研究の概要の説明」を授業前に行うなど、余裕のある時間設定が必要であった。授業後のアンケートは、グーグルフォームを利用して集計した。全参会者が「今後の教育活動の参考になった」と回答したが、タブレットの情報交換の時間がもう少し欲しかったという意見もあった。ICT 活用に関する授業研究の必要性を感じた。

資　料

1　部会名　美　術

2　郡市名　長岡市三島郡　　3　会場校　長岡市立東中学校

4　研究会開催期日　令和 4 年 11 月 10 日（木）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	阿賀町立阿賀津川中学校　校長	稲生　一徳
(2) 研究推進責任者	長岡市立大島中学校　副部長	竹田　祉薫
(3) 会場校責任者	長岡市立東中学校　教頭	久保　俊幸
(4) 県･郡市指導主事	新潟県義務教育課　副参事・指導第２係長	清水　康一
(4) 研究推進委員（授業者）	長岡市立東中学校　教諭（授業者）	岡地　大輔
	長岡市立南中学校　教諭	岡本　真梨
	長岡市立東北中学校　教諭	鈴木　史那子
	長岡市立江陽中学校　教諭	佐藤　隆幸
	長岡市立関原中学校　教諭	永井　愛
	新潟大学附属長岡中学校　教諭	池田　義広

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 13 日　大島中学校	6	・公開授業に向けたプレ授業の実施　授業者　竹田　祉薫 （昨年度の略案を改善した内容で実施・自画像） ・２年次の日程確認　・今後の係分担決め　・授業情報誌原稿について
2	6 月 21 日　江陽中学校	6	・ICT を活用した授業実践①　授業者　佐藤　隆幸 （ブックカバーのアイデアスケッチ場面） ・授業後の協議会　・ICT 情報交換　・授業前後アンケート検討
3	7 月 14 日　南中学校	7	・ICT を活用した授業実践②　授業者　岡本　真梨 （水墨画の鑑賞場面） ・授業後の協議会　・長岡市教育センターICT ミニ研修
4	8 月 1 日　東中学校	6	・第２回全県部会報告　・Class 原稿の確認　・第２部の内容確認 ・当日の日程確認　・２次案内のお願い
5	8 月 29 日　関原中学校	6	・ICT を活用した授業実践③　授業者　永井　愛 （立体作品の鑑賞場面） ・授業後の協議会　・略案検討　・第２部の配布資料、プレゼンテーション内容
6	9 月 15 日　東中学校	6	・指導案略案検討　・プレゼンテーションボードの内容検討 ・会計執行状況の確認、購入品の確認
7	10 月 5 日　東中学校	7	・指導案検討　・プレゼンテーションボード制作 ・冊子の内容検討　・旅費について
8	10 月 19 日 東中学校	7	・参加の名簿確認　・指導案の確認　・全体会の確認　・冊子の最終確認 ・発表当日の準備と運営について　・会場確認
9	11 月 8 日　東中学校	6	・完成冊子のページ確認、レジュメ確認　・旅費の支払い　・会場確認 ・公開授業の変更点を確認　・公開授業後のアンケートの確認、修正
10	11 月 10 日 東中学校	7	・美術科教育研究発表会
11	12 月 5 日　東中学校	6	・成果と課題

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　34　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　20　）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　13　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年3組	心の自画像　～自分らしい表現を目指して～	岡地　大輔

研究推進委員による実践発表　深い学びへの手立て「ICT を活用した主体的な表現活動の工夫」

題材・テーマ	発表者
私と本	竹田　祉薫
水墨画	岡本　真梨
抽象絵画	鈴木 史那子
ブックカバーのデザイン	佐藤　隆幸
立体表現	永井　愛
学友会スローガン『Prism』横看板作成プロジェクト	池田 義広

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体会	①生徒が主体的に活動するための ICT 活用の工夫は有効であったか。 ②深い学びに至るための手立ては有効であったか。	阿賀町立阿賀津川中学校 校長　稲生　一徳　様 新潟県教育庁義務教育課 副参事・指導第2係長 清水　康一　様	長岡市立大島中学校 教諭　竹田　祉薫	長岡市立南中学校 教諭　岡本　真梨

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和　４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　野原　千絵
（　学校名：　村上市立村上第一中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　美術

2　郡市名　　村上市岩船郡　　3　会場校　　村上市立村上東中学校

4　研究主題

主体的に美術と関わり、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深める指導の工夫 ～対話型鑑賞の実践と通して～

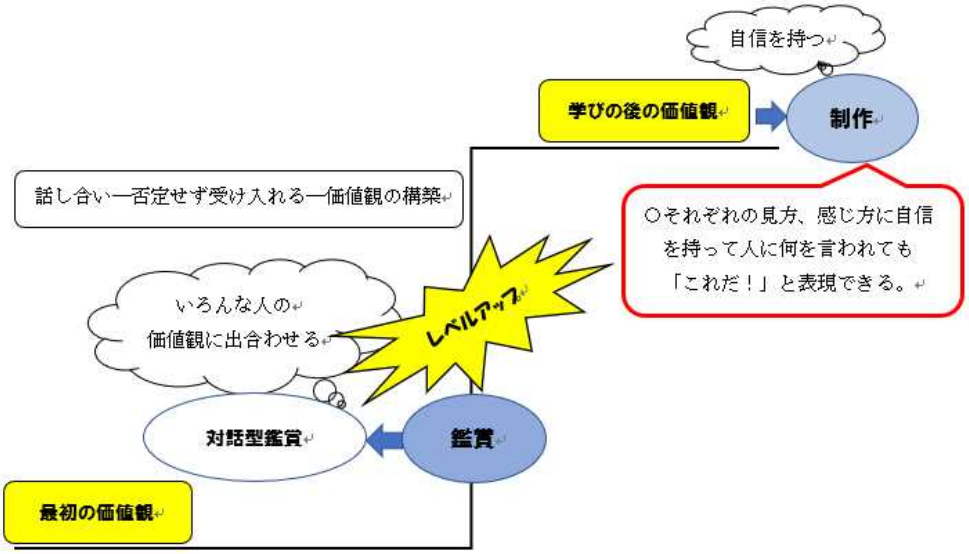
5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

中学校美術科学習指導要領解説美術編に「造形的な良さや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。」が目標として掲げられている。

当地区の美術科の課題として、教師の求めている「正解」を探したがったり、深く考えずに安易な表現で終わらせてしまったり、鑑賞においても限られた視点だけで見てしまったりする生徒が多いことが挙げられる。そこで、当郡市中教研では、それぞれの見方、感じ方に自信をもって人に何を言われても「これだ！」と表現できる生徒の育成を目指し、上記の研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

当郡市中教研では、３年前から美術館学芸員を講師に招き対話型鑑賞（VTS）の研修を行い、見識を深めてきた。VTS（Visual　Sinking　Strategies）とは、ニューヨーク近代美術館の教育部を務めたフィリップ・ヤノウィンが、鑑賞教育における知識偏重型の指導に疑問を抱き開発した指導法であり、題名など作品に関する情報は与えず、絵からわかることを通して、作品の理解を進めるものである。対話型鑑賞（VTS）は、作品をみる人同士の対話を通して作品の理解を深め、鑑賞者が作品の価値を作り出すことができる。この活動により①自分とは違う見方や感じ方と出会うことで視野が広がる。②他者を受け入れるとともに自分を受け入れてもらうことで自己有用感が高まる。③想像力の育成につながる。ことが期待される。



鑑賞と作品制作は切り離せるものではなく、循環した学びになると考える。鑑賞の方法、または制作の導入として対話型鑑賞を行うことで、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深めるとともに、自分自身の作品制作においても自分の見方、感じ方に自信を持って主体的に表現する生徒の育成につながる。

7　研究の成果と課題

対話型鑑賞という手法で作品鑑賞をすることについて、生徒アンケートからまずは鑑賞を楽しいと感じ、鑑賞への抵抗がなくなったと回答する生徒が多数いたことが大きな成果と言える。

「絵の見方」のポイントを抑えること、作品を細部まで鑑賞しやすく提示する（全体に実物大の複製作品、班や個人に縮小した複製作品）こと、多様な意見を出しやすく共有しやすいように工夫する（透明の付箋等の準備、グループ活動と全体による学習形態）ことにより、生徒が主体的にクラスメイトと関わりながら活動することができた。個人で最初に受けた印象をもとに根拠を持ち意見を付箋に書いて貼ったり、グループ内でファシリテーションをしっかりと形式立てて行ったりすることによって、言語能力の向上にもつながった。

そして、他者の意見を聞くこととともに、自分の意見を伝えることの重要性に気づけた。なぜなら、一人一人の違う意見を持ち寄ることが課題解決につながったからだ。その中で、人それぞれ感じ方や考え方が違っていいという安心感から、他者の見方を知ることで多面的・多角的に作品を捉える目を養うことができた。さらに活動を通して他者受容、自己受容ができ、自己有用感が得られたと感じる。

課題は、見方や感じ方を「深める」ことにおいて、自分の考えと他者の考えをもっと批評し合って、最終的に自分の考えに自信をもったり、見直したりするところまでもっていくということである。今回は１時間という制約の中でそこまではできなかったが、今後この活動を繰り返していく中で生徒がスムーズに話し合い、美意識を高め、見方や感じ方を深めていくことを目指したい。

8　運営の成果と課題

・郡市中教研の美術部員の数が非常に少ないため、一人一人の仕事分担が大きく集まる回数も多かったが、その分結束力が高まった。
・研究会当日の授業クラスや学年で何度もプレ授業を実践したことで生徒理解と教材研究が進み、部員一人一人が授業を自分事として考えることができた。
・研究会当日が、関東ブロック大会の開催日と重なった。美術科以外の教員に見てもらえる貴重な機会ではあったが、本来の趣旨としては美術科教員にもっと参観してもらいたかった。事務局や各地区からの働きかけをお願いしたい。
・集計を考慮し QR コードによるアンケートを実施したが、回収率が低く、今後の課題として残った。

資　料

1　部会名　美　術

2　郡市名　村上市岩船郡　　3　会場校　村上市立村上東中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１１日（金）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1)指導者	下越教育事務所学校支援第２課・指導主事	磯部　睦
	胎内市立中条中学校　・校長	丹後　直子
(2)研究推進責任者	村上市立村上第一中学校・教諭	野原　千絵
(3)会場校責任者	村上市立村上東中学校　・教頭	髙橋　一哉
(4)研究推進委員（授業者）	村上市立神林中学校　・校長	宮川佳代子（顧問）
	村上市立村上東中学校　・教諭	杉﨑　浩子（授業者）
	関川村立関川中学校　・教諭	大堀　千歌
	村上市立荒川中学校　・教諭	井上　美歩

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7/4／村上東中学校	6	プレ授業１、検討会
2	8/1／新潟市美術館	1	学校×NIIGATA アートリンク　参加
3	8/19／神林中学校	6	単元構想、指導案検討、授業情報誌原稿作成
4	10/4／神林中学校	6	指導案検討
5	10/6／村上東中学校	5	プレ授業２、検討会
6	10/18／神林中学校	5	指導案検討
7	10/24／村上東中学校	4	プレ授業３、検討会
8	10/28／神林中学校	5	指導案検討、要項作成
9	11/10／村上東中学校	4	資料準備、会場準備
10	11/11／村上東中学校	6	研究発表会
11	12／16 荒川中学校	4	２年目の成果と課題について

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　４２　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　4　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　２１　）名	(4) 教育委員会・センター	（　　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　8　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　2　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年２組	鑑賞　岡本太郎『森の掟』	杉﨑　浩子　教諭

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者
①　「対話型鑑賞」は主体的に美術と関わり、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深めるために有効であったか。 ②　美術科における「深める問い」とはどういうものか。	下越教育事務所学校支援第２課 指導主事　磯部　睦　様 胎内市立中条中学校 校長　丹後　直子　様	村上市立荒川中学校 井上　美歩　教諭

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　梅田　茂明
（学校名：刈羽村立刈羽中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　技術・家庭

２　郡市名　柏崎・刈羽　　３　会場校　柏崎市立鏡が沖中学校

４　研究主題

持続可能な社会の構築に向けて生活を工夫し創造する生徒の育成
～よりよい生活の実現に向かう力を高める学習指導の工夫～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

『技術・家庭の見方・考え方』を働かせながら，最適解を導き出すことができる生徒の育成に取り組んだ。試行錯誤を繰り返すことで深い学びを促進したり，生徒に身近な題材を取り扱うことで既習事項をこれまでと異なる視点で捉え直したりする成果が得られた。一方で，使用者の立場や使用者の購入後の行動を検討する機会が少なく，課題として残った。

この前研究の成果と課題を受け，製品使用者の使用場面や用途を具体的に検討できるよう「持続可能な社会」を「あらゆる年齢の人々が住み続けられる社会」に着目し，目指す生徒の実現を目指そうと考えた。

「あらゆる年齢の人々が住み続けられる社会」の観点から,自分たちの生活を見つめ直し,課題を見つけ仲間と共に解決する方法を探った。「総合的な学習の時間」で取り組んだ高齢者疑似体験を基に,家庭分野では,高齢者を含んだ家族全員が安心して暮らせる住宅のリフォーム案を考えた。さらに技術分野では,誰もが快適に暮らすため,計測・制御のプログラミングを利用して解決できる課題の最適解を使用者のニーズを踏まえて導き出そうとした。このように家庭分野と技術分野での学びを関連させ考えを深め,持続可能な社会の実現を目指そうとする実践力を育みたいと考えた。

６　研究の方法と内容

両分野から「住居」を捉え直し,「よりよい生活の実現に向かう力」を育む過程で、学びが深まることをイメージした。

「よりよい生活の実現に向かう力」を，家庭分野では「超高齢社会を迎える我が国において，高齢者とともに生活を営む力」，技術分野では「人口減少社会を迎える我が国おいて，家族生活を支える計測・制御のプログラミングによって解決する力」と定義し，題材開発に着手した。研究１年次では，教材開発や地域の教育資源に主眼を置き，研究開発に取り組んだ。

そして，研究２年次では異なる両分野の学習内容をより有機的に連携させ,限られた時数の中で効率よく教科運営をするための工夫等に取り組んだ。また,技術分野では課題に取り組む小集団の見直し,家庭分野では話合い活動の活発化に力を入れた。

以下に研究の手立て（深い学びにいたるポイント）を示す。

・ポイント１）全体を貫く学習課題の把握

「総合的な学習の時間」と連携して学習を進めた。生徒が生活の中にある問題を発見できるよう,高齢者疑似体験の場を設けた。教科の学習では,この体験を基に問題の解決方法を提案した。

・ポイント２）地域人材と協働し，検証する場面の設定

住宅や高齢者介護の専門家など,地域の人的資源を活用し,生徒の提案を検証する場面を設定した。学校外の方との交流により問題解決の視点が広がり,さらに熟考することにつなげた。

・ポイント３）課題解決のために試行錯誤する場面の確保

教科の「見方・考え方」を働かせ,課題解決のための方法を試行錯誤する場面を設けた。課題解決に向けた活動を繰り返しながら,最適な方法が提案できるよう取り組んだ。

7　研究の成果と課題

（1）成果

参加者アンケートのまとめより,各ポイントの肯定的な意見の割合は,『全体を貫く学習課題の把握』100%(内「有効だった」92.3%),『地域人材と協働し,検証する場面の設定』100%(内「有効だった」61.5%),『課題解決のために試行錯誤する場面の確保』92.3%(内「有効だった」61.5%)だった。そして,研究主題『持続可能な社会の構築に向けて生活を工夫し創造する生徒の育成～よりよい生活の実現に向かう力を高める学習指導の工夫～』の達成度は100%(内「達成できている」41.7%)だった。この結果より,一定の成果を挙げることができたと言える。

総合的な学習の時間から技術・家庭科へと学習課題を貫けたため、学ぶ目的がより明確となり、主体的に取り組む生徒たちの意欲が最後まで継続することができた。改めて学習に対する動機付けの大切さを感じた。

（2）課題

「深い学びの姿の定義が甘かった」とご指導をいただいた。深い学びにいたるポイントは適切であったことは数値に表れているが、どのような姿(またはプリントの記述等)が表出することで深い学びの姿なのか、観点別評価基準のA評価等に具体性をもたせることが必要だったと思われる。そこで探究学習においてはルーブリック評価を確立させることにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現を果たすことができると考えられる。

（3）その他

・振り返りに意見共有アプリケーションソフトを利用することは、様々な面で有効だった。
・プレ授業には両分野の推進委員が参加し、協議することが望ましい。
・廊下等に、これまでの授業の様子や使用した教材を掲示または展示した方が良い。

8　運営の成果と課題

（1）成果

コロナ禍であることや県内に中学校技術・家庭科教員が点在していることの理由から、本研究発表会は県中教研上越地区で初めての試みのハイブリット形式で実施した。研究推進委員会での振り返りでは、上越教育大学大学院生の協力(学校支援プロジェクトの一環)のおかげで予定通りに実施することができたことを確認した。上越地区以外の遠方からの参加もあり、一定のねらいを達成することができたと言える。

（2）課題

Zoomで参加された数名の方のアンケートに,「音声が聞こえないことや周辺の音と混ざって聞き取れない部分がありましたが,仕方ないことだと思った。」「ICT の担当者を複数名配置するようなことが叶うなら,より円滑に進むのかもしれない。」「限られた中で授業の参観やグループ協議もでき,色々と配慮していただき,ありがたかった。」と記されていた。これを受けて、研究推進委員会では「Zoom 担当は３名必要」「機器の配置間隔を広く」「Zoom 参加者だけのグループ編成(ただし、司会は推進委員。)」等の改善策が出た。

（3）その他

・研究推進委員を招集し、会場準備を前日からおこなった方が良い。
・業務削減のため、参加者から自校で使用している名札を持参してもらう。
・参加者アンケートはプリント記入とネット入力の両方を準備する。
・可能であれば、技術分野も家庭分野も同校同日開催で、近い授業会場が望ましい。

資　料

1　部会名　技術・家庭

2　郡市名　柏崎・刈羽　　3　会場校　柏崎市立鏡が沖中学校

4　研究会開催期日　令和４年　１１月１８日（金）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	東　原　貴　志
	柏崎市教育委員会・指導主事	樋　口　雅　樹
(2) 研究推進責任者	刈羽村立刈羽中学校・教頭	梅　田　茂　明
	柏崎市立第二中学校・教諭	青　木　久美江
(3) 会場校責任者	柏崎市立鏡が沖中学校・教頭	吉　田　　聡
(4) 研究推進委員	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	前　澤　　侑 （技術分野授業者）
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	長谷川　智　美 （家庭分野授業者）
	柏崎市立第一中学校・教諭	布　施　　歩

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６月　３日(金) /鏡が沖中	7	指定研究会当日の日程や今後の予定について
2	６月２９日(水) /鏡が沖中	6	CLASS７原稿の検討Ⅰ
3	７月２８日(木) /鏡が沖中	7	CLASS７原稿の検討Ⅱ
4	９月　１日(木) /鏡が沖中	7	指導案検討,協議題・協議会の進め方の検討
5	１０月１８日(火) /鏡が沖中	7	指導案検討,協議会グループ編成
6	１１月１１日(金) /鏡が沖中	7	家庭分野プレ授業
7	１１月１７日(木) /鏡が沖中	8	明日の会場準備,日程や準備分担等の最終確認
8	１１月１８日(金) /鏡が沖中	8	研究会当日,研究推進委員会の振り返り

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　５３　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　１２　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　１５　）名	(4) 教育委員会・センター	（　２　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　１６　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　８　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年２組	家庭分野／A 家族・家庭生活（４） リフォームで家族が安心して住める住空間をゲットしよう！	長谷川　智　美
２年１組	技術分野／D 情報の技術（３） 誰もが快適に暮らせる『スマートホーム』を考えよう	前　澤　　侑

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
本研究の深い学び にいたるポイントの有効性等	上越教育大学 教授　東原　貴志　様	柏崎市教育委員会 指導主事　樋口　雅樹　様	刈羽村立刈羽中学校 教頭　梅田　茂明

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和　4 年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　寺田　敬史
（学校名：　新潟市立山潟中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　技術・家庭

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立新津第五中学校　新潟市立山の下中学校

4　研究主題

生活を工夫し，創造しようとする生徒の育成 ～実践的・体験的な活動を通して学び合う授業～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

"技術"や"家庭生活"は，社会や環境と相互に影響し合い，時代とともに進歩，変容していくものである。そのような時代の変化の中でも，よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて，生活を工夫し創造しようとする子どもに育てていくことが私たちの教科に求められている。

変化し続ける社会に主体的に対応していくためには，生活や社会の中から問題を見いだし課題を設定し，試行錯誤しながら，自分なりの解決策を見つけ出す力が必要である。そこで本主題を設定し、研究を進めていくこととする。

6　研究の方法と内容

今回の指定研究では，技術分野、家庭分野に分かれて「深い学び」に向けての授業研究を行った。

技術分野では，「D情報の技術」においての授業研究を進めた。学習課題を「計測制御のシステムを栽培に生かそう」とし，２年時に栽培したリーフレタスのプランター栽培の経験の中で感じた課題に対して，３年時に学習したプログラミング学習用教材「micro:bit」を活用して解決策を見つけ出すことにした。２年時の学習での振り返りを参考にしながら，全体で課題を共有した。また，スマート農業の普及とも関連させ，現在や未来と関連させながら既習事項と生活・技術を関連付ける題材とした。そして，関わり合いの中で課題解決を進めるため，グループ活動の中でフローチャートを用いて話し合いが進むようにし，視覚でとらえながらプログラミング的な思考で粘り強く試行錯誤できるようにした。そして，課題を明確にしてから実証実験を行い，グループによる実践的・体験的な学び合いの活動を通して問題解決できる場を設定した。

家庭分野では，「B衣食住と生活」においての授業研究を進めた。学習課題を「災害に備えた住まい方について考えよう」とし，修学旅行や総合的な学習の時間で実施した防災学習の内容や防災士，消防士の情報をもとに「家族の安全を考えた住環境」を設定することにした。そして，関わり合いの中で課題解決を進めるため，グループ活動の中でシンキングツールを用いて話し合いが進むようにし，タブレットによるシミュレーションにより視覚でとらえながら思考錯誤できるようにした。そして，課題を明確にして他者と意見交換をし，グループによる学び合いの活動を通して問題解決の場を設定した。見つけ出した解決策をもとに，実践する内容を決定させた。

7　研究の成果と課題

＜技術分野＞

○前年度に実践したリーフレタスの栽培での苦労が問題課題の発端であることから，生徒も課題解決に向けて意欲的に取り組んでいる姿が見られた。

○他者との関わりを多く設定しており，意見交換を積極的に行う姿が見られた。自分で考えたフローチャートを見せ合う場面もあり，自分の考えを整理して発表することができていた。

○プログラム内の「しきい値」の決定を実証実験によりプログラムの動作状況を確認しながら自分たちの実践のためのプログラムを完成させることができていた。

○３年生において融合教材を行うという指導要領に準拠している実践であった。

○ワークシートの記入の時間を確保し，振り返りの中でグループから個の学習に落とし込むことができていた。

●「水やり」に焦点を当てて授業を進めているが，他にも挙げられた課題に対して触れないまま進めてしまった。

●タブレットの使用や実証実験の実施などのために説明が多くなってしまった。

＜家庭分野＞

○総合的な学習で十分に学習してきた防災，減災を考える学習課題であることから，問題解決の必要性を十分に理解しており，課題の設定・解決に向けて意欲的に取り組むことができた。

○シンキングツールを効果的に活用し，個々が自分の考えを可視化し，発表しやすい状況を作るとともにグループ全員の意見を共有しやすく，グループの考えの方向性をまとめるために役立てることができた。

○タブレットを用いてのシミュレーションの後，他者と検討することで考えを深めることができた。また，それをもとに個人の実践の決定をすることができていた。

○ジグゾー法により，グループ学習による学び合いの活性化が生まれていた。

○学習課題を生徒が十分に理解していたため，個での振り返りが積極的に行われていた。

●防災士の講話からスタートしたために，対策方法についてのアイディアが限定されてしまった。

●総合的な学習の時間と連動させたが，教科独自の学びから逸れないように注意しなければならないと感じた。

8　運営の成果と課題

○技術分野，家庭分野の分かれての開催ではあったが，参集しての研究会ができ，活発な意見交換がなされた。また，教員同士の情報交換の場にもすることができた。

○複数回の授業実践を動画として発表することで，実践の流れをわかりやすく発表できた。

○ジャムボードを活用しての協議会を実施することで，個々の意見が反映されるとともに，タブレットのアプリに関しての知識を深めることができた。

○タブレットの不具合も想定して，ＩＣＴ支援員を依頼することで，即時に対応することができた。

○新潟市立総合教育センター上野一志指導主事，尾形美穂指導主事より指導をいただきながら，教科の取り巻く状況の話もいただき，最新の動向を知ることができた。

●模擬授業が実施されなかったことから，授業の流れ等を議論する場もなく，授業者への負担が大きくなる研修になってしまった。

●授業を参観できなかったことから，動画だけではわかりにくい部分があった。また，そのために説明が長くなってしまった。

●遠方の参加者のためにもオンラインでの参加もできるよう，環境を整えても良かった。

資　料

1　部会名　技術・家庭

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立新津第五中学校　新潟市立山の下中学校

4　研究会開催期日　令和　４年　１１月　１０日（　木　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	上野　一志
	新潟市立総合教育センター・指導主事	尾形　美穂
(2) 研究推進責任者	新潟市立山潟中学校・教諭	寺田　敬史
	新潟市立内野中学校・教諭	芳賀志津子
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第五中学校・教頭	堀口　晃一
	新潟市立山の下中学校・教頭	石黒　裕則
(4) 研究推進委員（授業者）	新潟市立新津第五中学校・教諭	土屋　稜太
（授業者）	新潟市立山の下中学校・教諭	赤塚　仁美
	新潟市立葛塚中学校・教諭	鶴巻　政義
	新潟市立関屋中学校・教諭	金谷　佐保
	新潟市立小針中学校・教諭	牛腸　俊樹
	新潟市立新津第二中学校・主幹教諭	板垣　淳二
	新潟市立白根北中学校・教諭	須貝　綾子
	新潟市立松浜中学校・教諭	坪井　暁子
	新潟市立山の下中学校・教諭	村山喜代志
	新潟市立亀田西中学校・教諭	鎌田　しづ
	新潟市立坂井輪中学校・教諭	林　成一
	新潟市立巻西中学校・教諭	坂中　大勉
	新潟市立上山中学校・教諭	松川　知克
	新潟市立葛塚中学校・教諭	南　明美
	新潟市立新津第五中学校・教諭	増井　規子
	新潟市立坂井輪中学校・教諭	星　直子
	新潟市立巻西中学校・教諭	菅野　明子
	新潟市立上山中学校・教諭	佐藤　真理

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/19　山潟中学校	20	公開授業の方向性を議論
2	6/23　新津第五中学校	8	公開授業の指導案検討 教材研究
3	6/23　山の下中学校	9	公開授業の指導案検討
4	7/7　新津第五中学校	8	公開授業の指導案検討　教材研究
5	8/26　新津第五中学校	8	公開授業用の授業撮影
6	8/26　山の下中学校	10	公開授業の指導案検討
7	9/7　内野中学校	2	公開授業の指導案検討
8	9/16　新津第五中学校	8	公開授業用の授業撮影
9	10/13　山の下中学校	11	公開授業用の授業撮影と編集
10	10/20　山の下中学校	11	公開授業用の授業撮影と編集

回	実施日／会場	人数	主な内容
11	10/21　新津第五中学校	5	公開授業用の授業撮影
12	10/27　山の下中学校	11	公開授業用の授業撮影と編集
13	11/1　新津第五中学校	8	当日の最終打ち合わせ
14	11/9　山の下中学校	3	当日の最終打ち合わせ

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　８１　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　７５　）名	(4) 教育委員会・センター　（　2　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　3　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　1　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
３年４組	計測制御システムを栽培に生かそう	土屋　稜太	３年	災害に備えた住まい方について考えよう	赤塚　仁美

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
技術分野	本研究の深い学びにいたる有効性	新潟市立総合教育センター 指導主事 上野　一志　様	新潟市立葛塚中学校 鶴巻　政義教諭	新潟市立 山潟中学校教諭 寺田　敬史
家庭分野	本研究の深い学びにいたる有効性	新潟市立総合教育センター 指導主事 尾形　美穂　様	新潟市立内野中学校 芳賀志津子教諭	新潟市立 内野中学校教諭 芳賀志津子

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和　４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　白川　大輔
（学校名：　上越市立清里中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　特別活動

２　郡市名　上越市　　３　会場校　上越市立牧中学校

４　研究主題

個々の生徒の自己実現に向けた主体的な実践活動

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領の特別活動の目標には、「集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」(学びに向かう力、人間性)とある。また、３つの視点のうち「自己実現」について、そのために必要な資質・能力は、「自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれるものと考えられる。」とある。小規模校である本校の生徒は、素直で真面目な反面、受け身であったり、人間関係が固定化されていたりという課題がある。また、自分自身や将来についても、「よく分からない」「自信がない」といった生徒が多い。そこで、本研究ではキャリア教育を軸に、自分の生き方を考える実践的な活動を行いたいと考えた。育成を目指す資質・能力としては、例えば、中学校卒業後の進路や社会生活に関する幅広い情報を理解し、自分を見つめ、目指すべき自己の将来像を描くことができるようになることが考えられる。また、そうした過程を通して、生涯にわたって段階的な目標の達成と、自らの社会的・職業的自立に向けて努力しようとする態度を育てることなどが考えられる。生徒が、将来直面する様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会的・職業的に自立していくためには、生徒一人一人が、学ぶこと、働くこと、そして生きることについて考え、それらの結びつきを理解していくことで、多様な他者と協働しながら、自分なりの人生をつくっていく力を育むことが必要であると考え、本研究主題を設定した。

また、目指す深い学びの姿として『生徒一人一人が、自分の将来の生き方や生活、地域の将来について興味・関心をもち、イメージをもつと共に、自ら課題を見いだして、学ぶこと、働くこと、他人とかかわること、そして生きることについて考え、見通しと目標をもって生きていこうとする姿。』とした。

６　研究の方法と内容

「どんな自分になりたいか」をテーマに様々な活動に取り組んだ。最終的なゴールとしては、「タイムカプセルに１０年後の自分へのメッセージを残そう！」というものを掲げた。主に特別活動と総合的な学習の時間を教科横断的に連携させたキャリア教育を展開した。生き方を学ぶため、地域を学ぶために、牧で熱い思いをもって活動し、活躍されている方々のミニ講演会を定期的に開催したり、地域について探究する活動や、職場体験学習を行う総合的な学習の時間や道徳科の授業とも連携しつつ、職業観や将来像を醸成した。学校運営協議会（コミュニティー・スクール）との連携も重要で、講師の紹介や、生徒の話合いへの参加など、協力を仰ぐ場面が多々あった。共に活動する中で、生徒の地域に対する愛着や、地域に貢献したいという気持ちも育まれることを期待している。

特別活動は、学級活動、生徒会活動及び学校行事の各内容から構成されている。生徒がタイムカプセルを意識したとき、各学校行事や生徒会活動において、自分たちで考え、意見を出し合いながらその活動をよりよくしようとする。そして、その過程をポートフォリオとして保存し、10 年後にも共有したいと願う。つまり、よりよい活動を目指す上でのモチベーションにもなり得る。また、学級活動をベースとし、自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく力を育むためにも、話合い活動の充実とスキルアップを目指し、自発的、自治的な活動を展開できるようにした。

7　研究の成果と課題

○　成果

・「ようこそ先輩ミニ講演会」を定例として実施することで、自分の生き方を考える機会をもち、個々の将来に対する考えを深められた。

・１学期に行ったプレ公開授業において、「職場体験学習でなりたい自分」を考える授業を行った。職場体験で身に付けたい力や自分の成長した姿を思い描くことができた。その後、実際に職場体験を行い、身に付いたことや新たな目標について考え、振り返る活動で個々の将来像や職業観を深めることができた。

・本時（授業公開）では、『１０年後に「なりたい自分」になるために「今、頑張ること」を考えよう』を課題とし、個々の「なりたい自分」を共有した後に、グループで「今、頑張ること」を話合い、深める活動を展開した。話合いで深めたことで、終末で個に戻って目指す姿や頑張りたいことを宣言することにつながった。

・話合いを深める手立てとして、タブレットのアプリケーション(Jamboard)を用いたり、思考ツールとしてマトリクス図を用いたりすることを繰り返し授業で行っていたので、意見を共有し、整理することに活用できた。また、ファシリテーションや記録、発表などの役割分担を、無作為に(くじで)決めることを繰り返し行ってきたことで、どの生徒も話合いスキルの向上が見られた。

○　課題

・話し合う際に、ツールとして Jamboard を利用したが、画面を見る時間が長くなり、話合いの口数が減るなどのデメリットもある。話し合う必然性のある課題設定がポイントとなる。

・「個」→「社会」の課題意識をもたせることが課題であると昨年度のプレ公開授業の際に指摘された。地域とのかかわりや、他の人とのかかわりを大事にすることを意識してきたが、地域への思いを醸成することは、難しい部分があった。コロナ禍が落ち着き、地域行事やボランティア等の活動を再開できることに期待している。

8　運営の成果と課題

○　成果

・研究推進委員会を繰り返し行うことで、公開授業の際スムーズな準備、進行をすることができた。

・小規模校で職員数も限られる中、様々な役割を分担して担うことで運営をスムーズに行えた。

○　課題

・オンライン環境がうまく整わず参加者に授業の様子がうまく伝えることができなかった。

・参会者からご意見やご感想をいただくアンケート等の準備がなく、授業の振り返りをする上での情報が不足していた。また、協議会の流れをもっと練っておくべきだった。

資　料

1　部会名　特別活動

2　郡市名　上越市　　3　会場校　上越市立牧中学校

4　研究会開催期日　令和　　４年　１０月　２１日（木）

5　研究推進委員会

役　　割	所　　属　・　職　　名	氏　　名
(1) 指導者	上越市立牧中学校	米山　　宏
	上越教育大学	阿部　隆幸
	上越市教育委員会	小山　　明
(2) 研究推進責任者	上越市立清里中学校	白川　大輔
(3) 会場校責任者	上越市立牧中学校	佐藤　敦史
(4) 研究推進委員（授業者） (5)委員	上越市立牧中学校	山本　明子
	上越市立三和中学校	山川　　純
	上越市立雄志中学校	田野　裕之

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	５月２６日/牧中学校	7	推進委員会立ち上げ・今後のスケジュールの確認
2	６月１７日/牧中学校	7	プレ授業・評議会
3	８月３日/牧中学校	6	指導案検討会
4	１０月１２日/牧中学校	6	公開授業事前準備
5			
6			

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　　６４）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　　２４）名
(1) 郡市内中学校会員　（　　６０）名	(4) 教育委員会・センター　（　　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　　４）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
２年１組	１０年後になりたい自分	山本明子			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	深い学びに迫る授業の工夫と、地域・学校全体で取り組むキャリア教育	上越教育事務所 指導主事 小山　明 様 上越教育大学 教授 阿部　隆幸様	上越市立三和中学校 山川　　純　教諭	上越市立牧中学校 山本明子 教諭

提出⑥　指定研究　成果の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　松山　綾子
（学校名：　　新潟市立内野中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　特別活動

2　郡市名　　新潟市　　3　会場校　　新潟市立宮浦中学校

4　研究主題

「よりよい人間関係を育む学年・学級経営の工夫」
～他との関わりを必要とする活動を中心として～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

特別活動では、集団や社会の形成者としての見方･考え方を働かせ、さまざまな集団活動に自発的、実践的に取り組む中で、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点から目指す資質・能力を育成する。学校や学級の実態、自己の現状に即して自ら課題を見いだし、解決方法を実践したり振り返ったりしながら生活をよりよくしようとしていく「主体的な学び」と、そのために合意形成を図ったり意思決定したりする話し合いの中でさまざまな意見に触れ、考えを広げたり多面的・多角的に考えたりする「対話的な学び」を通して、資質・能力が発揮されていく「深い学び」の姿を目指す。

本研究では、特に、他と意見を交流しながら自ら新たな気付きを得たり考えを深めたりしていく活動の場と方法を工夫し、生徒が集団の課題を自分事として受け止め、解決のための実践に参画しようとする中で、授業やさまざまな活動の基盤となるよりよい人間関係を育んでいく手立てを追究する。

6　研究の方法と内容

(1) 研究仮説

生徒により生徒会で自校の課題として取り上げられたことがらの解決に向け、生徒が自分事として捉え、自分たちの手で解決する実践を組織する。それを支えるものとして「共に学ぶ、友に学ぶ」をキーワードに、学級活動、道徳科、生徒会活動等を教科横断的に繋げ、話し合い活動を年間を通して計画的、継続的に設定していくことで、合意形成を図ったり意思決定したりするよりよい人間関係と支持的風土が育まれる。

(2) 検証方法

（ア）年間を通して設定する話し合い活動における生徒の様相の変化→授業者の見取り、記録の蓄積

（イ）本時および本時にかかわる一連の活動（いじめ見逃しゼロに向けた取組）における生徒の様相
→参観者による協議、指導者による講評から

視点①問題意識の触発、目的意識の醸成

視点②話し合い活動の質

・設定した話し合いにおいて、意見の積極的な交流は促されたか。

・設定した話し合いの中でさまざまな意見に触れ、考えを広げたり多面的・多角的に考えたりする姿は促されたか。

・タブレットとねらいに応じた思考ツールを活用することによって、目指すような合意形成の姿が促されたか。

・設定した話し合いを通して、目指す「深い学び」の姿に至ることができたか。

（ウ）本時および本時にかかわる一連の活動（いじめ見逃しゼロに向けた取組）における生徒の振り返り→授業後の感想、学校評価生徒アンケートの結果、Q-U の結果を基に

7　研究の成果と課題

（成果）

○7 月実施学校評価生徒アンケートより肯定的評価　（　）内の数字は学年・全校の割合

・授業や話し合い活動で，人の意見や考えを最後まできちんと聞くことができた。…*100%（98.1%・97.9%）*

・学び合い(話し合い)活動で，自分の考えが深まったりした。…*96.6%（91.0%・93.4%）*

・学び合い(話し合い)活動で，自分と違う意見があったとき，相手の意見の理由を聞いたり，自分の意見を伝えたりしている。…*96.6%（94.3%・92.8%）*

・iPad などの ICT を使った学習では，友達の考え方を知り，自分の学びを深めることができた。…*96.6%（93.6%・95.5%）*

⇒いずれも、自クラスでは全校・学年の割合を突破した。

また、全校で見ても肯定的評価が 9 割以上となった。

○Q-U5 月実施→11 月実施

（学級生活満足群）62.1%→70.0%

○公開授業参会者の授業後アンケートより

・先生による追加の問い「いい雰囲気づくりは、何をするといいのだろう？」が鋭い問いだった。生徒は次時に自分ごととして落とし込み、具体的な取組を頑張ることとして提示すると思った。

・生徒たちの話し合いに（クラス全体に）に頑張ろうとする気持ちが表れていて、とてもよかった。

・教科横断して学校全体がいじめゼロに向かっている様子が伝わった。学校がひとつにまとまり、心温かな校風づくりを目指していることが素敵だと思った。

・ロイロノートの新機能が勉強になった。話し合い活動の幅が広がると感じた。

・「いじり見逃しゼロ」を目指して、より良いクラスの目標を決めようという姿がよく伝わってきて素晴らしかった。どの班もよく考えられていた。

・先生と生徒、生徒と生徒の間で、確実に支持的風土が醸成されていると授業を通して感じられた。

（課題）

・思考ツールは使い方次第だと感じた。ただ考えを共有するだけでは，合意形成に至るのは難しいと思った。

・ロイロノートの思考ツールの活用と共有ノートの使い方はとても参考になりました。考えを共有するには視覚的にもわかりやすく早く共有できてよいと思ったが、その先、深めるという意味ではもう少し手立てが必要と感じた。

・話し合いという観点から見て，もっと本当に自分の口から言語を発しての話し合いがなされても良かったと思った。話し合い，意見の出し合いなのにとても静かであった。実際に対面で話し合いをしているのですから，もっと自分の言葉で話してもよかったのではないかと感じた。

8　運営の成果と課題

・参集型で授業公開、協議会を実施できた。授業公開学級を 1 学級にしぼり会場を体育館にして、約 50 名の参加者を集め、通常に近い形で研究発表会を行うことができた。

・研究指定校と市中教研学級経営部が協働で二年間の実践研究を進めた。一年次の実践検証を踏まえた本時および本時にかかわる一連の活動の質を高めることができた。

・従来の、研究指定校からの研究提案、公開授業を材料とした研究協議会という形式を見直し、まずグループ協議で問題意識を高めた後、その一つの提案としての研究実践の発表という流れで進める形式にした。短時間で多くの意見・情報交換が図られるようにワールドカフェ方式のファシリテーションを使うことで、参加者同士がより主体的に学び合う中で、気付きが得られたり問題意識が促されたりすることができた。（参加者へのアンケートの結果から）

資　料

1　部会名　特別活動

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立宮浦中学校

4　研究会開催期日　令和４年１１月２４日（木）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市教育委員会学校支援課・課長補佐	三條　貴之
(2) 研究推進責任者	新潟市立内野中学校・教諭	松山　綾子
(3) 会場校責任者	新潟市立宮浦中学校・研究主任	佐久間　奈々子
(4) 県･郡市指導主事	長岡市立向陽中学校・校長	佐藤　裕之
(5) 研究推進委員（授業者）	新潟市立宮浦中学校・教諭	中村　匡宏
	新潟市立岩室中学校・校長	本多　豊
	新潟市立新津第二中学校・校長	入江　清次
	新潟市立木崎中学校・教諭	三浦　桜子
	新潟市立光晴中学校・教諭	多田　智大
	新潟市立石山中学校・教諭	伊藤　智美
	新潟市立木戸中学校・教諭	五十嵐　正明
	新潟市立新津第二中学校・教諭	捧　美智子
	新潟市立小合中学校・教諭	三ケ月　好

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	５／１９　宮浦中	10	県指定研究の方向性確認／研究主題確認
2	6／３０　内野中	9	研究実践構想について／研修のもち方について
3	９／３０　宮浦中	10	指定研究事前準備と役割分担／指導案検討
4	11/７　宮浦中	10	グループ協議について／提示資料確認
5	11/24　宮浦中	12	指定研究発表会

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　４８　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　４４　）名	(4) 教育委員会・センター	（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　3　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年２組	『「イジリ見逃し０」支持的風土の醸成 あたたかで思いやりあふれる宮浦中学校 ～特別活動・道徳授業を連動させた指導を通して～』	教諭　中村　匡宏

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
	「よりよい人間関係を育む学年・学級経営の工夫」 ～他との関わりを必要とする活動を中心として～	新潟市教育委員会 学校支援課課長補佐 三條　貴之 様	新潟市立内野中学校 松山　綾子　教諭	宮浦中研究主任 佐久間　奈々子教諭 授業者 中村　匡宏　教諭

令和３・４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　比護　一幸
（学校名：　　三条市立下田中学校　　）

このことについて、下記のとおり報告します。

1　部会名　　総合的な学習の時間

2　郡市名　　三条市　　3　会場校　　三条市立本成寺中学校

4　研究主題

学習問題を「自分事」として捉えることのできる防災教育 ～自己の生き方に生かすための学習課程の工夫～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

令和元年 5 月 31 日、国の防災基本計画が一部修正された。この修正において注目すべきは、「行政主導のソフト対策のみでは限界があることを前提とし、住民主体の取組を支援・強化することにより、社会全体としての防災意識の向上を図るものとする。」と明記されたことである。これは新潟県防災教育プログラムの「防災教育を通して目指す児童生徒の姿」にある「自分の命は自分で守るという姿勢を身につける。」「災害時には危険を自ら察知し、率先して安全を確保するための行動ができる。」と深く関係している。つまり、新潟県防災教育において最も大切な視点と位置付けている「主体性」を身につけることが重要であり、教職員においては、「災害を“自分事”として主体的にとらえる授業実践」が特に強く求められる。

三条市は２００４年、２０１１年と２回の大きな水害を経験している。しかし、大人も含めて防災意識の風化の感は否めない。生徒、教職員に取った防災アンケートの結果を見ると、「防災教育は必要だと思う」の問いには、ほぼ全員が「必要である」と答えているのに対して、「災害時の備えについて実際に行動しているか」を問う質問には、「ほとんどない、全くない」と答えている割合が生徒も教職員も多いという結果となった。このことから、生徒だけでなく、教職員も防災について自分事となっていないということが考えられる。学校で行う防災教育がその場だけのものにならずに、実際の行動にうつせるようにする、つまり「自己の生き方に生かす」ことを目的としたものである必要があると考えた。

以上の理由から、上記の研究主題を設定し、研究を進めていくこととした。学習問題とは、三条市が推進している小中一貫教育での取り組みで、「教師がねらいをもって設定した学習課題に対しての問いや願いを、具体的な言葉で可視化し、学級で共有しているもの」のことである。本研究では、防災教育の目的である、「自助・共助のために率先して行動できる」ということを学習課題として設定した。目指す生徒の姿は以下の通りである。

＜目指す生徒の姿＞ ○ 防災教育を「知る」「考える」「行動する」の３つの段階に分け、課題を「自分事」として捉えることで、様々な場面で培った「見方・考え方」を働かせながら主体的に問題を探究する姿。 ○発表場面等で、互いに意見交流をする姿。 ○振り返りから、新たな課題を見つけていく「探究サイクル」を繰り返す姿。

6　研究の方法と内容

研究主題に迫る手立てとして、以下の３つの視点で研究を進めた。

（1）小中９か年の学習課程の工夫

防災教育を行う際に教職員の防災教育に関する専門的知識が不足している場合がある。どの職員も一定水準の防災教育の指導が可能にするために、防災教育に関するテキストの採用が有効だと考えた。このテキストを併用した小中９か年の学習課程を編成することで、小中９か年の防災教育を体系的・計画的に推進することができると考える。

（2）「体験的活動」を取り入れた単元構成の工夫

「自分事」とは、当事者意識をもつことであり、追及したい事象を思考力、想像力をはたらかせながらイメージできることである。そのためには、実際に本物に触れ実体験することが一番である。しかし、事象によってはそれが困難な場合もあり、防災教育においては、学習過程

において災害時と同じ状況を作り出すことは現実的ではない。そのような場合、体験に近い「疑似体験」を行ったり、事象を実際に経験した人から話を聞いたりする、「体験的活動」を行うことが「自分事」として課題をとらえるうえで有効だと考える。

（３）情報発信（発表会など）、他者からの情報収集（意見交流など）の設定

発表場面を設定は、生徒が身に付けた知識や技能を使って相手に説明することで、学習内容を「つながりのある構造化された知識」へと変容させる。また交流場面の設定は、他者とのやりとりを通して、自分一人では思いつかないような多様な情報を得ることができ、新たな学びへとつながる。これらにより、自らの考えが新たに更新され、探究の過程が繰り返され、自己の生き方に生かす学びにつながると考える。

7　研究の成果と課題

（１）小中９か年の学習課程の工夫について

成果：小中９か年の学習過程を編成することで、見通しをもった防災教育の推進につながった。また、「防災学習ブック」を使うことで、学年で統一した内容で高い水準の指導を行うことができた。

課題：「防災学習ブック」の活用について小中のつながりを検討するなど学習内容を調整し、学習過程が持続可能なものになるよう、今後も修正をはかりながら編成を進める。

（２）「体験的活動」を取り入れた単元構成の工夫について

成果：体験したことを自分たちの地域に置き換えて課題を追及したり、体験による気づきから新たな問いを見出したりするなど、「体験的活動」が「自分事」とした学習につながった。

課題：活動が持続可能なものにするために、体験的活動の内容を今後も検討していく。

（３）情報発信（発表会など）、他者からの情報収集（意見交流など）の設定について

成果：発表場面や意見交流の場面において、自分の考えを改めて問い直す姿や、新たな課題へとつなげ探究のサイクルを繰り返す姿が見られた。また、中学３年生が小学生へ発表する姿を見せることで、小学生に小中９か年の学習過程の目指す姿をイメージすることにつなげることができた。

課題：学校だけでなく、地域へどのように学習したことを発信するか。地域の大人を巻き込んだ活動を取り入れた学習過程の編成が課題。

8　運営の成果と課題

成果：「自分事」をキーワードに、防災教育について９か年の教育課程の編成に取り組み、提案することができた。また、市教研の総合的な学習部会の際に、中学校区ごとに「自分事」としての防災教育について協議する場を設けることで、各校「自分事」を意識した取り組みにつなげることができた。

研究発表会当日は、ZOOM でのオンライン開催とした。これまで進めてきた取り組みを動画にまとめることで、一つの授業だけでなく、教育課程としての取り組みの提案ができた。

研究主題に迫るために、３つの手立てとして焦点化することで、オンラインであったがスムーズな協議会を行うことができた。

研究発表会の申し込み、発表会後の参加者アンケートを google forms で行ったことで、集約やまとめがスムーズに行えた。

課題：「総合的な学習」という学校による特色が強い教科・領域のため、発表校に任せる部分が多くなってしまった。

協議会は ZOOM ブレイクアウトルームで行った。KPT 法による協議会とした。意見の共有方法について、話し合った意見を黒板に貼った紙を WEB カメラで映し、手書きで記入する方法をとった。参加者からの事後アンケートでは、「字の大きさによっては見えにくい」との意見もあった。ZOOM ホワイトボードなどオンライン上で共有できる機能を用いた協議会ができるとよい。

ZOOM で入室の際、ホストの方で「入室時ミュート」を設定しておく。入室時にマイクがオンだと、ハウリングが起こる。

資　料

1　部会名　総合的な学習の時間

2　郡市名　三条市　　3　会場校　三条市立本成寺中学校

4　研究会開催期日　令和４年１１月２５日（　金　）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	長岡震災アーカイブセンターきおくみらい・マネージャー	赤塚　雅之
	三条市教育委員会・指導主事	荒川　高明
(2) 研究推進責任者	三条市立下田中学校・教諭	比護　一幸
(3) 会場校責任者	三条市立本成寺中学校・教頭	風間　真寿美
(4) 県･郡市指導主事	三条市教育委員会・指導主事	荒川　高明
(4) 研究推進委員（授業者）	三条市立本成寺中学校・教諭	相馬　宏司
	三条市立第一中学校・教諭	泉田　靖雄
	三条市立栄中学校・教諭	峯島　美佐子
	三条市立西鱈田小学校・教諭	小島　朔弥
	三条市立月岡小学校・教諭	霜﨑　大知
	三条市立本成寺中学校・教諭	信賀　悠次
	三条市立本成寺中学校・教諭	米山　國男

6　研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月1日／本成寺中学校	9	研究主題の確認、公開授業に向けての動き、発表会当日までの準備の確認
2	8月4日／本成寺中学校	10	動画作成について、協議会の内容確認、準備日程の確認
3	8月25日／本成寺中学校	10	公開授業指導案検討、当日の動きについて
4	10月19日／本成寺中学校	12	瑞穂学園研修会
5	11月10日／本成寺中学校	9	公開授業、発表会当日の動きについて
6	11月21日／本成寺中学校	12	発表会当日の分担確認、ZOOM の操作方法等確認
	12月20日／本成寺中学校	10	研究の成果、課題等検討

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　１１２　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　３２　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　３８　）名	(4) 教育委員会・センター	（　２　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　４０　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２学年	防災教育「防災に関わる私たちからの提案」	相馬宏司・２学年部

9　協議会（ZOOM ブレイクアウトルームで行った）

協議題	指導者	司会者	提案者
・３つの手立てが研究主題に迫る手立てとして有効に働いていたか ・より自分事化させていく（自己の生き方につなげさせる）ためには	長岡震災アーカイブセンターきおくみらい 赤塚 雅之 様 三条市教育委員会 指導主事 荒川 高明 様	三条市立本成寺中学校職員	三条市立下田中学校 比護 一幸 教諭

令和３・４年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　大木戸　雅人
（学校名：佐渡市立金井中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　総合的な学習の時間

2　郡市名　佐渡市　　3　会場校　佐渡市立金井中学校

4　研究主題

探究的な見方・考え方を働かせ、地域の課題の解決を目指す総合的な学習

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

これまでの当校の総合的な学習は、活動内容が体験活動に偏っており、体験するだけだったり、身に付けたことを披露するだけだったりという発展性の弱さが大きな課題であった。また、地域の現状についてはその知識獲得を主とした内容であり、課題に対する探究意欲が希薄になりがちでもあった。そこで、研究主題を上記のように設け、社会貢献や自己の生き方に思考をつなげるとともに、主体的に学びに向かう姿勢の育成をねらうこととした。

当校の位置する佐渡市は離島であることから過疎化の進行が著しく、観光客の減少にも歯止めがかからない状況にある。また、佐渡には歴史・自然・食などの魅力が豊富であるにもかかわらず、その魅力に気付かずに暮らしている人が多いことも課題となっている。

そこで本単元では、まずは生徒一人一人が佐渡の魅力に気付き、その魅力を多くの人々に知ってもらうことによって、佐渡を好きになる人や島内外の方々に佐渡をＰＲできる人を増やしたり、観光振興につなげたりすることを活動目標とした。

そして、目指す深い学びの姿を、

① 生まれ育った佐渡の魅力に気付き、その魅力をより多くの人に伝えるための探究的な学習に主体的・協働的に取り組む姿。

② 互いのよさを生かしながら、積極的に地域に貢献しようとする姿。

③ 「佐渡の魅力を多くの人へ伝えるために、互いに意見を出し合いながらストーリーや撮影素材を選択し、説明を効果的に加えて YouTube 動画を制作しようとする姿。

の３つとした。

6　研究の方法と内容

指定研究を翌年に控えた令和２年度に１～３年生の総合的な学習の時間の年間指導計画の見直しを行い、特に３年生においては新単元である「佐渡の魅力をより多くの人に伝えよう」を開発し、上記の研究主題の具現を目指した。

具体的には、世界文化遺産の国内推薦を受けた「佐渡島(さど)の金山」の中心的存在である相川金山周辺の名所などをＰＲする動画を作成し、金井中学校のホームページを通じて YouTube などに掲載することによって、広く佐渡・相川のことを知ってもらおうとする活動を展開した。そして本単元の活動を通して、佐渡にある歴史的財産や自然などの多くの価値をよりよく知ることで、佐渡に「自信」と「誇り」をもち、長い将来に渡って「ふるさと佐渡」に貢献しようとする生徒の育成に

つなげることを目指した。

また、班内で意見を出し合いながら取材計画の作成や動画編集などを行うことで、互いのよさを生かしながら活動の質を高めていくようにした。そして、制作した動画作品に対する批評を班同士で行う活動を取り入れることで、視聴者からの気持ちや目線で考え、自作品を多角的に見つめる力を高めることを目指した。

7　研究の成果と課題

次に挙げるのは、この単元の活動を終えた３年生に一年間の振り返りとしてアンケート調査を行った３項目の結果である。

① 佐渡に多くの魅力があると感じることができましたか？　…肯定的評価 100%
② 佐渡の魅力を知ってもらいたいという気持ちが高まりましたか？　…肯定的評価 98%
③ 動画制作の過程で互いに意見を出し合うことができましたか？　…肯定的評価 93%

以上のように、３項目とも非常に高い数値を示すこととなった。また、アンケート記述には「この活動で学んだことは、ふるさとに貢献することはとても重要だということです。今まで佐渡についてあまり考えたことがなかった私は、佐渡の魅力に気づきませんでした。しかし、今は魅力に気づき、また、佐渡の課題も少し見えてきたと思います。今後は、もし佐渡で何かすることがあったら、今回得た知識を活かしていきたいと思いました。」「この活動を始める前は、観光地であっても名前しか知らないところが多かったけど、今は実際にその場所を訪れてどんな場所でどんな魅力があるかまで知ることができ、もっと知りたい・伝えたいと思うようになりました。」「佐渡を紹介することで佐渡のことをもっと知れたし、佐渡のことをもっと好きになれました。誰にも分からない佐渡のいいところをこれからも紹介することで、佐渡は課題を解決するということが分かりました。」などの、自らの学びが深まったり、地域課題に真摯に向き合おうとしたりする感想が数多く見られ、大きな成果を確かめることができた。

５で述べたようにこれまでの当校の総合的な学習は、活動内容が体験活動に偏っていて発展性が弱い面があったが、この指定研究で行った単元においては、研究主題である「探究的な見方・考え方を働かせる」とともに、「地域の課題の解決を目指す」ことが具現できたと考える。

8　運営の成果と課題

前述したように、当校においては２年間に渡って全校体制で取り組んだ研究だったことで、多くの教員が研究の成果を享受することができた。しかし、新しく開発した指導計画は試行錯誤することも多く、授業の準備にも非常に多くの時間を割く必要が生じ、当該学年の職員やキャップとなる教員の負担は多大なものとなった。このように、学校独自の特色を生かす傾向の強い総合学習の特殊性から本研究は授業公開校が中心となって進めたため、佐渡市内の総合学習部員の協議会を設ける機会が少なかった。とは言え、昨年度の中間発表会や今年度の教育研究発表会で学び合う生徒の姿を参観することを通して協議内容を深めることができた。本研究が各校の総合的な学習の時間の指導に生かされるものと考える。

研究会当日の運営に関しては、島外からの参加者を迎えることで閉会時間を 16:05 発のフェリーに間に合わせるために受付時間を 12:50～13:15 とした。これは島内で普段行っている研修会よりも早めの時間設定であり、島内の遠方からの参加者にとっては所属校での給食が食べられないことになり、負担を掛けてしまうこととなった。

資　料

1　部会名　総合

2　郡市名　佐渡市　　3　会場校　佐渡市立金井中学校

4　研究会開催期日　令和４年１１月８日（火）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	佐渡市総合教育センター・所長	加藤雄一郎
(2) 研究推進責任者	佐渡市立金井中学校・教諭	大木戸雅人
(3) 会場校責任者	佐渡市立金井中学校・教頭	椿　　昌宏
(4) 研究推進委員（授業者）	佐渡市立金井中学校・教諭	中川　一貴
	佐渡市立金井中学校・教諭	前山ちひろ

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主　な　内　容
1	4.5.30／金井中学校	5	１年次の成果と課題確認、授業情報誌原稿について
2	4.6.29／金井中学校	5	単元構想・指導案の検討、授業情報誌原稿について
3	4.7.25／金井中学校	5	研究会当日の持ち方
4	4.8.19／金井中学校	15	研究会当日の持ち方、本時の構想の事前検討
5	4.11.1／金井中学校	5	プレ授業・検討会
6			

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（４３）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　０）名
(1) 郡市内中学校会員	（４０）名	(4) 教育委員会・センター	（　１）名
(2) 他郡市中学校会員	（　２）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　０）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授　業　者
３年Ａ組	佐渡の魅力をより多くの人に伝えよう！	中川　一貴・前山ちひろ

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	・他班の動画に対して効果的な箇所と改善すべき箇所を相川の魅力を伝える視点で的確に挙げることができたか。 ・もらったコメントをもとに、見る人の立場から、内容面・技術面から具体的な修正案を考えることができたか。	佐渡市総合教育センター所長 加藤雄一郎 様	佐渡市立金井中学校 椿昌宏 教頭	当校教諭 大木戸雅人

指定研究（１年次）

経過の概要報告書・資料

社会・理科・英語・音楽・保健体育・学校保健

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）
（音楽・保健体育・学校保健は指定の２地区のみ）

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　長野 朋水
（学校名：上越市立直江津東中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　社　会

2　郡市名　　上　越　　3　会場校　　上越市立清里中学校

4　研究主題

政治への主体的なアプローチ　～対話を通して、思考を深める授業づくり～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

（１）主題設定の理由

2015（平成 27）年６月の公職選挙法の一部改正により、翌年６月から選挙権を有する者の年齢が満 18 歳に引き下げられた。このことから大きく主権者教育の重要性に目が向けられることになった。主権者としての資質や能力の育成は、「18 歳選挙権」を行使する高校生段階に指導を講ずるのではなく、幼少期から系統的に指導を講じていくことが望ましい。

そして、主権者教育を充実させていく上で、「情報を収集・解釈する力や、情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断するメディアリテラシーの育成」が重要となってくる。

中学校社会（公民的分野）の政治単元においては、「18 歳選挙権」、「裁判員裁判」、「まちづくり」などのテーマを通して、主権者として国や地方自治体の政治とどのように関わっていくのかについて学習する。

そこで、本研究においては、「民主主義と日本の政治」を取り上げ、主権者教育の教材開発・実践に取り組むこととする。具体的には、国民一人一人の意志を繁栄させる投票行動の重要性、選挙の意義についての理解を促したい。また、投票をする前提として、公約やマニフェストを公平・公正に見極めることが求められるため、情報の収集・活用能力が身につくような教材開発に取り組みたい。

（２）目指す深い学びの姿

「自分の意思を反映させた民主政治を実現するために、何ができるか」

この問いに対する答えを考えるために、以下の点について思考を深める。

⑴日本の選挙制度の特徴
⑵選挙の課題と解決策
⑶何を基準に投票すればいいのか
⑷マスメディアから情報を入手する時に、注意すること
⑸情報を見極める（判断する）条件

思考を深めるために「読み取る」、「調べる」、「比較する」、「分類する」、「判断する」、「話し合う」、「振り返る」といった学習活動を織り交ぜて授業を構成する。

最終的に、単元を貫く学習課題（問い）に対する答えを表現し、現実生活の中で何をするべきなのか、何ができるようになったのかが自覚できるように指導する。

6　研究の方法と内容

（1）身近で切実性が感じられる課題の設定

生徒の学習意欲や知的好奇心を高める。

（2）ICT 機器や思考ツールを効果的な活用

生徒の主体的な学習への取組や思考の深まりを促す。

（3）「単元を貫く学習課題」（問い）の設定

1）生徒が見通しをもって学習できるようにする。

2）「単元を貫く学習課題」に通じる学習課題（問い）を授業ごとに設定する。

3）単元を通して、設定した課題を解決するための「課題の探究」を展開する。

4）単元の最終時に「振り返り」を行わせ、課題の解答を記入させる。

その際、学習を通して新たに分かったことや考えたこと、社会生活でいかせそうなことなどをワークシートに書かせる。

（4）「根拠」の重視

1）課題解決に取り組む際、「個人での思考」→「集団での対話・練り上げ」→「個人での振り返り」の手順を踏む。

2）根拠をもとにした意見交換（共有化）、新たな気付きや発見（多面的な思考）が得られるように指導にあたる。

7　1年次の成果と課題

（1）成果

・「単元を貫く学習課題」を設定し、各授業で、その課題（問い）に対する解答につながるような課題をおいて、見通しをもたせた授業展開がイメージできた。

・SNS 上の情報を分析する手法を確認できた。

（2）課題

・研究主題の再検討

・深い学びの姿の再検討

・「単元を貫く学習課題」（問い）の再検討

・学習指導案（問いや提示する情報）の再検討

生徒は真剣に考え、班別学習でも意欲的に話合い活動を展開している。

しかし、問いや提示する情報が不十分であったために、思考のつながり・深まりが見られなかった。

・メディアリテラシーに特化していて、政治単元としての色合いが弱い。

・最後の問いにおいて、政治的な行動につなげるものを取り入れるべきであった。

・「情報の真偽」か「情報の判断材料」か、生徒は何を考えるか混同していた（明確に分けるべきであった）。

・「見取り」の不十分さ

8　運営の成果と課題

（1）成果

・指導者、研究推進委員による意見交換から、課題設定や指導計画、指導案が建設的に検討することができた。

・研究推進委員による指導案の検討や次年度の「委員同士による見せ合い」等について、合意できた。

（2）課題

・今年度は、「委員間の授業の見せ合い」が出来なかった。

・研究推進委員会の複数開催（今年度も開催したが、授業者の更なる支援のため）

資　料

1　部会名　社　会

2　郡市名　上　越　　3　会場校　上越市立清里中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越市立頸城中学校　校長	小池　修
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津東中学校　教諭	長野　朋水
(3) 会場校責任者	上越市立清里中学校　教諭	新國　雄介
(4) 県･郡市指導主事		
(5) 研究推進委員(授業者)	上越市立清里中学校　教諭	新國　雄介
	上越市立安塚中学校　教諭	高橋　淳一
	上越市立中郷中学校　教諭	関原　駿
	上越市立春日中学校　教諭	宮下　大樹

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7.27／清里中学校	7	第１回研究推進委員会・・・・今年度の予定の確認 研究主題の検討
2	9.22／清里中学校	7	第２回研究推進委員会・・・・指導案の検討
3	11.16／清里中学校 （延期開催）	5	プレ公開授業 第３回研究推進委員会・・・・プレ公開授業の協議会
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　廣瀬　貴久
（学校名：　三条市立大崎学園　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　社会科

2　郡市名　三条市　　3　会場校　三条市立第一中学校

4　研究主題

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究し続ける生徒の育成 ～関わり合い、共に学ぶ授業を通して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領解説編で示されている「改定の趣旨」には、これまでの社会科授業における課題として、「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力」の育成が不十分であることが示されている。課題克服のために、「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力，判断力，表現力等」の育成を求めている。この力を育むためには、単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定し、「社会的な見方・考え方」を働かせることで、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習を求めている。

前回の県中教研中越地区社会科部会では、「当事者意識をもって、課題解決を図る生徒の育成～協働的な学びを活かした授業を通して～」を研究主題として、「当事者意識をもたせるための工夫」「見方・考え方を働かせた思考場面の設定」「深い学びに向けた収束場面での手立て」について研究が進められた。自分の問題として捉えやすい学習課題の設定と単元構成により、生徒の追究意欲が持続され、また、協働的な学習活動と収束場面における吟味・検討の視点の提示により、深い学びの実現が図られた。

学習指導要領の「改定の趣旨」と、前回研究の流れをふまえ、研究推進委員会では生徒の様子や授業の実態を基に、「深い学び」の姿について具体化・共有化を図った。その結果、「当事者意識をもって学習問題に向き合い、多面的・多角的に考察し、交流を通じて自己の考えを強化・深化・変容させたり、根拠をもって納得解・最適解を導いたりする姿」であると考えた。以上のことから、標記の主題を設定した。

6　研究の内容と方法

①当事者意識をともなった学習問題の設定は学習内容を引きつけて考えることにつながったか。

②社会的な見方・考え方を働かせた課題追究・解釈場面、検討・まとめ場面の設定は「深い学び」の姿につながったか。

以上２点を中心に、研究推進委員と授業者による授業実践を通して、生徒の発言や記述、活動の様子から、研究主題・研究内容に迫る姿が見られたかを分析し、手立ての有効性を検証する。

7　１年次の成果と課題

(1)研究推進委員の小島実践から（地理的分野「関東地方」）

交通や通信の視点を中核としながら、東京に人・もの・情報などが日本や世界から集まることで政治・経済・文化などさまざまな面で日本の中心的役割を担っているという特色と課題を理解することをねらいとした。「東京や周辺の住みやすさを考える」という単元を貫く学習問題を設定し、本時の授業では「都市問題と郊外に広がる市街地」（単元第３時）についてシミュレーションを通して具体的に理解す

ることをねらう授業であった。

○生徒は導入の驚きから関心をもち続けて問題解決を図っていた。→意外性（ズレ）のある資料提示が生徒の関心を高め、その後の追究活動を持続させることができた。

○勤務先、家族構成、給料、家賃、通勤時間などの具体的な家族・生活条件を示す資料と、居住地を決めるというわかりやすい課題により、生徒が中心部と郊外のメリットとデメリットを考えることにつながり、そこから都市の問題点や市街地拡大の理解につながった。→現実に即した資料と、資料と生徒の反応から生み出された問題設定により生徒の思考が活発化し、根拠をもちながら納得解・最適解を考え始めることにつながった。

○様々な家族・生活条件を意図的に設定したことで、生徒は交流を通して相違点を比較しながら結論を導いていた。→多様な気づきや考えを生む資料と、そこから生まれた考えの交流が、自己の考えを強化したり、変容させたりすることにつながった。

○最後に、もう一度自分の考えを見直させることで、結論を変える生徒もいた。→内省的な思考を働きかけることで、自己の考えの深化・変容が促された。

△学習問題を焦点化させることと、学習問題に対する到達目標（ゴール）をあらかじめ想定する。

△単元を貫いて「住みやすさ」を追究し続ける手立てがあるとよかった。

(2)授業者の溝口実践から（地理的分野「中部地方～ふるさと「三条市」から見る中部地方」）

産業の視点を中核としながら、全国有数の生産を誇る中部地方の各産業について、自然的条件や地理的諸条件と人々の生活を関連付けながら理解することをねらいとした。そして「ふるさと三条の魅力とは何か」という単元を貫く学習問題を設定し、東海地方・中央高地・北陸地方と三条市の比較を通して、当事者意識をともなった課題追究をねらう単元構成であった。本時の授業では「三条市の魅力ある産業を持続・発展させる工夫」（単元第７時）について、４つの視点から相互の関連性を考えるとともに、単元の学習をふまえて持続発展可能なこれからの三条市の産業を考える授業であった。

○単元を通して「自然環境」「人口」「伝統・文化」「交通・通信」という同じ視点で追究させたことで、東海地方・中央高地・北陸地方と三条市の産業の成立条件（背景・要因）を比較することができた。→追究の視点を明確にすることで、多面的・多角的な考察をすることができ、社会的な見方・考え方を働かせることにつながった。

○ウェビングマップで拡散・分類・集約、Ｘチャートで比較・関連付け、コアマトリクスで視覚化と収束を図ることで、産業の成立条件（背景・要因）とそれぞれの関連性について視覚的に理解し、共有することができた。中には自然環境の視点を持ちながら、他の視点に基づいて、社会的事象同士を結び付け、考えていた生徒たちの具体的な姿が見られた。→思考ツールの有効活用が視覚化・共有化、関連付けた派生的思考を促した。

○伝統産業を考えていた班が、ごみ問題などの環境問題を引き起こす可能性を考え始めた。→三条の魅力を思考する中で、生徒の内面で新たな問題を発見する姿であった。社会的な見方・考え方を働かせた授業では問題解決と問題発見を繰り返す可能性がある。

△三条市を考えることを通して、中部地方の地域的特色がより明らかになる手立てが必要であった。

８　運営の成果と課題

○研究全体、授業、派遣申請や旅費、会場などと、役割分担をしながら運営することができた。

△授業記録と分析方法についてあらかじめ共通理解を図る。

△授業者の思いや考えを丁寧にくみとりながら研究を進めるために、研究推進委員長と授業者・会場校の密な連絡や打ち合わせを行う。

資　料

1　部会名　社会科

2　郡市名　三条市　　3　会場校　三条市立第一中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	見附市教育委員会学校教育課・課長補佐	関　拓也
(2) 会場校校長	三条市立第一中学校・校長	土田　栄林
(3) 研究推進責任者	三条市立大崎学園・教諭	廣瀬　貴久
(4) 会場校責任者	三条市立第一中学校・教諭	濱本　和寿
(5) 研究推進委員(授業者)	三条市立第一中学校・教諭	溝口　祐介
	三条市立第三中学校・教諭	佐藤　一機
	三条市立下田中学校・教諭	小島　和裕
	三条市立栄中学校・教諭	本多　紘司

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/27 第一中学校	7	○研究の方向性について ・前回研究の成果と課題 ・県中教研の方針の確認 ・社会科における「深い学びにいたる授業」の姿の共有
2	8/1 大崎学園	6	○研究主題の具体化、授業者（第一中　溝口先生）の授業構想 ・研究主題の具体的な姿の検討 ・課題と手立ての検討 ・授業者（第一中　溝口先生）の単元・授業構想の検討
3	9/15 第一中学校	8	○推進委員（下田中　小島先生）の指導案検討 ○授業者（第一中　溝口先生）のプレ授業の単元・授業構想検討
4	10/6 下田中学校	4	○推進委員（下田中　小島先生）による授業・協議会
5	10/11 第一中学校	7	○授業者（第一中　溝口先生）のプレ授業の指導案検討
6	11/7 第一中学校	8	○授業者（第一中　溝口先生）による授業・協議会
7	12/1 第一中学校	8	○今年度の振り返りと次年度に向けて ・今年度の成果と課題 ・次年度への展望

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　海老名　　崇
（学校名：　新発田市立第一中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　社会科部

2　郡市名　新発田市　　3　会場校　新発田市立佐々木中学校

4　研究主題

社会との関わりを意識して課題を追究・解決する生徒の育成 ～深める問いで深い学びを～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

平成 20 年度学習指導要領における課題として、「主体的に社会の形成に参画しようとする態度の育成が不十分である」ことが指摘された。それを受け、平成 29 年度学習指導要領においては、「社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実する」ことが強調されている。新発田市中教研社会科部では、この改訂の趣旨を受け、「社会との関わりを意識する」ことを中核に授業を構想し、そこから生ずる課題を追究・解決する生徒の育成を目指すこととした。ここでいう「社会との関わりを意識する」とは、「持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を自分事として解決しようとする態度」を意味する。

さらに、課題を追究・解決する過程で設定する対話が、意見（考え）の発表に終止することなく、目指す深い学びの姿へと向かうよう、対話に「深める問い」を設定する。ここでいう「深い学び」とは、「社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念の獲得」を意味する。そして「深める問い」は、対話を「深い学び」に誘うために、「対話の途中で生徒に共通して立ち上がる本質的な問い」を意味する。

このようにして獲得された「深い学び」は、現代社会で生起する様々な課題を、自分事として捉え社会との関わりを意識して追究・解決するために活用され続けるものであると考える。

6　研究の方法と内容

生徒が、学習課題と自分とのつながりを感じ、自分事として追究・解決するために、以下の４つを主たる手立てとして設定する。

①自分事として考えられるよう単元構成の工夫を図ること⇒単元構成、教材化の工夫
②問いを生む資料、資料提示の工夫を図ること⇒資料提示の工夫
③対話的な学習活動を促すために ICT 機器を活用すること⇒対話的な学習活動の工夫
④深い学びに向かわせるための問いを工夫すること⇒「深める問い」の工夫

7　１年次の成果と課題

○社会との関わりを意識するパフォーマンス課題（新発田市における歴史的景観保全の意義について考える課題）は、社会科の見方・考え方を働かせ、本単元の目標に近付く上で有効であった。
○Zoom を活用して、市の担当者からオンタイムで話を聞いたことは、「社会との関わりを意識する」「他者との合意形成を図る」「新たな視点の獲得する」という点から有効であった。

○ロイロノートを活用し、多くの人の意見を整理したことは、複数の考えを関連付け、構想（選択・判断）する上で有効であった。

○対話に「連続する問い」「深める問い」を設けたことで、生徒は社会科の見方・考え方を働かせ、深い学びに向かう可能性が高いことが確認できた。

▲本授業では、研究主題の「社会との関わりを意識する」ことを、「身近な地域として考える」こととしたが、単元の目標からズレるのではないかという指摘があった。

⇒☆「社会との関わりを意識する」生徒の姿について、検討し、共通理解を図る。

▲ロイロノートを使うことで、多面的・多角的な思考を促し、意見を拡散させることはできたが、対話場面で意見を収束させたり、焦点化させたりすることに困難さを感じた。

⇒☆「深める問い」との関連で吟味が必要

▲想定した「深い学び」の姿に至るために、対話から生ずる生徒の問いに即した形で、「深める問い」を投げ掛ける必要があるが、それが難しい。

⇒☆「深める問い」はどの視点で追究するのか明確にする必要がある。授業者が対話の地図を構想できると良い

8　運営の成果と課題

○研究推進委員会を市内の教諭、教頭、下越教育事務所の指導主事から組織したことで、様々な立場から、積極的なご意見をいただいた。

○プレ授業公開では、身近な地域を題材にした単元構成、Zoom を活用したゲストとの交流、ロイロノートによる思考ツールの活用等、提案性の高い授業であったこともあり、その後の協議会では活発なご意見をいただいた。

▲２年間の指定研究を受けているが、市教研の授業校のローテーションを優先したため、プレ授業公開校と本研究発表校の学校が違うという事態が発生した。プレ授業の成果、課題を本発表にいかすならば、授業発表校も２年間固定した方が良い。研究推進責任者、会場校責任者をどの学校にお願いするのかを下越地区事務局が管理職も含め、前年度からしっかりと引継ぎを行ってほしい。

▲研究推進委員会の日を決める際に、所属校の行事や先生方の都合が合わず、全員が参加できる日を設定するのに苦労した。

▲来年度は研究推進委員の役割をあらかじめ分担し、負担を分散できると良い。

⇒文書発送、案内作成、集約、会計、協議会司会、指導者との連絡等

◎来年度は２年次の研究になるので１１月の本発表の前に今年の成果と課題を生かした提案授業の公開を１学期に予定している。研究推進委員が行い、教師の学び合いも推進したい。

⇒来年の４月の市教研一斉部会で研究の方向性、計画、提案授業、本発表の計画を提案する。

資　料

1　部会名　社会科

2　郡市名　新発田市　　3　会場校　新発田市立第一中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	小千谷市立小千谷中学校・校長	若林　靖人
(2) 研究推進責任者	新発田市立第一中学校・教諭	海老名　崇
(3) 会場校責任者	新発田市立佐々木中学校・教諭	五十嵐　浩司
(4) 県･郡市指導主事	下越教育事務所・学校支援第２課長	田中　一史
(5) 研究推進委員(授業者)	新発田市立本丸中学校・教諭	横井　佑来
	新発田市立東中学校・教頭	小野　俊巳
	新発田市立本丸中学校・教諭	神田　武
	新発田市立猿橋中学校・教諭	田中　知哉
	新発田市立七葉中学校・教諭	六井　啓一郎
	新発田市立加治川中学校・教諭	大滝　日奈野

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 28 日／第一中	8	第 1 回研究推進委員会･･･指定研究合同全県部会の伝達事項 研究主題及び目指す生徒に迫るための手立ての検討
2	10 月 6 日／第一中	9	第 2 回研究推進委員会･･･研究主題の設定 プレ授業指導案検討
3	11 月 4 日／佐々木中	9	第 3 回研究推進委員会･･･市教研兼プレ授業公開、協議会、今後の打ち合わせ 市教研：授業参観者　25 名 授業者：佐々木中学校　教諭　五十嵐　浩司 単元名：日本の諸地域～近畿地方～
4	12 月 6 日／第一中	7	第 4 回研究推進委員会･･･今年度の成果と課題、来年度の研究の方向性
5			
6			
7			
8			
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和　4　年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

15 部会全県部長　　大川　正史

報告者氏名　小山　明伯
（学校名：　柏崎市立東中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　理　　科

2　郡市名　　柏崎市　　3　会場校　　柏崎市立第一中学校

4　研究主題

活用を意図した単元構成により，自ら学びをつなげる生徒の育成

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

現行の学習指導要領では，学習を通して「何を学ぶか」という知識の量や質に加え，「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を意識した指導を求めている。

特に，これからの時代を生き抜くためには，「何ができるようになるか」という視点において，思考力・判断力・表現力の育成が求められる。本研究では，これまで学習してきた既有の知識や概念を活用し，自ら学びをつなげる力に焦点を当て，思考力・判断力・表現力を高める。自ら学びをつなげるとは，身の回りに生じる様々な問題に新たな課題解決や日常生活に活かす活動を通して，自分なりの概念形成を図るとともに，個人の中で形成された概念を具体的な事象に置き換え，新たな問題に対して自分なりの答えをもつことである。このような自ら学びをつなげる姿を，目指す深い学びの姿として捉え，本研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

本研究では主題に迫るために以下の３つを手立てとして講じた。

（1）「逆向き設計」による単元構成の工夫

生徒自ら学びをつなげる力を育成するために，既有の知識や概念が活用される単元構成の工夫を行う。ここでいう単元構成とは，単元を通して目指す資質・能力を具体的に思い描き，それを達成するために，どのような学習をどのように配置し，関連付けるかを考え，一連の授業をつくることを意味する。いわゆる「逆向き設計」による単元構成の工夫を行う。さらに，見通しのある学びを実現させるために，単元を通した課題を設定し，生徒と授業者が共有する。学習の道筋や必要とされる知識が明確になり，生徒自ら学びをつなげることを促すことができる。

（2）振り返りの活用

生徒自身が自らの学びをメタ認知することで，学習内容を単に語句として覚えるだけでなく，学習してきた内容や科学的な概念をより深く理解することができる。そこで，生徒自らが毎時間の学習内容を概念的につなげ，関連を意識するために，言語化を伴う振り返りの場を設定する。単元を通した課題に向かって何ができるようになったのか，整理して書かせ，自身の学びを自覚できるようにする。

（３）概念形成を促進させるための ICT 機器の活用

ICT 機器を以下の２点に焦点を当て，授業で活用していく。

①　情報を共有するための手段

タブレット端末を用いることで実験結果や観察結果を記録し共有することができ，生徒は必要な情報をいつでも引き出すことができる。また，結果を解釈するときに言葉で伝えることが得意な生徒もいれば図等を使って説明をすることが得意な生徒もいる。単元によっては図やモデルを使って表現をした理解が効果的な場面もある。タブレット端末は自分の考えを整理・修正・構築する際や，他者の意見・考えを交流・共有する際に有効なツールである。多様な考えを共有したり表現したりする手段としてタブレット端末を活用し，生徒の深い学びの実現を目指す。

②　概念形成を助けるための手段

ICT 機器の活用により，観察が難しい事象をシミュレーションで学んだり，概念的に理解しづらい内容をモデルで表現したりできる。また，インターネット上には学習内容に関連するページが掲載されており，生徒が自分に必要な情報を自ら選び，学習に生かすこともできる。

７　１年次の成果と課題

（１）　成果

活用を意図した単元構成を工夫することで，生徒自らが毎時間の学習活動において必要な知識を自覚することができた。また，振り返りの活用により，前時に学習した内容と課題解決に必要な知識のつながりを意識して学習ができた。

（２）課題

今年度は一つの授業に絞り込んで研究を進めてきた。一方で，手立ての有効性や汎用性についての検証は課題が残る。今後，研究推進委員が授業実践を重ね，手立ての汎用性や客観性を検証していく。また，自ら学びをつなぐという視点での振り返りの仕方の有効性について研究を深める。

８　運営の成果と課題

（１）成果

研究推進委員全員が集まり，指導案を十分に検討する時間が確保できたため，１つの授業を練り上げ，活用という視点で単元全体を見つめることができた。また，理科センター，柏崎市立博物館等の外部機関との連携により，プラネタリウムや会場校全体を利用した規模の大きいモデル実験といった生徒の概念形成に寄与する専門性の高い実践ができた。

（２）課題

年間の計画に研究推進委員の授業実践を組み込み，生徒自身が主体性を発揮できる単元構成や教材の工夫についての研究を重ねていく。理科センター，柏崎市立博物館等の外部機関との連携により生徒の概念形成に寄与できたため，来年度も専門性を生かした連携を行う。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　柏崎・刈羽　　3　会場校　柏崎市立第一中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	中越教育事務所学校支援第２課指導主事	長谷川成生
(2) 研究推進責任者	柏崎市立東中学校・教諭	小山　明伯
(3) 会場校責任者	柏崎市立第一中学校・教頭	土倉　秀夫
(4) 県･郡市指導主事	柏崎市教育委員会・指導主事	樋口　雅樹
(5) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立第一中学校・教諭	近藤　悠司
	柏崎市立第三中学校・教諭	朝賀　草乃
	柏崎市立瑞穂中学校・教諭	小山　　翼
	柏崎市立第一中学校・教諭	本間　雄大

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	8 月 26 日／第一中学校	7	「深い学び」を実現するための手立て・研究主題・指導案検討
2	11 月 16 日／第一中学校	7	プレ授業に向けた授業検討（授業者：第一中学校　本間雄大），指導案検討
3	11 月 25 日／第一中学校	7	プレ授業（授業者：第一中学校　近藤悠司），研究協議会
4	1 月 4 日／第一中学校	6	今年度の成果と課題，来年度の予定確認等
5			
6			
7			
8			
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　金井　太一
（学校名：長岡市立東中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　理科部

2　郡市名　長岡市　3　会場校　長岡市立北中学校

4　研究主題

（仮）課題解決を通して学ぶ喜びを共感する生徒の育成
～（未定）～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

（1）主題設定の理由

課題に対して深く考えようとする（論理的思考や批判的思考ができる）生徒が少ないという発表校の実態と、深い学びに至る授業を通して、生徒に理科の楽しさを伝えたいという授業者の願いから、4 に示す研究主題を設定した。副題については、現在検討中である。「課題解決を通して…」というからには、「課題設定の工夫」が必要ではないか、といった意見や深い学びにはペアやグループ、クラス全体での話し合い活動を充実させることがポイントになってくるため、「学び合い活動の工夫」といった表現を入れることが必要ではないか、といった意見が出た。

その他、いくつかのプレ授業を参観する中で、班の中で役割分担はあるものの、実験をする人、結果をまとめる人、考察をする人のように役割が毎回固定していることは、果たして一人一人の深い学びにつながるのかといった意見が出た。また、話し合い活動では、特定の人だけが話をしている班やただ全員の意見や考えを発表するだけで、考えが深まっていない班などが見られ、今までの方法では、全員が深い学びに至るのは難しいのではないか、といった意見が出た。そこで、これらを踏まえ研推では、生徒「全員」が理科の楽しさを実感できるような工夫が必要であり、そのような授業を公開授業で提案していこうということで話がまとまった。

（2）目指す深い学びの姿

目指す深い学びの姿については、以下の３点にまとまった。ただ、公開授業では単元は決まってはいるものの、本時をどの場面にするかはまだ決まっていない。そのため、どの姿を公開することになるかは未定である。

①　学んだことを関連付けて、より深く理解しようとする姿

②　見方・考え方を働かせながら、思考したり、説明したりする姿

③　既存の知識や概念を再構築して、新しい知識を身に付けようとする姿。また、新たな疑問や問題を見い出そうとする姿

6　研究の方法と内容

研究の方法と内容については、現在検討中である。ただ、以下に示す(1)～(3)のいずれかを選択し、内容もさらに吟味していきたい。

（１）単元構成の工夫（課題設定、学び合いの場の設定など)。

（２）学び合いの場の工夫（仮説設定の場面、考察の場面　など）

・学び合いの方法

・〇〇の活用（思考ツール、ICT 機器、ホワイトボード、モデルなど）

（３）知識を関連付ける工夫

・〇〇の活用（ポートフォリオなど）

7　１年次の成果と課題

成果としては、３つある。まず、１つ目は研究推進委員会による協議や検討会、指導主事による指導や助言、NITS によるオンライン研修、プレ授業等を通して、学習指導要領の求める「深い学び」について研究推進委員が理解を深めることができたこと。次に、2 つ目は「深い学びの姿」やそれを実現する上で「実現に向けての大切なポイント」、「必要な手立て」について、研修を進める中でより明確になってきたこと。そして、3 つ目はプレ授業を行った 3 校とも ICT を活用した新しい授業スタイルが見られ、活用方法も様々で、これからの理科授業の在り方を考える上でもよい研修となったことである。特に 2 つ目については、研修を進める中で、生徒が深い学びに至るためには、ペアやグループ、クラス全体での話し合い活動が重要であり、そこにじっくり時間をかけるためにも、教材を工夫したり ICT を活用したりすることで、時間を確保することが必要ではないか、という認識に委員が至った点は、大きな成果だったと考える。

課題としては、３つある。１つは、単元「電流とそのはたらき」において、何時間目を授業公開するのか、決まっていないことである。そのため、２つ目として、「目指す深い学びの姿」や「研究の方法と内容」について、具体的なイメージができていないことである。今後は授業者や指導主事と協議を重ね、4 月までにはある程度の方向性を示したい。3 つ目は、一部の生徒だけでなく、「全員」が深い学びに至るにはどうしたらよいか、その答えがまだはっきりしないことである。話し合い活動を充実させたいが、具体的にどのようにすればよいのか、今後、さらに研修を深めていく必要がある。

8　運営の成果と課題

成果としては、最初に研修推進委員の役割分担を明確にし、各自が与えられた仕事に責任をもって取り組んだことが研修をスムーズに進められたと考える。

課題としては、３つある。１つ目は、研究推進委員は、普段の学校業務の他に、県中教研の仕事も行わなければならず、時間的負担や精神的負担が大きいこと。2 つ目は、学校によっては校務が優先されるため、なかなか研究推進委員全員がそろわないことが多かったこと。特に上記の２つについては、運営を効率よく、より効果的に行うためにも、県中教研の事務局側から各学校の管理職にお願いしていただきたい。最後に、来年度の本発表に向けて、今年度のうちにしっかりと見通しをもって計画を立てることである。会場校とも連絡を密に取り、研究推進委員との役割分担等、明確にしておきたい。

資　料

1　部会名　理科部

2　郡市名　長岡市　3　会場校　長岡市立北中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	五泉市立五泉中学校・校長	大川　正史
(2) 研究推進責任者	長岡市立東中学校・教諭	金井　太一
(3) 会場校責任者	長岡市立北中学校・教頭	吉澤　祐一
(4) 県･郡市指導主事	中越教育事務所学校支援第２課・指導主事	羽鳥　益実
(5) 研究推進委員(授業者)	長岡市立北中学校・教諭	高橋賢太郎
	長岡市立三島中学校・教諭	込山雄一郎
	長岡市立大島中学校・教諭	和平　匡将
	長岡市立南中学校・教諭	大平　晃三
	長岡市立寺泊中学校・教諭	鍛冶山　凌
	長岡市立川口中学校・教諭	長谷川明彦

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/27　北　中学校	7	指定研究の概要説明、昨年度活動報告、役割分担、目指す深い学びの姿の検討　等
2	7/21　北　中学校	8	「目指す深い学びの姿」「実現する上での大切なポイント・手立て」「研究主題」の検討　等
3	8/23　北　中学校	8	全県部会情報伝達、単元・題材構想の検討、研究主題の検討　等
4	9/13　北　中学校	7	プレ授業１までの動き・当日の動き・指導案の検討　等
5	11/２　大島中学校	6	プレ授業１の実施（小単元：電流と電圧、授業者：大島中　和平先生)、協議会、プレ授業２までの動き・当日の動き・指導案の検討　等
6	11/17　南　中学校	7	プレ授業２の実施（小単元：電流と電圧、授業者：南中　大矢先生)、協議会、プレ授業３までの動き・当日の動き・指導案の検討　等
7	12/６　北　中学校	8	プレ授業３の実施（小単元：火山、授業者：北中　高橋先生)、協議会、来年度の方向性・予定の検討、研究主題の検討　等
8	12/19　北　中学校	8	中越地区運営推進委員会情報伝達、今年度の成果と課題、来年度の予定の確認　等

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和　4　年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　間　英法
（学校名：　新潟市立藤見中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　理科

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立小針中学校

4　研究主題

学び合いを通して，科学的な思考力・判断力・表現力を高める理科指導の工夫

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 主題設定の理由

今日，理科の授業に求められていることは，知識や技能の質や量だけではない。その習得方法やそれらを活用する力，そして，日常生活と関連した「見方・考え方」を働かせることも含まれている。求められていることに正対し，豊かな資質や確かな能力を育むためには，自分の考えを相手に分かるように表現し，相手の考えとの共通点や相違点を比較したり，多面的にとらえたりするような学習活動が不可欠である。このことから，事象に対する問題意識をもとにして，予想や仮説をもって観察や実験を計画し実行したり，結果を予想等に照らして考察したりする場面において，生徒同士の「学び合い」を組織することが有効である。

そのために,「新潟市の授業づくり」に示されている内容性，情意性，集団性の高い「優れた学習課題を設定すること」と「ファシリテーション,グループワーク等の活動を取り入れること」, そして「『学び」を自覚する振り返り』を位置付けた問題解決的な学習を展開することを取り入れた授業を行って，科学的な思考力・判断力・表現力を高めたい。

(2) 深い学びの姿

深い学びの姿とは，学びの過程の中で理科の「見方・考え方」を働かせ，既習の知識を互いに関連付けてより深く理解したり，観察・実験等で得た情報から新しい考えを形成したり，問題を自ら見いだして解決策を考える姿と捉えた。それは，(1)の研究主題に則った授業を行うことでその姿に近づくことができると考える。

6　研究の方法と内容

(1) 研究の方法

まず,「深い学びとは何か」「生徒の学びを深い学びにするには何が必要か」を話し合った。話し合いの糸口には「理科学び合い１０」を活用した。特に，①「生徒の素朴概念の把握」⑥「目的意識をもたせる事象提示」⑩「結果をもとにした考察の意見交換」を重視した。次に,「深い学び」の実現に向けて授業を行い，実証することとした。

(2) 研究の内容

「深い学びとは何か」について，次の姿があることと考えた。

・自分で気づいていない視点に気づくこと。実生活との関連付けで調べる姿。

・疑問を重ね，新たな発見を見いだす。自分でさらに調べていく姿。

・授業の前後で考えに変化がある姿。単元の前後の振り返りから学びの足あとをメタ認知できる姿。
・予想→実験→結論→実生活に結びつけている姿。

「生徒の学びを深い学びにするには何が必要か」について，次のように考えた。

・生活とのずれがある課題が大切。気づきで興味・関心をもたせる。
・資料，材料を子どもたちに与え，そこから子どもたち自身が考える場面設定が必要。
・意見が割れる課題や生活経験から話し合い，盛り上がる話になる課題がよい。
・認識のずれを解決する過程で知識を活用する単元構想が必要。

公開授業は中学２年「電流とその利用」の「電気抵抗」を扱うこととした。抵抗を１個から２個へと直列つなぎにすると，回路全体の抵抗値は大きくなる。しかし，並列回路にすると１個の抵抗値より小さくなる。課題を提示し，抵抗を２個使っているので，抵抗値は直列つなぎと変わらないだろうと生徒は予測するが，実際は小さくなる。この，素朴概念の意外性からなぜなのかという疑問につなげ，仮説を立てて検証し，実証，確認する授業を考えた。

7　１年次の成果と課題

(1) 成果

・生徒が予想したことと実験結果のズレがあり，生徒の興味関心が一気に高まった。
・検証実験で電流計を持ち出して，よりよく調べてみようとする姿が見られた。また，使用する電流計がデジタル電流計で操作性が良く，手際よく実験していた。
・班の中で中心的な生徒が抵抗値が小さくなることについて率先して発言し，意見をとりまとめていた。
・ロイロノートを活用し，情報共有が容易だった。
・自作の実験ボードは回路が作りやすくかった。

(2) 課題

・ワークシートを活用したが，１時間の中で，自分の意見の変容が見えるような工夫があると良い。回路中の空白スペースに電流の流れにくさを表す工夫があると良い。ワークシート以外に，ロイロノートを使用したが，生徒の思考の自由さととりまとめやすさを考えると，表現方法としてどのように記入させたら良いか，一考が必要である。
・生徒の予想を裏切る実験結果について，その理由を考えさせる場面で，意見の対立や自他との考えのズレが生まれなかった。まず，生徒一人一人の考えを記す時間を設定し，他者との考えを比較する場面設定があると良かった。

8　運営の成果と課題

(1) 成果

・研究推進委員会で深い学びについて意見交換を行ったことで目指す生徒の姿が明確になった。
・生徒の意見対立（仮説など）の過程が大切であると共有できた。
・深い学びに至る授業に向けて，課題設定や話し合いなどを工夫してうまくいかない点，うまくいくのではないかと思われる点について率直に意見交換ができた。

(2) 課題

・深い学びに至らせるための「しかけ」を工夫する必要がある。
　個→同じ意見同士で集まる→討論→学び合いの深化等
・「認識のズレを生む課題の工夫」が特に重要で，この点の検討が必要。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立小針中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	山内　伸二
(2) 研究推進責任者	新潟市立藤見中学校・教諭	間　英法
(3) 会場校責任者	新潟市立小針中学校・教諭	南　信厚
(4) 県･郡市指導主事		
(5) 研究推進委員	大江山中学校・校長	眞田　和徳
	坂井輪中学校・教諭	渡邉　真巳
	内野中学校・教諭	山際　勇也
	赤塚中学校・教諭	内田　隆志
	中野小屋中学校・教諭	大橋　初香
	五十嵐中学校・教諭	小島　直子
	小新中学校・教諭	武藤　啓将
	黒埼中学校・教諭	井上　真吾
	内野中学校希望ヶ丘分校・教諭	木山　仁
	金津中学校・教諭	熊谷　純

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６月１３日／Zoom	10	深い学びとは何かの検討
2	８月２５日／Zoom	13	指導案検討
3	９月２９日／Zoom	12	指導案検討
4	１０月２７日／小針中	10	指導案検討
5	１２月２日／小針中	10	授業研修会　授業者　南信厚（小針中学校）「電流とそのはたらき」
6	１月１９日／大江山中	4	年度反省
7			
8			
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　石川　公康
（学校名：　五泉市立五泉中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　下越地区理科部会

2　郡市名　五泉・東蒲　　3　会場校　阿賀町立阿賀津川中学校

4　研究主題

深い学びにいたる授業～対話活動やＩＣＴの活用を通して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 設定理由

① 県の基本方針を踏まえつつ、五泉・東蒲中教研の研究主題に沿ったものを設定した。

② 深い学びにいたるには、対話活動が必要と考える。
（対話活動やＩＣＴを並列にしたのは、どちらも手段であるという理解のため）

③ ＧＩＧＡスクール構想のもと、ＩＣＴを使って対話活動、さらに深い学びにいたる実践を生み出したいと考えたから。

(2) 目指す深い学びの姿

「理科の見方・考え方をはたらかせて、課題を見出し解決に向かう姿」

6　研究の方法と内容

(1) 研究の方法

「深い学び」の姿を「理科の見方・考え方をはたらかせて、課題を見出し解決に向かう姿」と研究推進委員で設定し、「深い学び」に至るためのポイントを整理し、提案授業によってそのポイントの妥当性を検証する。

(2) 研究の内容

深い学びにいたるポイントを以下のように考えた。

①課題を見出すために、生徒にズレを感じさせ、問いをもたせる。

ズレを感じさせるために、「ア：他者の考えとのズレ」、「イ：予想とのズレ」、「ウ：感覚とのズレ」、「エ：既習とのズレ」を使い、問いをもたせる。

②単元を逆向きにデザインする。

単元の学習を終えたときの目指す生徒の姿を具体的に想定し、その発話を具現化するための手立てを逆算する。単元の終末に発展的な課題を設定し、課題解決に向かう単元構想をする。

・課題解決に必要なスキルや知識を、単元を通して計画的・意図的に伝える。
・単元を通して、連続的な課題を提示する（一つの問題の解決が、次の問題となる）。
・単元全体を貫く共通問題（「共通テーマ」）となる現象を初めに提示する。
・生活にもどす課題（パフォーマンス課題）を設定する。

③「深める問い」を発問する。

既習事項を意図的に使わせてその内容を学び直すことのできるような発問（深める問い）を

することで、生徒に明確な学びの振り返りができるようにする。

以上のポイントをもとに、提案授業を３度行った。

１回目（７月 21 日）は、中学３年「遺伝の規則性と遺伝子」の単元で、ピーターコーンの種子が黄色より白がいつも少ない理由を考えさせた。仮説を立て、解決方法を考え実験を行うように授業を組み立てた。ICT の活用に重きが置かれてしまい、生徒の目的意識が不明確となった。生徒に「おや？なぜ？」とズレを持たせる課題提示の重要性を感じた。

２回目（10 月 12 日）は、中学１年「光の屈折」の単元で、お椀の底に置いた 10 円玉が水を注ぐと見えるようになる理由を考えさせた。図を使って説明する必然が生まれるように、水を寒天で固めて光の道すじを竹串で確認できるように工夫した。しかし、生徒の見通しが立つ前に教師から教材を提示したため、生徒に教材の必要感がなかった。なぜ竹串を寒天に刺さなくてはいけないのかがわかってやっている生徒が少なかった。

３回目（11 月９日）は、中学３年「イオン」の単元で、ダニエル電池の電圧を高める方法を考えさせた。イオンの動きを説明に取り入れさせるため、ボルタ電池の構造を学習してからダニエル電池を考えるように単元を組み立てた。しかし、電圧を高くするという目的を達成するためにイオンモデルを使わなければできないかといえばそうではなく、発問の検討が必要だった。

7　１年次の成果と課題

深い学びにいたるためのポイントそれぞれについて成果と課題をまとめる。

①課題を見出すために、生徒にズレを感じさせ、問いをもたせる。	
＜成果＞（以下省略） ・特記事項なし	＜課題＞ ・生徒自ら課題を見いだすことができなかった。 →教師が「ズレ」が何かを明確にできていなかった。計画段階で議論していく。
②単元を逆向きにデザインする。	
・単元終末課題に向けて単元を組み立てることで、課題解決に必要な知識などを計画時に明らかにできた。 →単元終了時に現象の仕組みを説明できる生徒が増えた。	・生徒の仮説が明確な理由に裏づいていない。 →単元（年間）を通して、問いと答えで授業を構成し、問いに対して学習した知識を活用した論拠のある仮説を立てさせてから、検証をさせる。 →授業フォーマットの工夫をする。
③「深める問い」を発問する。	
・現象の仕組みを繰り返し意識させることができた。 →話し合いの中で、「～だから○○」という発言が多く聞かれた。	・目指す生徒の姿が明確になっていないと、補助発問が曖昧になってしまう。 →生徒の目的意識を高めたり、継続したりすることが難しかった。

8　運営の成果と課題

(1) 成果

・提案授業に対する改善策を議論することで、目指す方向が明確にできた。

(2) 課題

・本時の深い学びに至った生徒の具体的な姿（書く内容や発話の内容など）と、なぜそう実感するすることが有効なのかという理由を教師が想定できていない。逆から単元構成できていない。

資　料

1　部会名　下越地区理科部会

2　郡市名　五泉・東蒲　　3　会場校　阿賀町立阿賀津川中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	五泉中学校・校長	大川正史
(2) 研究推進責任者	五泉中学校・教諭	石川公康
(3) 会場校責任者	阿賀津川中学校・教諭	石井大輔（授業者）
(4) 県･郡市指導主事	下越教育事務所・指導主事	渡邊幸太
(5) 研究推進委員	村松桜中学校・教諭	夏井隆志
	村松桜中学校・教諭	長谷川大輔
	川東中学校・教諭	西方貴子
	五泉北中学校・教諭	水口千尋
	三川中学校	上村　遼
	五泉中学校	渡邉拓真

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5.17／阿賀津川中学校	3	研究テーマの仮決定
2	6.12／五泉中学校	6	「深い学び」について検討
3	7.21／五泉中学校	8	提案授業（石川）：遺伝の規則性を活用した発展課題（ピーターコーンの遺伝） 授業協議会および研究テーマと「深い学び」についての再考
4	8.26／阿賀津川中学校	9	授業内容の検討（石井）および研究テーマと「深い学び」についての修正
5	9.29／阿賀津川中学校	6	授業内容の検討（石井）
6	10.12／阿賀津川中学校	8	提案授業（石井）：光の屈折 授業協議会
7	11.9／五泉中学校	9	1 年次のプレ授業（石川）：ダニエル電池を長持ちさせる方法を考え検証する 授業協議会
8	2023.2 月／五泉中学校		1 年次の成果と課題について
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　鈴木　有紀子
（学校名：　上越市立大潟町中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　英語

2　郡市名　　上越地区　　3　会場校　　上越市立八千浦中学校

4　研究主題

自分の考えや思いを英語で伝え合える生徒の育成

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

2021 年度から完全実施となった学習指導要領（外国語）の趣旨を正しく理解し、その目標を実現させるための取組を推進する中で、適切な言語活動を通して、目指す資質・能力を育成する方策を研究する。

英語力とは何か、目指す生徒の姿とは何か、主体的に学ぶ態度とは何か、どのように思考力・判断力・表現力の育成を図るか、どのようにすれば主体的に学んだり学び続けたりすることができるかなど、英語教育における課題は多い。さらに、新型コロナウイルス感染症予防に配慮した授業形態の工夫も求められている中で、英語でコミュニケーションを図る力を育成するにはどうすればよいかという課題もあり、英語教師は日々苦心しているところである。

また、全国学力学習状況調査やＮＲＴ等の各種調査・テスト等の結果から、上越地区の生徒の英語力は全国平均を下回っており、英語の学習に対して苦手意識をもつ生徒が多いことが明らかとなっている。

そこで、このような背景や実態を踏まえ、上越地区では「自分の考えや思いを英語で伝え合える生徒の育成」を研究主題として設定した。そして、本年度は、県中教研の重点目標「深い学びにいたる授業」を目指し、研究推進委員が互いに授業公開・参観をしながら、英語科としての「深い学びの姿」と「深い学びにいたるポイント」を明確にしていくこととした。これまでの県中教研指定研究の先行事例を基に、生徒が生き生きと英語でコミュニケーションを図ろうとしている姿、楽しく英語を使う中で有用だと思う表現を増やそうとする姿が具現化できるよう有効な手立てをさらに深化させ、主体的に学ぶ生徒を育てていきたいと考える。

6　研究の方法と内容

研究主題を具現させるための手立てとして、以下の３つのステップを設定し、上越地区の中学校において、授業研究及び実践を行った。

（1）STEP 1 「単元の明確な目的（ゴール）の設定と共有」

バックワードデザインにより単元指導の構成を工夫し、教師と生徒が目指す姿を共有して学びに向かう授業づくりを行い、指導と評価の一体化を目指す。

（2）STEP 2 「協働的に学ぶ場の設定」

具体的な目的、状況、場面等を設定したパフォーマンス課題を出題し、ペアやグループなど協働的に学べるよう学習形態や指導方法を工夫する。

（3）STEP 3 「ICT 機器を活用した学びの蓄積」

GIGA スクール構想による新しい学びの環境を最大限活用し、デジタル教科書やアプリを利活用した学びや録音・録画機能を活用した学びの蓄積など、ICT 機器を効果的に取り入れる。

7　１年次の成果と課題　（上越市学校教育研究会一斉研究における公開授業から）

（１）成果

・設定した単元のゴールや目指す姿を生徒に示し、共有することができた。

・ICT 機器を活用した言語活動に取り組み、授業者の熱意が伝わる授業公開となった。

・デジタル教科書や Jamboard を用いた教科書本文(Think)の内容理解の指導は、講義型（英文和訳型）の授業からの脱却を図る提案性の高い授業公開であった。英文の間違いは多く出ることもあるが、間違いを恐れず表出させる場の提供、それを授業内で気づき、気づかせながら accuracy を高めていく。

・家庭学習における ICT 機器の活用のアイデアを示せた。グーグルクラスルームを用いたワークシートの事前配布や、デジタル教科書を用いた音読練習。

・生徒の英語を使ってコミュニケーションしたいという気持ちが、活動に意欲的かつ楽しく参加する姿に表れていた。

（２）課題

・単元のゴールだけでなく、長期・短期でのゴール設定の工夫が必要である。

・協働的な学習の場を設定するだけで終わらずに、その場が成立するよう教師が更なる手立てを工夫する必要がある。（生徒の発話を整理したり、軌道修正したりすること。時間の設定をしたりグループ・ペア内での明確な役割を与えたりすること。グループ・ペアのメンバーを入れ替えて場を再設定したり、個別に支援したりすること等）

・ICT 機器を積極的に使用した授業実践継続し、改善しながら取り組んでいく。

・ICT 機器は、特に音声、パフォーマンスの蓄積に活用が期待される。生徒が視聴を繰り返しながら、自らのパフォーマンスが改善できるよう、授業展開、指導方法を工夫する。

・どのようなパフォーマンス課題が適切であり、指導と評価の一体化が図れるかを検討する。

・出口（ゴール）を見据えた上での、ICT 機器を活用した日常の学びの蓄積について実践していくことが必要である。

・Small talk や Teacher’s talk は、日常会話の小話で入っていき、日常生活と教科書題材を結び付けていくようにするとよい。

・一つ一つの言語活動（本時では、Jamboard を使った内容把握の Q and A）の適切な時間配分の設定、活動の目的の共有などが必要である。

・英語を聞くときには、それが初見のものであるか、また聞く意味のあるインフォメーションギャップを伴うものであるか、意味のある聞く活動になっているか配慮した活動にする必要がある。

・授業の振り返りでは、本時の学びと、単元終了時の目指す姿やパフォーマンス課題と関連付けて振り返るようにするとよいのではないか（パフォーマンス課題で活用できる英語表現や課題解決に必要なことを整理したりする場にする）。

8　運営の成果と課題　（上越市学校教育研究会一斉研究における公開授業から）

（１）成果

・広い教室を使い、多くの参観者に公開授業を生で見ていただくことができた。また、サテライト会場（ライブ配信）を用意したことで、参観者の密をさけることができた。

・授業後の研究協議会では、少人数グループでの協議場面を設定し、参観者の発言機会の確保及び平等性を図ることができた。

（２）課題

・協議会は、生徒の姿の変容、STEP１，２，３が有効であったかを中心に協議する。そのために、生徒の変容を見とることができるよう、生徒の顔や活動の様子が見える公開授業教室を工夫する。また生徒個々の変容について記録できるよう参観者に座席表を配付する。

資　料

1　部会名　英語

2　郡市名　上越地区　　3　会場校　上越市立八千浦中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育事務所・指導主事	桑原　正博
(2) 研究推進責任者	上越市立大潟町中学校・教諭	鈴木　有紀子
(3) 会場校責任者	上越市立八千浦中学校・教諭	田中　健昭
(4) 県･郡市指導主事	上越市教育委員会・指導主事	内藤　雅代
(5) 研究推進委員(授業者)	上越市立八千浦中学校・教諭	田中　健昭（授業者）
	上越市立春日中学校・教諭	立川　史也
	上越市立浦川原中学校・教諭	樋熊　綾子
	上越教育大学附属中学校・教諭	中村　岳

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 7 日／八千浦中	7	研究組織、英語教育の課題等協議
2	7 月 15 日／春日中	6	授業公開、協議会
3	8 月 4 日／八千浦中	7	研究主題と STEP の決定
4	9 月 12 日／八千浦中	7	授業公開、協議会
5	10 月 17 日／浦川原中	6	授業公開、協議会、一斉部会指導案検討
6	10 月 19 日／附属中	7	授業公開（オンライン)、協議会
7	11 月 15 日／八千浦中	8	上越市学校研一斉部会 授業公開、協議会
8	11 月 21 日／大潟町中	7	研究 1 年目の成果とまとめ
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　渡邊　義宏
（学校名：燕市立燕中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　英語（中越地区）

2　郡市名　　燕市・西蒲原郡　　3　会場校　　燕市立燕北中学校

4　研究主題

目的・場面・状況に応じて、自分が言いたいことを適切な表現を用いて伝えることができる生徒

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

単語や重要表現、文法などの基礎知識を活用し、予め決められたシチュエーションで「読む」「書く」「聞く」「話す」ことは概ねできる生徒が多いように感じる。しかしながら、その場で与えられた「目的・場面・状況」に対して、即興で自己表現ができる生徒は少ない。実生活で英語を話す場面を想定したときに、自分が予想だにしていなかった場面で会話をする機会がとても多いように思える。相手が必ずしも自分が想定した返事をしてくるとは限らない、会話の途中で突然状況や場面が変わるかもしれない、自分の考えを伝えなければいけない場面が突然発生するかもしれない、など数え上げればいとまがない。そんな時に必要とされるのは伝える力である。それを実現するための研究主題が「目的・場面・状況に応じて、自分が言いたいことを適切な表現を用いて伝えることができる生徒」である。上記の研究主題を達成できたとき、生徒は英語を学ぶことの喜びや意味を感じることができると願い、この研究主題を設定した。

次に、「深い学びの姿」についての詳述である。私達推進委員が考える深い学びの姿とは「他の生徒との学習活動（関わり合い）を通して、以前よりも互いの知識や技能が向上すること」である。特に、音読や英会話では自分が話す英語に対して相手が評価やアドバイスをすることで課題が生まれ、それをクリアすることでより良い表現ができるようになる。また、英作文においても読み手である他の生徒から「伝わりやすさ」「表現の正しさ」などについてフィードバックを受け、修正することでより洗練された英文が書けるようになる。このように考え、ペアやグループ活動の機会を積極的に増やし、互いに高め合えるような学習環境を提供してゆく。

6　研究の方法と内容

「目的・場面・状況に応じて、自分が言いたいことを適切な表現を用いて伝えることができる生徒」を育成するために、以下の手立てが大切であると考え、研究・実践を行ってきた。

（1）「導入」の強化

会話に必然性を持たせなければ、生徒は自分から進んで表現しようという気持ちは起きにくい。そのため、導入では生徒に興味・関心が沸くような場面を見せ、そこから英会話の必然性が生まれるような場面設定を意識した。例えば、２年生の「電車の乗り換え　～道案内～」の学習では次のような場面を設定した。自校の ALT と偶然、駅で会った。生徒（自分）が声をかけたとき、ALT は○○駅へ行きたいがどのように行ったらよいか分からず困っている様子であった。そこで生徒（自分）は路線図を参考に英語で道案内をしてあげることにした。このよう

な会話場面の動画を撮影し、導入で生徒に見せることで興味・関心が沸き、また今後の活動の目標や見通しを持たせることができた。

（２）「教え合い・学び合い」を狙ったペア・グループ学習

「電車の乗り換え　～道案内～」ではペアで会話をし、その様子を動画として記録した。会話後、ペアで動画を見て改善点について話し合いをし、それを意識した上で再度会話に臨むという活動を行った。自分では思いつかなかったことがペアの生徒からアドバイスとして出されるなどペア学習のメリットがあった。また、そのような学習形態をとるためには日頃の授業における生徒指導や温かみのある授業の雰囲気づくりが欠かせないということも確認することができた。

7　１年次の成果と課題

〈成果〉

○会話の場面設定の導入部に力を入れることで、生徒は学習意欲を高め、目標と見通しを明確にして学習に取り組むことができた。

○ペアやグループなどの学習活動を通し、互いに教え合いながら学習を深めることができた。

○他の生徒との関わり合いを基調とする英語学習では、いかに普段から英語が話しやすい雰囲気をつくるか、どの生徒も誰とでも話ができるような関係性を教師が育成できるかが大切であると学んだ。そのためには、まずは教師が進んで英語で表現しようとする姿勢を見せたり、関わり合いで困っている生徒に対してそっと手を差し伸べたり、様々な生徒が交流を深められるような学習支援を提供することが必要だと感じた。

〈課題〉

△さらに興味・関心が高められるような導入をする。

△様々な場面設定を用意し、徹底した会話練習で、即興で表現できる力を伸ばす。

8　運営の成果と課題

〈成果〉

○推進委員会の会議では、多くの先生からアドバイスをもらい、メンバー全員の力でより良い授業づくりができた。

○研究授業当日の仕事分担を細かく確認し、スムーズに研修会を進めることができた。

○小まめに連絡を取り合い、連携・確認しながら確実に仕事を行うことができた。

〈課題〉

△指導者の先生とのスケジュールが合わず、限られた機会での参加となってしまった。次年度では、互いのスケジュールを確認した上で、指導者の先生の予定を考慮して計画を立てる。

資　料

1　部会名　英語（中越地区）

2　郡市名　燕市・西蒲原郡　　3　会場校　燕市立燕北中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	長岡市立旭岡中学校・校長	今泉　祐治
(2) 研究推進責任者	燕市立燕中学校・教諭	渡邊　義宏
(3) 会場校責任者	燕市立吉田中学校・教諭	中川　大地
(4) 県･郡市指導主事	燕市教育委員会・指導主事	篠崎　健太郎
(5) 研究推進委員(授業者)	燕市立燕北中学校・教諭	渡邉　朝博
	燕市立燕北中学校・教諭	横田　亜紀子
	燕市立吉田中学校・教諭	二瓶　綾子
	燕市立吉田中学校・教諭	北山　舜
	燕市立分水中学校・教諭	古市　友美
	燕市立小池中学校・教諭	木寺　絵美
	弥彦村立弥彦中学校・教諭	堀田　利価

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６月２４日 / 燕中学校	8	県中教研テーマの共有、目指す授業について検討
2	８月１９日 / 燕中学校	6	プレ授業①　指導案検討会
3	９月２９日 / 吉田中学校	9	プレ授業①　授業者　中川　大地（吉田中学校）
4	１０月２１日 /燕北中学校	6	プレ授業②　指導案検討会
5	１１月９日 / 燕北中学校	9	プレ授業②　授業者　渡邉　朝博（燕北中学校）
6	１２月６日 / 燕中学校	8	今年度の活動の振り返り（成果と課題）
7			
8			
9			
10			

令和4年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小田　久美子
（学校名：　新潟市立新津第二中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1 部会名　英語

2 郡市名　新潟　**3 会場校**　新潟市立鳥屋野中学校

4 研究主題

主体的に学び合う生徒の育成
～４技能５領域における思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

昨年度の新学習指導要領の完全実施を受け，英語教育も大きく改革を迫られた。主体的に学ぶ態度の育成，思考力・判断力・表現力の育成による深い学び，指導と評価の一体化など，私たちが直面している課題は多くある。

新潟市が目指す深い学びの姿とは，主体的に自分の考えを発信し，対話を通してお互いの考えや表現の豊かさを学び合う生徒の姿である。思考力・判断力・表現力を駆使しながら表現を工夫して自分や身の周りのこと，社会生活全般のことについて，お互いに意見の交流を英語で行うことができる姿と考えている。

新潟市中教研英語部では，一昨年度から「指導と評価の一体化のための資料」の作成を幹事が中心となって行い，Google Classroom の機能を活用して，新潟市内で資料共有を行ってきた。単元構想から逆算する指導計画，普段の授業におけるタブレット端末の活用法，生徒の「主体的態度」の育成に関するヒント，など，さまざまな観点から，資料を共有し，活用している。新潟市の目指す深い学びに一歩でも近づくことができるよう，情報発信と共有を行っている。

しかしながら，実際の授業の中で，いかに生徒が主体的に考え，学びを深めることができるのかについては，さらに研究を進めていく必要がある。また，市内で共有している資料を活用しながら，生徒自身の思考力・判断力・表現力を高めていくためには，どのような手立てが有効であるのかについてさらに研究を進める必要があると考えた。

中教研英語部の実践としては，ここ数年の間「話すこと」に焦点を当てた授業実践が多かったため，今年度は４技能５領域において，いかに学びを深めることができるのかについても研究を進めていきたい。この大改革に向かうには，新潟市全体で足並みを揃え，「チーム新潟市」として取り組んでいく必要がある。共有した資料をどのように実際の指導に生かしていくことができるのかを研修を通して学んでいくことで，「主体的に学び合う」生徒の育成を実現できると考え，本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

新潟市教育委員会が指導の重点に置いているのが「学習課題」とそれに正対した「まとめ」のある授業展開である。これまでも，「学習タスク」の段階において，生徒に問題意識をもたせたうえで，「学習課題」を提示することに重きを置いてきた。その「学習課題」の解決に向けて「学び合い」の活動を設定し，課題に正対した「まとめ」を行う。「まとめ」で提示されたことをもとに，習熟を図るための練習を行う。その際は，生徒一人一人に「めあて」をもたせ，練習後は「振り返り」を確実に行わせることが大切になる。

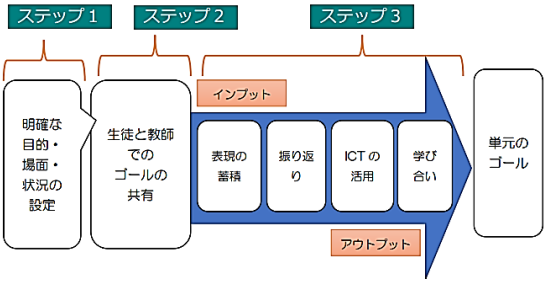
「学習」「練習」のタスクについては，新潟市で繰り返し研修を行い，かなり定着してきている。「学習タスク」の「分析する段階」においては，「学び合い」が有効となる。なぜ示されたモデルは「よく伝わる」のかについて，仲間と分析的に考える機会を設けることで，「思考力・判断力・表現力」の育成にも寄与する。

「練習タスク」においては，「分析する段階」での「まとめ」をよりどころとし，個々の能力を考慮した上で，互いのパフォーマンスについて推敲し合ったり，評価し合ったりする「学び合い」が

効果的である。この「練習」の段階で，生徒がさまざまな表現に触れることにより新しい気付きが生まれ，英語における「見方・考え方」が深まると考える。この指導法においては，最終的にどのようなタスクで生徒の到達度を見とるのかという「評価タスク」を決定したうえで，段階的な指導を展開していくことが重要であり，まさに逆向き設計の考え方に則っている。学習活動をこのように段階を追って丁寧に組織していくからこそ，生徒は自らの課題を認識し，どうやってパフォーマンスを高めていけばいいのかということについて，見通しをもつことができると考える。

今年度は，「学習」「練習」「評価」のタスクを通して力を身に付けさせることに加えて，「単元を通した指導」と単元のゴールに向かうための「明確な目的・場面・状況」の設定に特に重点を置いた。新潟市中教研として指導と評価に関する資料を作成する際に，次の５点に特に留意した。

（１） 逆向き設計による，活動の有機的なつながり
（２） 明確な目的・場面・状況の設定
（３） ICT の活用
（４） 相当する生徒のパフォーマンスの実際の把握
（５） 小学校のレディネスの考慮



生徒の動機づけをいかに明確なものとするかは，英語を使用する目的や場面や状況に大きく委ねられている。コミュニケーションを行う目的や場面・状況等を明確にした上で，生徒と教師で単元のゴールを共有し，ゴールに向かってスモールステップで向かっていく。表現の蓄積・振り返り・ICT の活用・学び合いを重視した活動を通し，生徒自ら主体的に活動する授業を目指した。

７ １年次の成果と課題

研究の成果としては，以下の３点が挙げられる。

（１） 「学習タスク」では「学習課題」と「まとめ」を，その「まとめ」を受けて，「練習タスク」では一人一人の「めあて」と「振り返り」を行うという授業スタイルが定着してきている。
（２） ICT を駆使して活動方法の説明を視覚的に提示することで，「練習タスク」の活動時間を確保することができる。
（３） 生徒自身がタブレット端末を活用して，プレゼンテーション資料を作成したり，即興で資料を提示したりすることができた。また，意見共有の場面でも有効に活用することができた。

一方，課題としては，以下の３点が挙げられる。

（１）評価方法やその明確な基準について，さらなる研修の必要がある。
（２）本年度は「話すこと」以外にも「書くこと」「読むこと」にも焦点を当てた実践を進めることができたが，教科書と結びつけた実践が少なかった。
（３）タブレット端末の有効な活用方法について今後も研修を重ねる必要がある。

来年度は，教科書を活用した深い学びへの取組と，タブレット端末の有効活用について研修を重ね，新潟市全体でその成果の共有を図っていきたい。

８ 運営の成果と課題

運営の成果として，今年度は研究推進委員会での授業研究の参加人数を極力減らした中でも，研究推進校の協力を得て，研究を進めることができたことである。研究発表会当日も，オンライン研修で行い，各校の取組について動画も交えて紹介することができた。また，新潟市内の英語科職員で Google Classroom の機能を活用し，日ごろの授業の取組内容や，ICT の活用法，指導と評価に関わる資料の共有を行ってきたことである。学校の枠を越え協力し合うことで，新しい学習指導要領に沿った指導・評価についての情報共有ができたことは，大きな成果と言える。

一方課題としては，推進校の先生方にとっては，各校での業務に加え，資料作成や授業公開における負担が増えてしまったことが挙げられる。また，研修会後の振り返りからも，ぜひ対面で生の授業を参観したいとの意見が多くあった。来年度は，２年次の発表となるので，感染対策を十分に講じた上で，対面形式での研修会の準備を行っていきたい。

資　料

1 部会名　英　語

2 郡市名　新　潟　　3 会場校　新潟市立鳥屋野中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市教育委員会学校支援課 指導主事	中川　久幸
	新潟市総合教育センター　指導主事	小林　英男
(2) 研究推進責任者	新潟市立新津第二中学校　教諭	小田　久美子
(3) 会場校責任者	新潟市立鳥屋野中学校　教諭	坂本　香名子
(4) 顧問	新潟市立坂井輪中学校　校長	石川　潤
	私立清心女子中学校　校長	佐久間　美左子
(5) 研究推進委員	新潟市立白新中学校　教諭	橋本　千裕
	新潟市立葛塚中学校　教諭	上村　慎吾
	新潟市立五十嵐中学校　教諭	山本　優子
	新潟市立寄居中学校　教諭	風間　皓介
	新潟市立宮浦中学校　教諭	梁川　暁男
	新潟市立下山中学校　教諭	山﨑　寛己
	新潟市立石山中学校　教諭	安宅　いずみ
（東地区会場校・授業者）	新潟市立鳥屋野中学校　教諭	松川　恵莉子
（東地区会場校・授業者）	新潟市立鳥屋野中学校　教諭	橋詰　亜矢
（研究推進校）	新潟市立上山中学校　教諭	駒澤　かおる
（研究推進校）	新潟市立曽野木中学校　教諭	渡部　美紀
（研究推進校）	新潟市立両川中学校　教諭	藤　智子
（西地区会場校・授業者）	新潟市立黒埼中学校　教諭	髙山　麻美子
（研究推進校）	新潟市立巻西中学校　教諭	藤本　あずさ
（研究推進校）	新潟市立巻東中学校　教諭	若月　真理子
（研究推進校）	新潟市立月潟中学校　教諭	山倉　裕子
（研究推進校）	新潟市立中之口中学校　教諭	菊澤　美樹

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	5/19　宮浦中学校	28	今年度の研究に向けた構想検討
2	6/30　巻東中学校	4	授業研究（３年　若月真理子教諭）の参観・協議会
3	7/6　黒埼中学校	10	授業研究（１年　髙山麻美子教諭）の参観・協議会
4	7/7　曽野木中学校	4	授業研究（１年　渡部美紀教諭）の参観・協議会
5	7/14　中之口中学校	2	授業研究（１年　菊澤美樹教諭）の参観・協議会
6	7/15　月潟中学校	4	授業研究（３年　山倉裕子教諭）の参観・協議会
7	8/1　新津第二中学校	16	研究主題に迫る手立て検討
8	9/14　上山中学校	6	授業研究（１年　駒澤かおる教諭）の参観・協議会
9	9/21　巻西中学校	3	授業研究（２年　藤本あずさ教諭）の参観・協議会
10	10/18　両川中学校	3	授業研究（１年　藤智子教諭）の参観・協議会
11	10/20　宮浦中学校	19	研究発表会の最終確認
12	11/10　宮浦中学校	18	一斉研修会当日（ZOOM 参加　約 160 名）

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　中山　えり子
（　学校名：　村上市立村上東中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　英　語（下越地区）

2　郡市名　　村上市岩船郡　　3　会場校　　関川村立関川中学校

4　研究主題

生徒の主体性を育み，見方・考え方に着目した授業の創造 ～生徒が生き生きと思いを伝え合う授業～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

2021 年度より，中学校英語の新学習指導要領では，聞く・読む・話す・書くの 4 技能を総合的に高めるための改訂が行われ，新たに「話すこと〔やりとり〕」の領域が設定された。これまで以上に「互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動」が重視され，テンポよく既習事項を応用・アレンジする即興性が重要となっている。

村上市岩船郡中学校教育研究会英語部研究推進委員会で、各委員所属校の NRT 結果を元に，当郡市の学習者の特性を分析したところ，中領域「話すことの基本的な表現」「身近なことを発表すること」「やりとりしながら話すこと」などの内容が全国平均に比べて低いこと，英語学習全般に苦手意識を感じている生徒の割合が多いことが顕著であった。簡単な表現を用いて「話すこと」はできるが，「書くこと」の正確性に欠ける傾向のある学習者も多く，指導に当たっては「話す」・「書く」の両側面からのアプローチが必要である。

そこで，自分自身で考え，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるために，目的・場面・状況などを具体的に設定し，既習事項を活用する言語活動を行うことと，単元内におけるインプットとアウトプットのバランスに留意することにより，英語で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成できると考え，主題を設定した。

6　研究の方法と内容

本郡市中教研英語部会では，「自分自身で考え、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と「英語で自分の考えや気持ちを伝え合う力」の育成を目指している。その達成のため，以下の手立てを用いて研究・実践を行っている。

手立て①　言語活動の工夫

(1)単元の目標の共有

各単元の最初にガイダンスを実施し，単元の目標、パフォーマンス課題とルーブリックを示すことで，生徒がねらいと見通しをもって学習に取り組めるようにする。

(2)場面設定の工夫

言語活動において生徒の表現しようとする意欲を高めるため，必然性のある場面設定の工夫を行う。例えば，海洋ごみ問題について自分の考えを述べる 3 年生の授業では，海洋国家出身でプラスチックゴミ問題への関心が高い ALT が，単元のはじめに海洋ごみの現状を説明し，

「あなたの考えを私に教えてほしい」と伝えることで，言語活動への意欲と関心を高めた。

(3)協働学習の場の設定

ペアやグループで，生徒が豊かな表現を互いに学び合い，自身の表現を見直す活動を繰り返すことで，よりよく分かりやすい表現につなげられるようにする。

手立て②　ICT の活用

(1)個に応じた学習支援

ロイロノート・スクールを用いて生徒の学習状況をモニタリングし，提出物にアドバイスを加えて返却することで個々の生徒にフィードバックし，個に応じた学習支援を行う。また，クラスルームを通じて資料や自主学習課題を提供することで，自主的な学習を促す。

(2)授業における生徒の ICT の活用

デジタル教科書を用いた音読練習，ジャムボードを用いた話合い，スライドを用いた発表活動，動画を撮影してのデリバリーの確認など，場面と状況に応じて ICT 機器を利用し，生徒の主体的な学習を促す。

7　１年次の成果と課題（11 月２日プレ公開授業での協議会から）

(1)成　果

・　生徒たちが単元の目標を意識しながら学習しており，自分の考えをしっかり伝えようという気持ちが伝わってきた。場面設定が良く機能していた。
・　ALT による問題提起が効果的で，生徒の「ＡＬＴに伝えたい」が伝わってきた。
・　他の良いモデルを共有し，それを自分の表現に取り入れるサイクルができていた。
・　相手を変えて繰り返し練習できたことで，生徒は自信をもって発表していた。
・　生徒がスライドを用いた発表の形に慣れていた。自分の発表を撮影した動画を見て振り返るのも効果的だった。

(2)課　題

・　生徒が自分事として捉えるためにも，より身近な課題設定の工夫が必要であった。
・　活動の際，聞き手は話し手の動画撮影も行っていたので，しっかりと聞いて評価することができていなかった。活動の内容を精選し，フィードバックの時間を十分にとるなどの改善が必要だった。
・　ＩＣＴ機器の活用（操作と動画確認）に集中し，内容面のブラッシュアップにつながっていなかったように感じた。
・　今回「伝える」活動が中心だったが，この授業の中でも「やりとり」する場面を加えることは可能だった。
・　郡市全体では，ＩＣＴの環境整備が十分でないところも多い。今回の授業を参観してロイロノートは有効であり，必須だと感じた。

8　運営の成果と課題

(1)成　果

・　郡市内で年４回、４校が授業公開・研修を行った。研究主題に則って各校授業づくりをすすめ，参観者が同じ視点に立って意見交換やアドバイスができた。
・　推進委員で役割を分担し，当日はスムーズに研修会を進めることができた。

(2)課　題

・　見通しをもって推進委員会を開催できるよう，校内の業務との両立，関係者・関係機関との連絡調整をスムーズに進めることが必要である。

資　料

1　部会名　英　語（下越地区）

2　郡市名　村上市岩船郡　　3　会場校　関川村立関川中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	県立教育センター副参事（指導主事）	下村　恵美
(2) 研究推進責任者	村上市立村上東中学校・教諭	中山　えり子
(3) 会場校責任者	関川村立関川中学校・教諭	曽川　信行
(4) 県･郡市指導主事	関川村立関川中学校・教頭	斉藤　望
(5) 研究推進委員(授業者)	村上市立神林中学校・教諭	中村　友哉
	村上市立山北中学校・教諭	川村　健一
	新潟県立村上中等教育学校・教諭	渡邉　桃子
	村上市立村上東中学校・教諭	倉町　幹子
（授業公開協力）	村上市立荒川中学校・教頭	小田　剛志
（授業公開協力）	村上市立朝日中学校・教諭	菅　優花

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	8 月 1 日／村上東中学校	7	研究組織・役割確認，研究主題と授業構想
2	8 月 26 日／村上東中学校	8	郡市内英語学習状況分析，目指す授業について検討，御指導（下村指導主事）
3	11 月 2 日／関川中学校	20	授業公開（プレ授業），協議会，御指導（下村指導主事）
4	12 月 2 日／荒川中学校	13	授業公開，協議会
5	12 月 5 日／朝日中学校	12	授業公開，協議会
6	1 月 31 日／神林中学校		授業公開，来年度に向けて
7	2 月／会場未定		来年度の基本計画づくり
8			
9			
10			

※「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　友野　敦子
（学校名：十日町市立松代中学校　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　中越・音楽

2　郡市名　十日町市・中魚沼郡　　3　会場校　十日町市立十日町中学校

4　研究主題

思いを合唱表現につなぐ指導の工夫

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

音楽科における「深い学び」は，自分の考えをもち，根拠をもって表現することと考える。また，他者の考えを知り話し合う活動は，自分の考えを深めるために大変有効である。そのため，合唱するだけで活動を終えるのではなく，合唱での表現を通して「思いを届ける」「思いを受け取る」という，交流による学び合いを体験させたいと考え，主題を設定した。

コロナ禍により歌唱活動が制限されている今だからこそ，音楽で「思い」を表現し伝え合うことの必要性を実感している。

6　研究の方法と内容

郡市内の中学校では，１０月・１１月に校内の合唱コンクールや合唱発表を実施している。また，今年度は２年間休止していた「郡市中学校音楽交歓会」を開催することになったため，各学校でこれらの発表の場に向けての合唱活動を生かし，指導方法を共有しながら研究を進めることにした。

（1）「思い①：合唱を通して，誰にどんな思いを伝えたいか」を考える。

楽曲の歌詞や曲想だけに注目するのではなく，聴く人を意識して自分の表現したい思いに注目させることで，より自分らしい歌唱表現を考えさせる。

（2）「思い②：歌詞の内容や曲の構造を理解した上で，どのようにこの曲を歌いたいか」を考える。

旋律，テクスチュア，強弱を知覚し，それらの働きが生み出す特性や特質や雰囲気を感受し，楽曲にふさわしい歌唱表現を考えさせる。

（3）自分たちが考える「思い①」「思い②」が伝わる歌唱表現について話し合い，追究する。

班ごとに話し合った考えを楽譜に記入し，タブレットで撮影してクラス全員で共有する。それを基に拡大楽譜を使ってクラスで話し合い，表現の統一を図っていく。

（4）郡市中学校音楽交歓会における合唱の発表と鑑賞

全中学校が演奏の前に「合唱表現に込めた思い」を発表することで，ただ聞くだけでなく，演奏する相手の思いを受け取る意識をもって聴くようにさせる。またこの経験を通して，「演奏を聴く人に届けたい思い」を更に明確にさせる。

郡市 11 校の発表は午前の部と午後の部に分けたが，業者による撮影・配信を行うことで全中学校が他校の「思い」の発表と演奏を聴くことができるようにした。(全体の撮影のみとし，個人の特定ができないように配慮。学校関係者限定の URL を発行し，閲覧を限定。)

７　１年次の成果と課題

（１）成果

今までは合唱を一方的に発表することが多かった活動が，今回の取組から合唱で「思い」を届ける，受け取るという考え方に変化してきた様子が伺える。合唱活動の中で生徒が記述した内容からも，「いつも支えてくれる家族に，合唱で感謝の思いを届けたい。」「一緒に部活動で頑張った仲間に，ありがとうの思いを伝えたい。」といった，自分の思いを表現する手段として考え，合唱に臨む姿が見られるようになった。

また，表現に生かすための曲の構造や楽典的な内容を読み込むための時間をしっかりと確保することで，全体的に読譜力が向上した。それは，生徒同士の話合いの中に強弱記号や音楽記号が使われるようになったことからも確認できる。

聴き方にも変化が見られるようになり，音楽的な表現や歌詞の内容に留意しながら聴こうとする生徒が増えてきている。

（２）課題

「思い」を伝えるための演奏に必要な技術が伴わないことで，生徒が思うような表現まではなかなか至ることができない。どのクラスでも，活動の中で歌唱表現に必要な演奏技能の向上が課題になることが多い。楽曲全体の演奏を改善させる技術を身に付けることは時間的にも難しいが，生徒が改善を実感できる効果的な部分を教師が絞って取り組ませると次への学びの意欲につながるのではないだろうか。

週１時間の音楽の時数の中で話合いの時間と歌う時間を確保することが難しく，話し合ったけれど実際に歌ってみる時間があまりつくれなかったということも多々あった。音楽の授業ではできるだけ実技に重点を置き，クラスで話し合う時間を確保できるように学級担任と連携して進めていく必要がある。

８　運営の成果と課題

（１）成果

各校１名の教科の音楽担当者にとって，一堂に会して授業のあり方や指導方法について話し合う機会は大変貴重であった。また，郡市内の中学校が共通に取り組む行事である「郡市中学校音楽交歓会」を生かすことで，指導方法に関する課題に対して連携して取り組むことができた。

（２）課題

当初は，ネットワークを活用して十日町市内・津南町の中学生が音楽交流できるような取組を考えていたが，今のところはまだ目途が立っていない。今回，タブレットの活用などで協力いただいた十日町市教育委員会と相談して実現を目指したい。

郡市１１校の中で音楽の教諭が不在の学校への情報提供がうまくできず，共有して進めることが難しかしい場面があった。情報を共有する手段の検討が必要。

資　料

1　部会名　中越・音楽

2　郡市名　十日町市・中魚沼郡　　3　会場校　十日町市立十日町中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	魚沼市立広神中学校・校長	佐藤　孝子
(2) 研究推進責任者	十日町市立松代中学校・教諭	友野　敦子
(3) 会場校責任者	十日町市立十日町中学校・教頭	伊藤　貴史
(4) 研究推進委員(授業者)	十日町市立十日町中学校・教諭	本保　美帆子
	十日町市立中条中学校・教諭	髙岡　健太
	十日町市立吉田中学校・教諭	庭野　正宗
	十日町市立下条中学校・教諭	平片　佑季
	十日町市立水沢中学校・教諭	井戸川　奈央
	十日町市立中里中学校・教諭	中町　初美
	十日町市立南中学校・講師	品田　梓
	津南町立津南中学校・教諭	高田　奏

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/21　十日町中学校	10	研究主題について 音楽科における「深い学び」とはどのような姿か。
2	7/27　十日町中学校	9	研究主題の検討 表現技術の育成のために有効な指導についての話合い
3	8/19　松代中学校	9	指導者を交えての研究内容検討会。
4	9/7　十日町中学校	8	プレ授業公開の指導案検討 タブレットを使用した効果的な指導の研修（講師：十日町市指導主事）
5	11/2　十日町中学校	7	プレ授業公開の指導案・運営等の確認
6	11/4　十日町中学校	8	プレ授業公開
7	12/1　十日町中学校	7	１年次の考察 ２年次の準備
8			
9			
10			

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和　４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　岩﨑　かおり

（学校名：　　佐渡市立両津中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　音楽

2　郡市名　　佐渡市　　3　会場校　　佐渡市立佐和田中学校

4　研究主題

音楽を形づくっている要素を支えとして、思いや意図をもって表現する生徒を育てる

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

音楽科における「深い学び」とは、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせて知識技能を習得したり課題解決に向けて知識技能を活用したりする中で成立する学びであると考える。「音楽的な見方・考え方」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けて考えることである。生徒が音楽を形づくっている要素をより明確に意識し、それを手がかりとしながら、思いや意図をもって表現を工夫することが、音楽科における「深い学び」に至るカギとなると考え、上記の研究主題を設定した。

本研究の領域は創作である。曲作りは、ともすると中学生にとっては難しいと感じる生徒が多いと考えられる。しかし、中学生にとって少しずつ使い慣れていきたタブレットを効果的に活用し、手軽に楽しく取り組めるようにしたい。生徒が〇〇したいと思いをもって取り組めるよう、イメージや感情をいかに強くもたせるかを探りながら研究を推進していきたい。

6　研究の方法と内容

多様な見方・考え方ができるように、仲間と関わり合いながら根拠をもって生徒が活動に取り組めるようにした。根拠をもてるようにするために、知識・感受を伴わせて習得させることや技能を習熟させること、思いや意図をもって知識や技能を活用することができるような手立てをとっていきたい。音楽科における知識では、「曲想と音楽の構造との関わり」ということが大切なポイントとなってくるので、共通事項と関わらせて曲想を感じ取り、その理由を音楽の構造から捉えて理解する、という学習を基盤にしていく。仲間と関われるようにするために、日常の温かい学習集団形成やソーシャルスキルの育成とともに、仲間が共有できる課題設定や活動形態の工夫が必要である。

具体的には、生徒の生活や学びに結びつけることから、「佐渡の魅力」を伝えるための手段として、CM ソングをつくることを課題とした。まずは、日頃からテレビなどで耳にする CM ソングから旋律つくりに用いる音楽要素を見つけていく。次に、旋律つくりであるが、それには Song Maker を用いた。まずは操作に慣れるために使い方を理解し、指定された条件で簡単な旋律をつくることからチャレンジした。Song Maker の使い方を理解したところで、キャッチコピーをもとに旋律つ

くりを行った。旋律をつくるための条件を理解し、言葉のリズムやまとまり、抑揚などを生かしながら活動した。その際、旋律をつくるための表現の工夫について、根拠をもって考えたり説明したり客観的に捉えたりして、旋律を完成させていく。生徒が抱いたイメージが音楽に生かされたり表れたりしていけることを目標に授業を展開した。

７　１年次の成果と課題

プレ授業では、授業者の細やかな準備がされていたこと、総合的な学習の時間と内容が結びついていて生徒にとって身近なキャッチコピーであったことなどから、生徒の前向きな点や良い変容が多く見られた。「明るくする⇒音を上げた」「ラストは落ち着いた感じにする⇒順次進行に」など音楽的に考えながら活動している面が見られた。

今後の課題としては、年間指導計画において、既習事項を確認して、本時の授業の学びにつなげていくようにしたい。

８　運営の成果と課題

佐渡市小中音楽部夏季実技研修会でＩＣＴを活用した研修を企画し、埼玉県戸田市立戸田東小学校の小梨貴弘先生からオンラインで講習をしていただいた。音楽の授業での実践的なＩＣＴ活用を紹介してもらい、すぐに実践に生かすことができた。

プレ授業では、新潟大学名誉教授の伊野義博先生に指導者を依頼し、助言をいただいた。そこで、これから取り組んでいくことが明らかとなった。学びのねらいやつけたい力を明確にし、１年⇒２年⇒３年の年間指導計画を作成していくことが大切である。今後、研究推進委員会で準備を進めていきたい。

資　料

1　部会名　音楽

2　郡市名　佐渡地区　　3　会場校　佐和田中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	両津中学校・校長	嶋見　靖之
(2) 研究推進責任者	両津中学校・教諭	岩城かおり
(3) 会場校責任者	佐和田中学校・教頭	金子　幸弘
(5) 研究推進委員	佐和田中学校・教諭	山本美保子（授業者）
	金井中学校・教諭	前山ちひろ
	畑野中学校・教諭	安藤　京子
	松ヶ崎中学校・教諭	村川比奈子
	南佐渡中学校・教諭	加藤麻里子

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６／２（木） 金井中学校	4	研究推進委員会組織、研修計画を作成した。領域・授業の構想について意見交換し、「目指す深い学びの姿」とその実現に向けて、解決の方向性を探った。
2	７／２９（金） 金井中学校	4	２年次の公開授業に向けて、題材で目指す姿を確認した。ＩＣＴを効果的に活用しながら創作活動に取り組むことについて話し合った。その後、プレ授業の構想について協議し、「佐渡の魅力」をＰＲしていくためにタブレットを使ってＣＭソングを作る展開について検討した。
3	８／１９（金） 両津中学校	6	授業づくりの研修会を行った。常時活動や日々の積み重ねが大切であること、言葉の抑揚とイメージとの関連、イメージに合った旋律づくりなどについて考えた。
4	１１／２５（金） 金井中学校	7	プレ授業を行った。授業後の研究協議では、話し合いの視点をもとに、生徒の変容や深い学びにつながる姿などについて、意見交換をした。指導者から的確な指導講評をいただいた。
5			

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　飯塚　貴弘
（学校名：　上越市立直江津東中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　上越地区保健体育

2　郡市名　　上越市　　3　会場校　　上越市立柿崎中学校

4　研究主題

深い学びにいたる授業　～学び合う授業を通して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成のため、上越地区保健体育部では、目指す生徒の姿として「主体的に考え、仲間と課題解決に向けて進んで取り組む生徒の育成」を掲げた。生徒が自ら課題を発見し、解決するなどの学習をバランスよく行うことで主体的で深い学びが広がり、目指す生徒の姿に結びつくと考えた。

そのための手法として、ICT の活用と深い学びにつなげるための学習カードの工夫を行った。体育の授業で必要な運動量をきちんと確保しながら、視点や考え方を示し、学び合う場面を設定し、生徒の主体的な学習を引き出したいと考え、主題を設定した。

6　研究の方法と内容

単元を「柔道」と設定した。柔道の授業は教師側からの一方的な教えこみによる技術指導で時間を使ってしまうことがあるが、本研究では教師側からの指導の時間を短くして、仲間と学び合うための時間の確保を意識した。また、柔道の授業は２人組のペアで学習する場面が多い。同じ相手と学習を進めていくことにより、学習の流れがスムーズになり学習したことが定着しやすい面がある。一方で、複数の相手と学習することで新しい気付きや学びがあり、学習が深まることが考えられる。そこで、単元を通して少人数のグループ学習（３～４人）を基本とし、グループ内で教え合いや対戦を取り入れて学習を進めた。グループ学習に iPad を活用し、自己の動作を視覚的に確認したり、仲間からアドバイスをもらったり、大画面に映した手本や良い例などを見たりした。

学習カードの工夫として、生徒に文章記述だけでなく、図解が書けるような大きな枠を設けて学びの過程や思考内容が見取りやすい書式にした。また、学習カードを毎時間回収し、次の時間に教師のコメントを入れて返却することで、疑問やつまずきへの対応、毎時間の変化をとらえてフィードバックしていくことでの深い学びにつなげた。

7　１年次の成果と課題

成果として、柔道の授業は他の単元よりも特に安全面に配慮する必要があるため、周囲との距離（グループとグループの間）を確保して実施するように努めた。また、単元のはじめのオリエンテーションの際に、安全上の留意点を生徒と一緒に考え、気を付けるようにした。そうすることで安全上のポイントが生徒にとって明確になったように感じる。

また、授業の流れを基本練習→ICT→学び合い→振り返りとし、生徒に分かりやすく展開した。グループ毎に役割を決め、対戦や学び合いを行った。やってみることで動きの確認ができ、話し合ったことで更に動きに気づきが生まれたように感じる。また学び合いによって積極的な意見交換が生まれ、課題を解決しようとする生徒の姿が多く見られた。ICT 活用やグループ内で話し合ったことで崩しの動きに気づきが生まれた。

課題として、組み合った状態からのスタートに限定することで、更に焦点を絞って柔道の醍醐味である「崩し」に着目できたのではないかと考える。学習カードの思考内容については、他の単元でも活用することで生徒に慣れさせていく必要があると実感した。

8　運営の成果と課題

武道場が手狭であり、柔道の特性から人との距離が近くなってしまうこともあったが、感染症対策をきちんと行い、安心して運営できるようにした。武道場の出入り口に消毒液を設置し、授業のはじめと終わりに消毒をする。マスク着用、授業の終了後には消毒用モップで畳を消毒する等、感染症の対策を徹底できた。

数年ぶりの公開授業であったが、上越市内の各学校から体育科１名ずつ参加していただき、有意義な授業研究となった。研究推進委員から多くの意見、準備に協力していただき、チーム全体で研究を進めることができた。

資　料

1　部会名　上越地区保健体育

2　郡市名　上越市　　3　会場校　上越市立柿崎中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	上越教育大学大学院・教授	周東　和好
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津東中学校・教諭	飯塚　貴弘
(3) 会場校責任者(授業者)	上越市立柿崎中学校・教諭	村山　浩
(4) 研究推進委員	上越市立頸城中学校・教諭	髙橋　麻由美
	上越市立城東中学校・教諭	室橋　健太郎
	上越教育大学附属中学校・教諭	金子　秀史

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月2日／直江津東中	6	主題設定、研究方法と内容の検討、学び合い授業実践の共有
2	9月15日／柿崎中	6	研究内容と内容の検討・決定、指導案検討
3	10月20日／直江津東中	5	当日の役割分担・指導案検討
4	10月26日／上教大	3	当日の打ち合わせ、指導案検討
5			
6			
7			
8			
9			
10			

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　阿　部　　健
（学校名：　　新潟市立木戸中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　　保　健　体　育

2　郡市名　　新　潟　市　　3　会場校　　新潟市立白根北中学校

4　研究主題

課題をもち、主体的に学び合う生徒の育成 ～深い学びにいたる、わかる・できる授業を目指して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

保健体育科の目標である「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する」ことが重要である。その資質や能力とは、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとするとともに、公正、協力、責任、参画などの運動への意欲や健康・安全への態度、運動を合理的に実践するための運動の技能や知識、それらを運動実践に活用するなどの思考力や判断力などを指している。

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するためには、従来の一斉指導スタイルに見られる受動的な学習スタイルでは限界があり、能動的な学習スタイルへの転換が求められている。体力の向上、技能の伸長は重要であるが、教師主導の学びにしてはならない。

そのため、次のように単元等での学びを深めていくことを考えた。

① 運動のもつ楽しさや喜びに十分にふれさせ、
② 仲間と積極的にコミュニケーションをとりながら課題を発見し、
③ 筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合い実践し、
④ 実践を振り返り評価し、改善や試行錯誤をくりかえしながら課題を解決していく。

生徒が自らの課題を発見し、解決するなどの学習をバランスよく行うことで主体的な学び、深い学びが広がり、保健体育科の目標達成に結びつくと考える。

これらの学びの推進を通して学び合いの質を高め、「わかる」と「できる」が一体となり、深い学びにいたる手立てやその往還を具現化していくことが、眼前の生徒の生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力を育むことにつながると考え、本研究主題を設定した。

6　研究の方法と内容

教師側から提示された「学習課題」を解決するような一方向に流れる授業では、生徒自らの困り感や必要感に迫ったものに成り得なかった感がある。それゆえに課題の発見や課題解決に向けた話し合い活動も深まらず、主体的な学び合いには至らないことが多く見られた。

そこで研究推進委員会では、県中教研保健体育部から提案された「学び合い１０」の視点を重視し、生徒同士が学び合いを往還しながら高め合う場を設定する授業の創造を試みた。

より主体的な学習活動を促すために欠かせない必要感や困り感のある課題設定、その課題を生み出すための働きかけはどうあるべきか。個人の課題やチームの課題を解決するための手法としてのファシリテーションの有効な活用方法はどうあるべきか。課題解決のための有効な ICT の活用方法はど

うあるべきか。これらの視点は「学び合う」授業を創造するための拠り所となっていくと考える。モデル授業では、どのような場面でファシリテーションを手立てとして活用することが有効であるか、ICT のより有効な活用方法はどうか、生徒の表情や会話のやりとり、記述等の様相にも着目しながら改善を試みてきた。

7　１年次の成果と課題

保健分野「心の健康（心身の機能の発達と心の健康）」の単元で研究が行われた。欲求への対処について、シンキングツール（座標軸）を用いて分類し、欲求が満たされない際にどのような行動をとるべきかを考える活動を通して、適切な問題解決が大切であることに気づかせることをねらいとした。

座標軸に、事前に用意した行動パターンと自由記述の行動パターンを準備し、座標軸のどこに位置づけられるかを班ごとに考え意見交換を行った。

成果としては授業で使用したシンキングツールについて、視覚でとらえることができること、仲間と関わり合いの活性化につながったこと、学習課題を自分事としてとらえることができたことなど、有効性が認められた。

課題としては、自由記述の行動パターンがあったが、もっとそこに焦点を当てることができたのではないかということ。行動パターンの整理の仕方や根拠があるとより実生活につながるということ。まとめや振り返りの仕方について改善点があることが分かった。

8　運営の成果と課題

令和１年度～３年度の県指定研究２年目発表の際は、市中教研の一般部員の参加はできず幹事のみの公開授業であった。しかし、今年度は同じ地区の体育主任が参加することができ、授業者にとっても、また参加者にとっても有意義な時間となった。参加者による密を避けるため、自教室ではなく広めの特別教室を使用して授業を行うなど感染症対策を講じて行うことができた。県指定研究の公開授業の様子を市中教研保健体育部の一斉研において、参加できなかった一般部員へも共有することができた。

資　料

1　部会名　保　健　体　育

2　郡市名　新　潟　市　　3　会場校　新潟市立白根北中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	音　田　和　行
(2) 研究推進責任者	新潟市立木戸中学校　・教　諭	阿　部　健
(3) 会場校責任者	新潟市立白根北中学校　・教　諭	新　井　慧　真
(4) 研究推進委員	新潟市立木戸中学校　・教　諭	笠　原　和　子
	新潟市立新津第二中学校・教　諭	金　谷　諭
	新潟市立金津中学校　・教　諭	渡　邊　譲
	新潟市立藤見中学校　・教　諭	小　田　一
	新潟市立松浜中学校　・教　諭	田　中　実　子
	新潟市立中之口中学校　・教　諭	星　野　修　也
	新潟市立東新潟中学校　・教　諭	小　柳　翔　太
	新潟市立木崎中学校　・教　諭	近　川　雅　人
	新潟市立新津第一中学校・教　諭	捧　博　陽
	新潟市立新津第五中学校・教　諭	横　土　謙

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	８月２５日／ 新潟市立巻東中学校	１７	・１年次の授業構想について 指導案の問題点、手立ての有効性と視点について 主体的に学ぶ生徒の育成を目指し、深い学びにつながるための効果的な教材や有効な ICT の勝ち羽用について検討することができた。
2	１０月２０日／ 新潟市立白根北中学校		・1 年次プレ授業公開 実施者：新潟市立白根北中学校　新井　慧真教諭 「保健分野　心の健康（心身の機能の発達と心の健康)」 ・ＦＴによる研究協議会の実施 ICT の活用と関わり合う授業を通して学習課題からまとめまでの流れや、より深い学びにつながる手立てや視点について協議し、次年度へ向けた具体的な改善点が見つかった。

様式③　指定研究　経過の概要報告書

令和　４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　髙澤　美雪
（学校名：　長岡市立東中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　学校保健部会

２　郡市名　長岡市・三島郡　　３　会場校　長岡市立与板中学校

４　研究主題

自らの不安や悩みに向き合い、課題を解決する力を育てる心の健康教育
～「ＳＯＳの出し方に関する授業」を通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

現在、コロナウイルス感染症流行の影響もあり、自殺した児童生徒数は増加傾向にある。平成２９年に閣議決定された「自殺総合対策大綱」で、学校におけるＳＯＳの出し方に関する教育の推進が求められていることから、新潟県教育委員会では令和４年度に新潟県自殺予防プログラム（小中学校編）を作成した。

長岡市においても、人間関係等で課題を抱える生徒が各校で課題となっている。中学生は心身の成長段階にあり、不安や悩みがあっても自分で認識できなかったり、自分の中で抱えて身体症状や不登校傾向、自傷行為等として表出したりするケースが多い。長岡市では、令和３年度から市の保健師を中心に、ＳＯＳの出し方教育を進めており、教員向け研修会やモデル校での実践を進めている。

生徒が自分の悩みや不安を認識し、相談等の適切な対応方法を身に着けるためには、発達段階に応じて系統的に学習を進めることが必要である。また、生徒が不安や悩みを表したときに、気付いたり受け止めたりできる校内環境や悩みを言いあえる人間関係づくりも重要となる。そこで本研究では、校内環境づくり、人間関係づくりを土台として、生徒が自らの不安や悩みに向き合い、解決できる生徒を育てるため、この主題を設定した。

本研究では、目指す深い学びの姿を、「自分の心と体に向き合い、自他との対話を通して適切な意思決定や行動選択について、根拠を持って考える生徒」とした。

中学生は、不安や悩みがあっても学年が低いほど自分の中で認識できない生徒が多い。不安や悩みを自分のこととして認識するためには、自分の気持ちを内省し、自分の気持ちを考えたり言葉にしたりする過程が必要であると考える。また、不安や悩みの対処方法は多くの選択肢があり、どの方法もメリット・デメリットがある。生徒が自分の経験や学習内容を想起し、他の生徒の意見を聞きながら、自分なりの根拠を持って思考を深める姿を目指したい。

６　研究の方法と内容

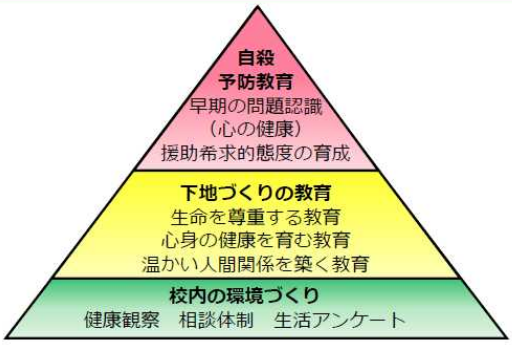
「子供に伝えたい自殺予防　学校における自殺予防教育の手引き」（文部科学省　平成 26 年 7 月）では、自殺予防教育の目標と内容として図 1 のように示されている。

＜図 1＞

＜自殺予防教育の目標と内容＞

目標：① 早期の問題認識（心の健康）
② 援助希求的態度の育成

内容：① 長い人生において問題を抱えたり危機に陥ったりしたとき、問題を一人で抱え込まずに乗り越える力を培う。
② 自分自身や友達の危機に気付き、対処したり関わったりし、信頼できる大人につなぐことの重要性を伝える。



「子供に伝えたい自殺予防　学校における自殺予防教育の手引」（文部科学省　平成 26 年 7 月）

これを受けて本実践では、次の 3 点について取組を行う。

（１）自殺予防教育（ＳＯＳの出し方に関する授業）

○１年生

・保健体育科保健領域「心身の機能と心の健康」

・保健師による「ＳＯＳの出し方教育」　不安や悩みを感じた時の対処方法

○２年生　　新潟県自殺予防プログラムに沿った実践

・「悩みの種との付き合い方を考えよう」⇒１年次公開

・「相談の仕方を考えよう」

○３年生　　新潟県自殺予防プログラムに沿った実践

・「相談のＳＯＳの受け止め方を考えよう（ＳＯＳの受け止め方)」

（２）下地づくりの教育

生徒が不安や悩みに直面したときに、（１）で学習した内容を活用するためには、行動に移すためのスキルや日頃の温かい人間関係づくり、心身の健康が大切であり、次の取組を行う。

①生命を尊重する教育

・２・３年生でがん教育、いのちの教育（性と生に関する教育）を実践する。

②心身の健康を育む教育

・年３回「ここからウイーク（こころとからだの学びのウイーク)」を実施。学習を含めた生活習慣や心の様子を考える機会とする。

③温かい人間関係を育む教育

・生徒会での縦割り・横割り班活動。

・特別活動でソーシャルスキルトレーニング（SST)、アサーショントレーニング（AT）を実施する。

（３）校内の環境づくり

生徒の不安や悩みに適切に対処するためには、生徒が不安や悩みを表しやすい環境づくり、教師が早期に生徒の心の変化に気付き受け止める体制づくりが必要である。学校全体で次のことに取り組む。

①健康観察

・毎朝の健康観察にタブレットを活用し、心の調子に関する項目を入れる。該当する項目にチェックを入れた生徒に対して、学級担任が声をかけ必要に応じて教育相談を行う。

②相談体制

・生活アンケート、教育相談を活用し、すべての生徒と学級担任が話をする機会を設定する。

・ＳＣや保健室の相談機能、学校外の相談機関を生徒に周囲する。

・職員を対象に「ＳＯＳの受け止め方研修」を行い、生徒から相談を受けたり、生徒のＳＯＳをキャッチしたりしたときの対応の仕方について、研修をする。

７　１年次の成果と課題

・長岡市内の中学生の意見文や合唱曲の歌詞を教材として活用し「悩みの種と向き合うための方法を考える」という視点から授業を行うことで、生徒は身近な問題として課題に取り組むことができた。

・研究推進委員がプレ授業公開を行い、実践を蓄積したことが、「ねらい」に迫るための教材開発や発問、グループ活動の工夫につながった。

・学級活動での授業、下地づくりの教育、校内環境づくりの３つの視点で取り組むことで今後の自校化に繋がる内容となった。

・今年度の「ＳＯＳの出し方に関する授業」を基に、次年度は「ＳＯＳの受け止め方教育」の実践を行い、研究主題である「自らの不安や悩みに向き合い、課題を解決する力を育てる心の健康教育」に取り組んでいく。

８　運営の成果と課題

・研推部内で役割分担（授業班と運営班）することでスムーズに運営することができた。

・研究推進委員と授業校の教職員で「ＳＯＳの出し方・受け止め方の研修」を行うことで、自殺予防教育への理解が深まると共に校内体制づくりの充実につなげることができた。

・新しい取組となる「自殺予防教育」は、指導計画の作成や指導時間の確保が困難であった。今後は各校での年間指導計画への位置付けも含め、今年度の実践を生かし、計画的に進めていく。

・次年度も部内でのプレ授業を重ね、本発表に向けて準備をしていく。

資　料

1　部会名　学校保健部会

2　郡市名　長岡市・三島郡　　3　会場校　長岡市立与板中学校

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏名
(1) 指導者	県立教育センター　指導主事	町田　央子
(2) 指導者	長岡市立神田小学校　校長	田邊　輝明
(3) 研究推進責任者	長岡市立東中学校　養護教諭	髙澤　美雪
(4) 会場校責任者	長岡市立与板中学校　教頭	廣川　統
(5) 研究推進委員(授業者)	長岡市立与板中学校　養護教諭	浅沼　文子
	長岡市立山本中学校　校長	高橋　龍雄
	長岡市立南中学校　養護教諭	張戸　望
	長岡市立山本中学校　養護教諭	若杉　直子
	長岡市立大島中学校　養護教諭	鬼淵　理恵
	長岡市立中之島中学校　養護教諭	久住　祐子
	長岡市立三島中学校　養護教諭	古川　かおり
	長岡市立小国中学校　養護教諭	水科　歌織

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/17　与板中学校	2	研究推進委員会準備　研究組織・研究推進委員会計画検討
2	6/30　与板中学校	8	1年次研究計画の作成
3	7/15　与板中学校	6	単元・題材構成案の検討
4	8/5　与板中学校	6	指導案検討
5	8/22　与板中学校	3	1年次発表会　会場校との打ち合わせ
6	8/31　与板中学校	9	プレ授業本時指導案作成
7	9/26　南中学校	3	第1回研推プレ授業公開
8	9/26　与板中学校	9	「ＳＯＳの出し方・受け止め方」研修会（与板中研修と合同）
9	9/30　南中学校	2	第2回研推プレ授業公開
10	10/20　三島中学校	5	第3回研推プレ授業公開
11	10/26　中之島中学校	9	第4回研推プレ授業公開　協議会
12	11/16　与板中学校	7	本時指導案検討・発表会運営計画検討
13	12/9　与板中学校	4	第5回研推プレ授業公開「悩みの種との付き合い方を考えよう」授業者：浅沼文子　内海智子
14	12/13　与板中学校	34	プレ授業公開「悩みの種との付き合い方を考えよう」授業者：浅沼文子　渡邉健太朗
15	12/26　与板中学校	5	1年次研究のまとめ
16	1/24　与板中学校	7	次年度計画の検討

令和４年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

全県部長　　髙橋　由子
報告者氏名　福島　さとみ
（学校名：阿賀野市立笹神中学校）

このことについて，下記のとおり報告します。

1　部会名　二市北蒲中教研学校保健部会

2　郡市名　阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研　　3　会場　聖籠町立聖籠中学校

4　研究主題

対話を通して自己の考えを深化させる授業づくり ～中１保健体育『ストレスの適切な対処』実践を通して～

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

【主題設定の理由】

近年、複雑化・多様化する社会背景の中、ストレスを起因とする精神疾患は増加傾向にある。日々の保健室での健康相談でも、ストレスへの適切な対処ができず、身体症状や問題行動として現れるケースが見受けられ、ストレス対処の学習と日常での実践化の必要性を感じている。そこで、本研究では、自己の考え方や捉え方の傾向を知り、自己理解を深めること、他者と意見を交わすことを通して、自分なりのストレス対処法について考え、適切な意志決定や行動選択ができる生徒の資質・能力の育成を目指したい。

【目指す深い学びの姿】

・心と体のつながり、ストレス反応を知識として理解した上で、効果的なリラクセーションなど実践的対処方法を身につけることができる。

・自分の内面を言語化し、他者と意見を交わしながら、自己理解を深め、自分に合う課題解決法を考え選択することができる。

6　研究の方法と内容

【１年次】

単元：中学１年生保健体育「心身の機能の発達と心の健康」（エ）ストレスへの対処を扱う。

単元は４時間の構成とし、単元全体で見通しをもち知識や実践力習得を目指す。本時は単元の最後であり、ＴＴで授業を行う。リフレーミングを学び、実践する過程のなかで、自己理解や対話の場面を設け、それらが生徒の深い学びの姿につながり、手立てとして有効であったか観察やアンケートから検証する。

〈研究推進委員会〉４月～10 月

指導案、資料、単元構想シートの作成、検討。

〈指導主事講義〉８月・10 月

下越教育事務所、中山指導主事より研究の進め方、授業づくりについて講義いただいた。

〈プレ授業公開・協議会〉11 月

聖籠中学校で実施（対象：１年２組　生徒 36 名）。

〈評価〉10 月～12 月

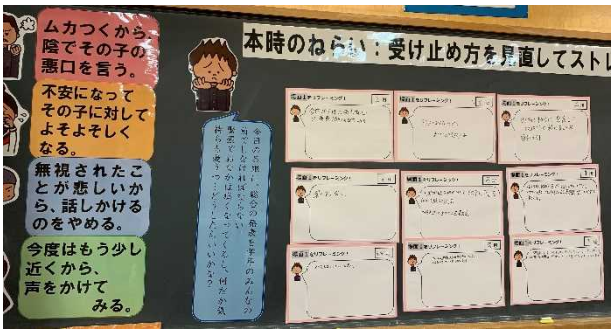
単元全体の評価は、授業前、授業直後、１か月後とアンケートを実施し、評価。

本時の評価については、生徒の観察と自由記述アンケートを実施し、評価。

7　１年次の成果と課題

（１）指導案検討や授業実践においての様子

様々な工夫を凝らし、生徒の心に響くような指導案を目指して検討を重ねたことで、実際の授業では自分事としてとらえ、積極的に話し合い活動に参加する生徒たちの姿を見ることができた。



（２）事前・事後（授業直後・授業１か月後）の変化

ストレスへの対処に関して、指導前と指導後（授業直後・授業１か月後）にアンケートを実施し、生徒たちの意識の変化を見取った。平均値を比較したところ、質問の６項目中５項目で指導後の上昇が認められ、５％水準、１％水準で有意差が見られた。【※４段階評定尺度法　※t 検定　n=22　**(p<.01)*(p<.05)】

（抜粋）	指導前	指導後		（指導前との）差	P 値
ストレスをため込まないようにするための方法を知っている。	2.32	授業直後	2.90	+0.58	0.00056**
		授業１か月後	2.91	+0.59	0.0099**
イライラしたり、悩んだり、不安になったりする時、見方や考え方を変えてみている。	2.82	授業直後	3.55	+0.73	0.00045**
		授業１か月後	3.27	+0.45	0.0044**
自分は、悩みを抱える友達に対して、前向きな気持ちになれる言葉をかけてあげられる。	3.27	授業直後	3.64	+0.37	0.0012**
		授業１か月後	3.50	+0.23	0.0048*

（３）自由記述からの見取り（指導時のワークシート／事後アンケートより）

・いろんな場面のリフレーミングをしてみて、ストレスをため込まないような考え方や、受け止め方を見直すことができるような言葉がけがよく分かりました。
・一人一人でとらえ方や考え方が違うということが分かりました。自分の中で解決していることがあって、友達が悩んでいたら、自分が解決できた方法やそのほかの方法を紹介してみたいです。
・受け止め方を変えたり、工夫したりすればストレスが減ることが分かりました。友達や学校のこと、これからの進路や将来についてもいっぱい不安やストレスがあったけど、受け止め方でストレスがなくなる方法を聞いて試したら、不安やストレスがいつもより減った気がしたので、とても安心したし、良かったです。

（４）授業における「生徒同士の対話場面」、「対話を通して自己の考えを深化させる場面」が弱かった。

「この授業では何をねらいとしてどんな問いを行うのか」といった点を、今一度深められるようにしたい。

8　運営の成果と課題（○成果・●課題）

○　二市北蒲中教研の部員の参集には遠方となることも考慮し、研推委員会は Zoom でのオンラインを活用して進めることができた。

○　年度当初に見通しをもち、４月の第１回部会にて研推委員会を立ち上げ役割分担を明確にできたことで、各所で準備を少しずつ進めることができた。

○　部員は若手が多いことから、指導主事に研究の進め方、授業づくりについて一から指導いただけるよう依頼し、個々の研鑽につなげることができた。

●　プレ授業の Zoom 配信について事務局との事前打ち合わせ通りにいかない場面があった。事前のテスト配信や日時の報告もしているが、授業当日は様々な事態に備え、事務局とスムーズに連絡がとれ、対応ができるようにしてもらいたい。特に、今回はプレ授業校・日程が他部会とも重なり、郡市の一斉研修日でもあったことから、会場校のサポートがほとんど得られないという実情もあった。オンライン配信という以前は無かった対応がプラスされているため、当郡市の当部会のように人数が少なく、若手が多いといった場合には、全県事務局でも地区事務局でもよいのでぜひお力添えをいただきたい。

資　料

1　部会名　二市北蒲中教研学校保健部会

2　郡市名　阿賀野市・胎内市・北蒲原郡　3　会場校　聖籠中学校（1年次）黒川中学校（2年次）

4　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	下越教育事務所	中山　小百合
(2) 研究推進責任者	阿賀野市立笹神中学校	福島　さとみ
(3) 会場校責任者	胎内市立黒川中学校・養護教諭	高橋　秀明
(4) 研究推進委員(授業者)	聖籠町立聖籠中学校・養護教諭	瀧澤　綾子
	胎内市立築地中学校・養護教諭	菅原　菊子
	胎内市立黒川中学校・養護教諭	榎本　真那香
	阿賀野市立安田中学校・養護教諭	吉田　真子

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月15日/Zoom会議	5	会場校・黒川中の生徒の実態や課題について共有。授業によって目指す姿について検討。
2	8月23日/黒川中学校	6	中山指導主事より、研究の進め方等についてご指導。単元構想シート・指導案検討。
3	9月28日/Zoom会議	5	単元構想シート・指導案について検討。
4	10月12日/聖籠中学校	10	単元構想シート・指導案について検討。プレ授業の役割分担・準備について検討。
5	10月19日/Zoom会議	5	単元構想シート・指導案について検討。プレ授業の役割分担・準備について検討。
6	12月12日/Zoom会議	6	プレ授業の成果と課題や次年度の運営について検討。
7	2月（日にち未定）	5	研推委員による授業の見せ合い。
8	2月（日にち未定）	5	研推委員による授業の見せ合い
9	2月（日にち未定）	5	7・8についての振返り、指導案修正。
10			